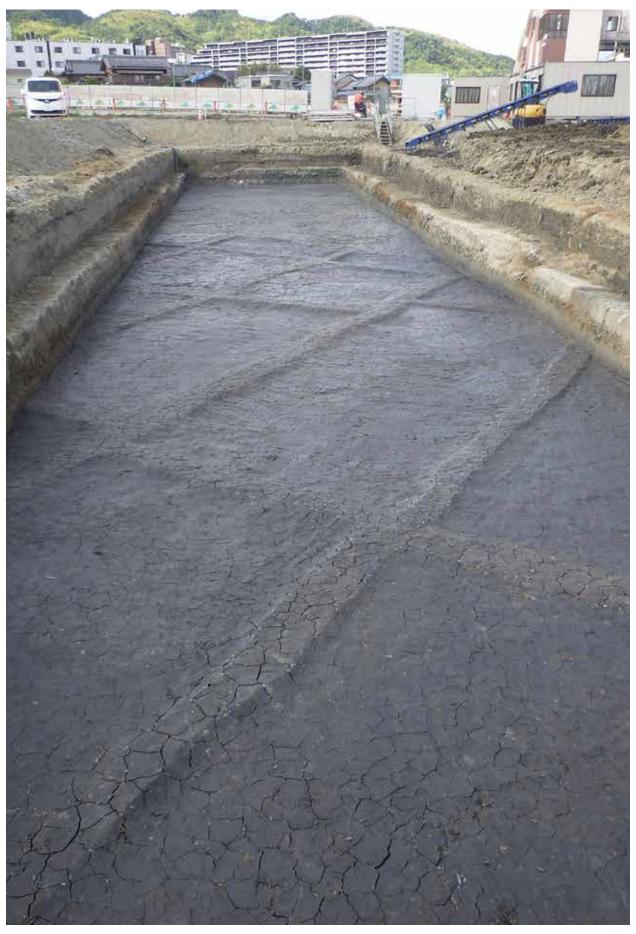
# 島本町文化財調査報告書

第 48 集

尾山遺跡発掘調査報告書

令和5年3月

島本町教育委員会



1. 3-1 区第2遺構面水田遺構(南西から)



1. 3-1 区第1遺構面 水田遺構(北から)



2. 6-1区第1遺構面001溝(南から)

# 序 文

本報告書は、令和4年度に実施した、尾山遺跡の埋蔵文化財発掘調査成果をまとめたものです。

尾山遺跡は、令和2年度土地区画整理事業の際に、埋蔵文化財調査を実施しており、 弥生時代から古墳時代にかけての水田をはじめ、鎌倉時代の池泉などが見つかってい ます。

今回の調査は、共同住宅建設工事に伴う発掘調査で、令和4年5月から6月末までの約2か月間、現地調査を実施しました。この調査の結果、弥生時代中期から古墳時代前期の水田や集落の溝、鎌倉時代後期から室町時代の畑などが見つかり、本町の古代から中世にかけての生産遺跡の一端が明らかとなりました。

本報告書が、学術研究はもとより、町民の皆様にも広く活用され、地域の歴史と文化財に関心を抱く契機になりましたら幸いです。

このような成果を得られましたのも、事業主をはじめ、調査地近隣の地元関係者や 関係諸機関の皆様のご理解とご協力の賜物です。改めてここに深く感謝し、お礼を申 し上げます。

令和5年3月31日

島本町教育委員会 教育長 中村りか



### 例 言

- 1. 本書は、島本町教育委員会が令和4年度に実施した、大阪府三島郡島本町桜井二丁目に所在する、尾山遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査名は、「OY22-1 尾山」である。
- 2. 本調査は、共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。現地調査及び整理調査は、島本町教育委員会の指揮監督の下に株式会社島田組が行った。

【委託事業名称】共同住宅建設工事に伴う尾山遺跡発掘調査

【調査面積】1,426 m²

【委託契約期間】令和4年5月16日~令和5年3月31日

【現地調査期間】令和4年5月17日~令和4年6月28日

【整理調査期間】令和4年6月29日~令和5年3月31日

3. 現地調査及び整理調査の体制は、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下に、下記の体制で実施した。

### 【島本町教育委員会】

島本町教育委員会 教育長 中村りか

島本町教育委員会事務局 教育こども部 生涯学習課 課長 安藤鎌吾

同 担当者 主查 木村友紀、三井義勝、賀納章雄

### 【株式会社島田組】

代表取締役社長 岩立二郎

文化財事業本部長 利川 昇、同 工事部長 足立英彦、同 調査室長 安川賢太

監理技術者 山本 瞬、南山昌彦

主任調査員 辻 広志

調査員 日紫喜勝重

測量員・調査補助員 永田紀博、西条洋樹、加藤優弥、内田 徹、越智理奈、芦田吉史

整理員轉谷雅幸、木村靖子、田中羽留香、井上昌子

- 4. 発掘調査は2班体制で辻、日紫喜が、測量は永田、西条、越智が、写真撮影のうち遺構写真は日紫喜が、記録写真は辻、日紫喜が、遺物の取り上げと管理を芦田が実施した。整理作業及び報告書作成は、遺物台帳の管理と洗浄・注記・接合等を芦田、木村ヶ、田中が、遺物実測・拓本・デジタルトレース・遺物観察表作成等を木村寺、田中が、平面図・壁面図・個別遺構図等のデジタルトレースを槫谷、越智、永田、西条が、挿図作成を辻、木村寺、田中が、遺物写真撮影を日紫喜が主に行った。
- 5. 本書の原稿執筆は、第1章第1節、第2章第3節は木村友紀が、第2章第1節は田中が、第2章第2節は 木村靖子が、第1章第2節、第5章第1節2・4・5・6-1区、第6章第3節は日紫喜が、その他は辻が行っ た。編集は、島本町教育委員会の指示の下に辻が行い、井上がこれを補佐した。
- 6. 発掘調査及び整理調査、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご教示、ご協力をいただいた。名前を記して、感謝の意を表します。(50音順、敬称略)

岡田賢、木村啓章、青木勘時

7. 本調査の記録及び出土遺物は、本町教育委員会において保管している。

### 月. 例

- 1. 遺構に使用した座標値は、世界測地系平面直角座標系VI(測量成果 2011)に基づいており、方位は平面直 角座標系に基づく座標北を北として表記し、本文中では単位の「m」を省略した。標高は、海抜高(東京 湾平均海面高度)を使用し、本文中では「T.P.」を省略した。
- 2. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(小山正忠他、2007年)に 準拠した。粒度及び面積割合は、駿河湾団体研究グループの粒度表を適時使用した。
- 3. 使用地図は、2,500分の1の地形図「島本町全図」(昭和62年測量、平成23年修正図)を調整して用いた。
- 4. 遺構平面図や個別の遺構図は、各図にスケールを掲載し、縮尺は 40・80・100・200 分の 1 を基本とするが、 遺構の規模や紙面に合わせて適時変更した。
- 5. 遺物実測図は、各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を4分の1とした。実測図の断面は、須恵器・ 陶磁器・鉄製品を黒塗りに、土師器・黒色土器・瓦器を白抜きに、瓦を斜線とした。遺物番号は、実測図・ 写真図版共に同一番号である。
- 6. 本書に収録した図・資料等の引用・参考文献は、各節又は各章の文末に明記し、本書の体載に合わせて縮 小又は拡大したものや、一部加筆したものを用いた。
- 7. 遺構番号は、各調査区毎に 001 で始まる 3 桁の通し番号とし、遺構の性格(種類・属性)は下記の呼称を 遺構番号の後ろに付した。遺構番号は、調査時に付した番号を、そのまま使用したものと、同一遺構を調 査区全体で理解しやすくするため変更したものがある。

洪水溝 (洪水時溢流河川・自然河道)、溝 (人工(化)河川・流路)、柱穴、杭穴、穴 (ピット)、窪、土坑、落ち込み、段差(段)、杭列(柵・塀)、掘立柱建物、竪穴建物、井戸、池泉、平坦面、畦畔、大畦(畦道)、小畦(手畦)、水口(給排水口)、水田(水田区画)、畑(畠)、耕作溝(畝溝・畝状窪み・素掘り溝)、耕作穴(植栽穴)、平場、池(溜池・湧水池)、谷地形(谷状地)、攪乱、不明遺構

- 8. 写真図版の撮影方向は、座標の東西南北を正確に示すものではなく、調査区のおよその東西南北で示した。
- 9. 本書で用いた出土遺物の年代観については、下記の文献を主に引用参照した。
  - ・田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981年
  - ・森田克行「摂津地域」『弥生土器の様式と編年-近畿編Ⅱ』木耳社、1990年
  - ・辻 美紀「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学文学部考古学研究室、1999 年
  - ・九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年』2000年
  - ・江戸遺跡研究会編『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房㈱、2001年
  - ・辻 美紀「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告書IX』(脚大阪市文化財協会、 2002 年
  - ・ 働大阪府文化財センター編『古式土師器の年代学』、2006 年
  - ・西村 歩「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和 資料集』、 2008 年
  - ・角谷江津子『近世京焼の考古学的研究』㈱雄山閣、2016年
  - ・平尾政幸「土師器再考」『史洛 研究紀要』第12号、(公財)京都市埋蔵文化財研究所、2019年
  - ・日本中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』 旬真陽社、2022 年

# 目 次

### 巻頭図版

序文

例言

凡例

目次

第	1草	調査の経緯と経過	]
	第1節	調査に至る経緯	1
	第2節	調査の経過	2
第	2章	地理的環境と歴史的環境	5
	第1節	調査地の位置と地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
	第2節	歴史的環境	6
	第3節	既往の調査	10
第	3章	発掘調査と整理調査の方法	11
第	4章	基本層序と遺構面	15
	第1節	基本層序と各層の概要	15
	第2節	調査地の地形と堆積状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20
第	5章	調査成果 2	25
	第1節	各調査区の遺構と遺物	25
第	6章	総括	77
	第1節	尾山遺跡の時期別消長	77
	第2節	尾山遺跡の水田遺構の変遷と特徴について	89
	第3節	6-1 区 001 溝出土の弥生時代後期後半から古墳時代初頭の搬入土器について	97
	第4節	調査成果の意義	.03

写真図版

報告書抄録

奥付

### 挿図目次

図 1.	調査地位置図	1	図 28.	4-1・2区第1遺構面平面図・壁面図、	
図 2.	遺跡分布図	7		包含層出土遺物	58
図 3.	調査地の地区割と調査区名	12	図 29.	4-3 区 第1遺構面 平面図・壁面図、	
図 4.	調査区東西柱状図	21		005~007 土坑	60
図 5.	調査区南北柱状図	23	図 30.	5-1 区 第 1 遺構面 平面位置図、	
図 6.	1-1・2 区 第 1 遺構面 平面位置図	26		包含層出土遺物	61
図 7.	1-1・2 区 第 1 遺構面 平面図・壁面図	27	図 31.	6-1 区 第 1 遺構面 平面位置図	62
図 8.	1-1 区 北東壁縦横変倍図	28	図 32.	6-1 区 第1遺構面 平面図・壁面図、	
図 9.	1-1 区 第 1 遺構面 001 溝、			003 溝、004 土坑、包含層出土遺物 (	63
	002・003 洪水溝、025・026 大畦、		図 33.	6-1 区 第 1 遺構面 001・002 溝、	
	包含層出土遺物	29		005 ~ 009 土坑、遺構出土遺物	64
図 10.	1-1 区 第 1 遺構面 016 溝、		図 34.	6-1 区 第 1 遺構面 001 溝	
	006・007 小畦・030・031 杭列	31		遺物出土状況図	66
図 11.	1-1 区 第 1 遺構面 017・019・023		図 35.	6-1 区 第 1 遺構面 001 溝出土遺物 (1)	67
	洪水溝、020 溝、024 小畦	33	図 36.	6-1 区 第 1 遺構面 001 溝出土遺物 (2)	68
図 12.	1-1 区 第 1 遺構面 021 溝・洪水溝、		図 37.	6-2~5区、7-1~6区第1遺構面	
	022 洪水溝、遺構出土遺物	34		平面位置図	72
図 13.	1-1 区 第 2 遺構面 平面位置図	36	図 38.	6-2~5区、7-1~6区第1遺構面	
図 14.	2-1・2 区 第 1 遺構面 平面位置図	38		平面図・壁面図	73
図 15.	2-1・2 区 第 1 遺構面 平面図・壁面図	39	図 39.	6-3 区、7-2・6 区 第1遺構面	
図 16.	3-1・2 区 第 0.5 遺構面 平面位置図	41		包含層出土遺物、前回調査出土瓦	76
図 17.	3-1 区 第 0.5 遺構面 平面図・断面図	42	図 40.	地形分類図	81
図 18.	3-2 区 第 0.5 遺構面 平面図・壁面図、		⊠ 41.	鎌倉時代~南北朝時代の微高地上の遺構 {	86
	包含層・遺構出土遺物	43	図 42.	第 19 層上面の微高地と水田範囲	
図 19.	3-1・2 区 第 1 遺構面 平面位置図	45		想定図	90
図 20.	3-1・2 区 第 1 遺構面 平面図・壁面図	46	図 43.	第 17 層上面の微高地と	
図 21-1.	3-1 区 北西壁・北東壁縦横変倍図	48		水田遺構想定図	92
図 21-2.	3-1 区 北西壁・北東壁縦横変倍図	49	図 44.	第 11 層上面の微高地と	
図 22.	3-2 区 北西壁縦横変倍図	50		水田遺構想定図	93
図 23.	3-1 区 第 1 遺構面 101 溝、水田遺構、		図 45.	第5層上面の微高地と	
	包含層出土遺物	51		水田遺構想定図	94
図 24.	3-1・2 区 第 2 遺構面 平面位置図		図 46.	弥生時代後期後半から古墳時代初頭の	
図 25.	3-1 区 第 2 遺構面 水田遺構	54		比較対象遺跡位置図	97
図 26.	$4-1 \sim 3$ 区 第 $1$ 遺構面 平面位置図 ·······	56			
図 27.	$4-1 \sim 3$ 区 第 $2$ 遺構面 平面位置図	57			
		表目	次		
表1.	各調査区の面積と実施期間	4	表 6-1.	遺構時期別変遷表	78
表 2.	既往調査地一覧	10	表 6-2.	遺構時期別変遷表	79
表 3.	基本層序		表 7-1.	遺物観察表	04
表 4.	6-1 区 001 溝 出土遺物		表 7-2.	遺物観察表10	05
	時期別層別変遷表	69	表 7-3.	遺物観察表10	06
表 5.	6-1 区 001 溝 出土遺物		表 7-4.	遺物観察表10	07
	時期別器種別変遷表	70			

### 写真目次

写真 1.	調査区排水作業(南西から)2	写真 8.	3-2 区狭小トレンチ調査状況(北東から) (	
写真 2.	2-1 区表土掘削の開始(南から) … 2	写真 9.	6-1 区 001 溝掘削状況(南から)	
写真 3.	コンテナハウス等の設置 (南から) 2	写真 10.	出土遺物洗浄作業	-
写真 4.	1-1 区遺構掘削状況(南から) 2	写真 11.	5-1 区遺構面精査(南東から)	4
写真 5.	4-3 区測量作業(北東から) 2	写真 12.	7-5 区測量作業(北西から)	4
写真 6.	3-1 区上層水田掘削状況(北から) … 3	写真 13.	府教育庁木村啓章氏調査指導(北西から) 。	4
写真 7.	3-1 区下層水田検出作業(南西から) 3	写真 14.	埋戻しの完了(北東から)	/

### 巻頭図版目次

#### 巻頭図版1

1. 3-1 区第 2 遺構面 水田遺構(南西から)

#### 巻頭図版2

- 1. 3-1 区 第 1 遺構面 水田遺構(北から)
- 2. 6-1 区第1遺構面001溝(南から)

### 写真図版目次

#### 図版1 遺構

1-1. 1-1 区 第 1 遺構面 調査区全景 (オルソ写真)

#### 図版2 遺構

- 2-1. 1-1 区 第 1 遺構面 調査区全景(北西から)
- 2-2. 1-1 区 第 1 遺構面 調査区全景(東から)

#### 図版3 遺構

- 3-1. 1-1 区第1遺構面001溝(北西から)
- 3-2. 1-1 区第1遺構面001溝(南西から)
- 3-3. 1-1 区第1遺構面001溝(南西から)
- 3-4. 1-1 区第1遺構面001溝(南東から)
- 3-5. 1-1 区 第 1 遺構面 001 溝完掘状況(南西から)

### 図版 4 遺構

- 4-1. 1-1 区 第 1 遺構面 002 洪水溝(南西から)
- 4-2. 1-1 区第1遺構面003洪水溝(南西から)
- 4-3. 1-1 区第1遺構面004大畦、005小畦(南から)
- 4-4. 1-1 区第1遺構面016溝(南から)
- 4-5. 1-1 区第1遺構面016溝(北から)
- 4-6. 1-1 区第1遺構面030・031 杭列(南西から)
- 4-7. 1-1 区第1遺構面017・019洪水溝(南西から)

### 図版 5 遺構

- 5-1. 1-1 区第1遺構面020溝(南から)
- 5-2. 1-1 区第1遺構面020溝(北から)
- 5-3. 1-1 区第1遺構面024小畦(北から)
- 5-4. 1-1 区第1遺構面021・022溝(東から)
- 5-5. 1-1 区第1遺構面 021・022溝(北から)
- 5-6. 1-1 区 第 1 遺構面 021 溝内の 005 出土状況 (東から)

### 図版 6 遺構

- 6-1. 1-1 区 第 2 遺構面 調査区全景(北西から)
- 6-2. 1-1 区第2遺構面調査区全景(東から)

### 図版7 遺構

7-1. 1-1 区第2遺構面201溝(南西から)

- 7-2. 1-1 区第2遺構面201溝断割り(南西から)
- 7-3. 1-1 区 第 2 遺構面 201 溝断割り(西から)
- 7-4. 1-1 区 第 2 遺構面 201 溝断割り壁面(南西から)
- 7-5. 1-2 区 第 1 遺構面 調査区全景(南から)
- 7-6. 1-2 区 第 1 遺構面 北壁断面(南西から)
- 7-7. 1-2 区 第 1 遺構面 平面全景(南西から)
- 7-8. 1-2 区第2遺構面北壁断面(南西から)

#### 図版8 遺構

- 8-1. 2-1 区第1遺構面調査区全景(南西から)
- 8-2. 2-1 区 第 1 遺構面 調査区全景(南から)
- 8-3. 2-1 区第1遺構面 西壁断面全景(南東から)
- 8-4. 2-1 区第1遺構面001溝(東から)
- 8-5. 2-1 区第1遺構面北壁断面全景(南東から)

### 図版 9 遺構

- 9-1. 2-2 区 第 2 遺構面 調査区全景 1 (南から)
- 9-2. 2-2 区第2遺構面調査区全景2(南から)
- 9-3. 2-2 区第2遺構面西壁断面全景(南東から)
- 9-4. 2-2 区第2遺構面北壁断面全景(南から)

### 図版 10 遺構

- 10-1. 3-1 区第 0.5 遺構面 001 溝検出状況 (南東から)
- 10-2. 3-1 区第 0.5 遺構面 001 溝検出状況(東から)
- 10-3. 3-1 区 第 0.5 遺構面 002 土坑検出状況 (南東から)
- 10-4. 3-1 区第 0.5 遺構面 001 溝、002 土坑 (北西から)

### 図版 11 遺構

- 11-1. 3-1 区 第 1 遺構面 調査区全景 (オルソ写真)
- 図版 12 遺構
- 12-1. 3-1 区 第 1 遺構面 調査区全景(北東から)
- 12-2. 3-1 区第1遺構面101溝、水田畦畔

(北東から)

#### 図版 13 遺構

- 13-1. 3-1 区第1遺構面101溝、水田畦畔(南から)
- 13-2. 3-1 区第1遺構面101溝、水田畦畔(北から)
- 13-3. 3-1 区第1遺構面114水口(東から)
- 13-4. 3-1 区第1遺構面115水口(南西から)
- 13-5. 3-1 区第1遺構面118水口(北から)
- 13-6. 3-1 区 第 1 遺構面 116 水口(西から)

#### 図版 14 遺構

- 14-1. 3-1 区第1遺構面126水田面状況(南から)
- 14-2. 3-1 区 第 1 遺構面 126 水田面状況(南から)
- 14-3. 3-1 区第1遺構面127水田面状況(南から)
- 14-4. 3-1 区 第 1 遺構面 128・129 水田面状況 (南から)

### 図版 15 遺構

- 15-1. 3-1 区第2遺構面調査区全景(オルソ写真)
- 図版 16 遺構
- 16-1. 3-1 区第2遺構面調査区全景(南西から)
- 16-2. 3-1 区第2遺構面調査区全景(北東から)

#### 図版 17 遺構

- 17-1. 3-1 区第2遺構面258~263水田(北東から)
- 17-2. 3-1 区第2遺構面264~267水田(北東から)
- 17-3. 3-1 区第2遺構面268~272水田(北東から)
- 17-4. 3-1 区第2遺構面264~272水田(北東から)
- 17-5. 3-1 区第2遺構面259~269水田(南東から)
- 17-6. 3-1 区第2遺構面258~265水田(南東から)
- 17-7. 3-1 区第2遺構面251~257水田(北西から)
- 17-8. 3-1 区第2遺構面266~272水田(北西から)

### 図版 18 遺構

- 18-1. 3-1 区第2遺構面完掘全景(南西から)
- 18-2. 3-1 区南張出し 第1遺構面 完掘全景 (南西から)
- 18-3. 3-1 区南張出し第2遺構面273~277水田(南から)
- 18-4. 3-1 区南張出し 第 2 遺構面 完掘全景 (南西から)

### 図版 19 遺構

- 19-1. 3-2 区第 0.5 遺構面 完掘全景(北東から)
- 19-2. 3-2 区第 0.5 遺構面 005 ~ 009 耕作溝 (南から)
- 19-3. 3-2 区 第 2 遺構面 完掘全景(北東から)
- 19-4. 3-2 区第2遺構面完掘全景(南西から)

#### 図版 20 遺構

- 20-1. 4-1 区 第1遺構面 検出全景(南西から)
- 20-2. 4-1 区第1遺構面 002 洪水溝(北西から)
- 20-3. 4-1 区 第 2 遺構面 完掘全景(南西から)
- 20-4. 4-2 区北半 第 1 遺構面 検出状況(南西から)
- 20-5. 4-2 区南半 第 1 遺構面 003 溝(南西から)
- 20-6. 4-2 区南半 第1遺構面 003 溝(南東から)
- 20-7. 4-2 区北半 第 2 遺構面 完掘全景 (南西から)
- 20-8. 4-2 区北半 第 2 遺構面 完掘全景 (南西から)

#### 図版 21 遺構

- 21-1. 4-3 区第1遺構面検出状況(南西から)
- 21-2. 4-3 区第1遺構面007土坑(北西から)
- 21-3. 4-3 区第1遺構面005土坑(南から)
- 21-4. 4-3 区第1遺構面006土坑(西から)
- 21-5. 4-3 区第2遺構面完掘全景(南西から)
- 21-6. 4-3 区第2遺構面完掘全景(南西から)
- 21-7. 5-1 区 第 1 遺構面 完掘全景(南西から)
- 21-8. 5-1 区第1遺構面完掘全景(西から)

#### 図版 22 遺構

- 22-1. 6-1 区第1遺構面完掘全景(南から)
- 22-2. 6-1 区第1遺構面完掘全景(西から)
- 22-3. 6-1 区 第1遺構面 完掘全景(南東から)
- 22-4. 6-1 区第1遺構面 001・002溝、003~009土坑(南西から)
- 22-5. 6-1 区第1遺構面 002 溝、003 ~ 009 土坑 (西から)

#### 図版 23 遺構

- 23-1. 6-1 区第1遺構面001溝(南から)
- 23-2. 6-1 区第1遺構面001溝(北から)
- 23-3. 6-1 区第1遺構面004土坑(北から)
- 23-4. 6-1 区第1遺構面 002 溝、003 土坑 (南西から)
- 23-5. 6-1 区第1遺構面 001 溝、004 ~ 008 土坑 (南西から)
- 23-6. 6-1 区第1遺構面 005・006・008 土坑 (西から)
- 23-7. 6-1 区 第 1 遺構面 001 溝下層出土土器 (東から)

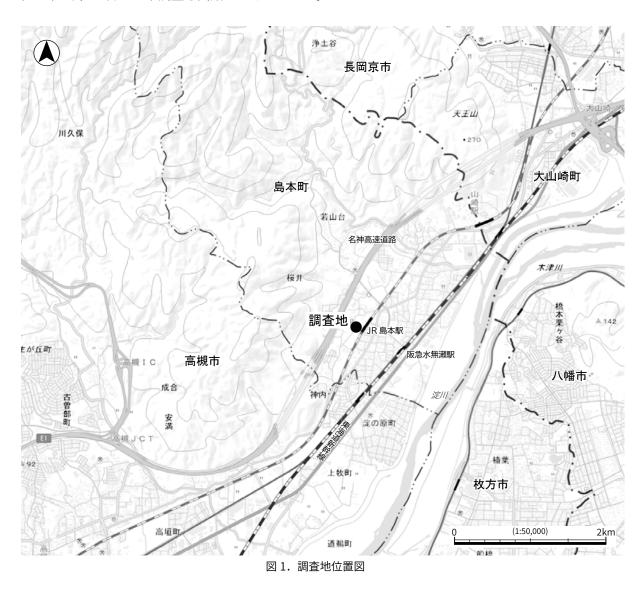
### 図版 24 遺構

- 24-1. 6-2 区 第 1 遺構面 全景(南西から)
- 24-2. 6-3 区第1遺構面完掘全景(南から)
- 24-3. 6-4 区 第1遺構面 完掘全景(南から)
- 24-4. 6-5 区第1遺構面001溝(南西から)
- 24-5. 7-1 区第1遺構面全景(西から)
- 24-6. 7-2 区 第1遺構面 完掘全景(南東から)
- 24-7. 7-3 区 第 1 遺構面 全景(西から)
- 24-8. 7-4 区 第 1 遺構面 完掘全景 (南東から) 図版 25 遺構
- 25-1. 7-5 区 第1遺構面 完掘全景 (南東から)
- 25-2. 7-5 区第1遺構面完掘全景(北西から)
- 25-3. 7-5 区第1遺構面完掘全景(西から)
- 25-4. 7-6 区 第 1 遺構面 完掘全景(南東から)
- 25-5. 7-6 区第1遺構面 001溝(南西から) 25-6. 7-6 区第1遺構面 002溝(南西から)
- 図版 26 遺物
- 26-1. 出土遺物

# 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

本調査は、事業計画面積約 13,954 m²の共同住宅建設工事に伴う発掘調査である。この開発の事業計画範囲は、周知の埋蔵文化財包蔵地「尾山遺跡」の範囲内であるため、文化財保護法第 93 条第 1 項の規定により、令和 3 年 12 月 24 日に「埋蔵文化財発掘の届出」(以下「届出」という。)が提出された。当該地は、令和 2 年度から令和 3 年度まで公益財団法人大阪府文化財センターと共同で実施した、島本町JR島本駅西土地区画整理事業に伴う尾山遺跡の発掘調査の範囲内であり、その発掘調査において当該地周辺からは弥生時代及び古墳時代の水田跡、鎌倉時代の遺構の存在を確認している。その発掘調査成果と届出の内容を基に、今回の開発行為に伴う土木工事等による埋蔵文化財への影響範囲を精査し、共同住宅及び機械式駐車場並びに防火水槽部分の約 1,426 m²の範囲(図 1)を発掘調査することとした。発掘調査の実施に向けて事業主と協議を進め、令和 4 年 5 月 16 日に事業主と本町で覚書を締結し、令和 4 年 5 月 17 日から本調査を開始したものである。



### 第2節 調査の経過

各調査区の面積、調査期間、島本町の最終確認日は、表1及び下記の とおりである。以下には、現地調査の経過概要を記す。

### 【令和 4年 (2022)】

5月16日 重機・倉庫・掘削道具等搬入。水準点・基準点の移設と調査区の位置出し。作業員・調査員全員にて新規入場者教育実施。本町担当者との初回打ち合せを実施。

5月17日 排水作業。1-2区と2-1区を、2班に分けて重機による表土掘削開始。1-2区にて監督員と第1遺構面と第2遺構面の深さや土層等を確認し、図面作成後に埋戻し完了。第5層より土師器皿片等が出土。2-1区にて001溝・002溝を検出。

5月18日 1-1 区遺構検出を開始し、西端にて 001 溝を検出。2-1 区北側の包含層掘削。西壁土層断面の写真撮影・図面作成。

5月19日 コンテナハウス・倉庫等搬入。1-1区第1遺構面で遺構検出 継続。2-1区中央部の前年度4区トレンチを検出。北壁土層断面の写真 撮影。

5月20日 1-1区の遺構検出写真撮影と遺構略測図作成後に遺構掘削開始。2-1区にて重機による表土掘削継続。北壁土層断面図作成。

5月23日 ベルトコンベヤー・発電機・小型重機等搬入。コンテナハウスの備品・複合機・エアコン・通信機器・防犯カメラ等の設置と電気設備工事完了。1-1区の遺構掘削継続。001溝で2m程度の薄板材出土。021溝で弥生後期の小型鉢出土。2-1区にて重機による表土掘削終了。西壁土層断面図の下層追加作成。

5月24日 1-1区第1遺構面の完掘写真撮影と壁面図・平面図作成。 1-1区第2遺構面の包含層掘削開始。2-1区の完掘写真撮影と平面図作成。2-2区の包含層掘削・遺構検出。完掘写真撮影と壁面図・平面図作成。 埋戻しを完了。3-1~3区の調査区設定。

5月25日 1-1区第2遺構面の包含層掘削と遺構検出を行い、201溝を掘削。完掘写真撮影と壁面図・平面図作成。2-1区の埋戻し開始。

5月26日 1-1区にて第22層まで深掘り調査を実施。壁面図追加作成。 1-1区、2-1区の埋戻し完了。

5月27日 排水作業。3-1区第1遺構面の表土掘削を北側より開始。洪水砂の除去後に001溝と水田畦畔を検出。

5月30日 3-1区の表土掘削・遺構検出終了。検出写真撮影と平面図作成。 ベルトコンベヤーを設置し遺構掘削開始。4-1区第1遺構面の表土掘削・ 遺構検出開始。001・002洪水溝、003溝を検出し写真撮影。

5月31日 3-1区の101溝③洪水砂より弥生後期の甕頸部出土。001溝の畦断面写真撮影と壁面図作成。第1回工程会議。

6月1日 6月度安全大会実施。3-1区の写真撮影・平面図作成。4-1区



写真 1. 調査区排水作業(南西から)



写真 2. 2-1 区表土掘削の開始(南から)



写真3. コンテナハウス等の設置(南から)



写真4.1-1区遺構掘削状況(南から)



写真 5.4-3 区測量作業(北東から)

第1遺構面にて遺構掘削。完了後に壁面図・平面図作成。第2遺構面の 包含層掘削開始。4-3区の表土掘削開始。

6月2日 3-1区の001溝畦撤去後、第1遺構面の壁面図・平面図作成。 第2遺構面の包含層掘削開始。4-1区第2遺構面の包含層掘削と遺構検出。 4-3区第1遺構面の007土坑、005・006杭穴、001・002洪水溝を検出。 検出写真撮影と略測図作成。

6月3日 3-1区第2遺構面の包含層掘削継続。4-1区第2遺構面の平面 図・壁面図作成、終了後に埋戻し完了。4-3区第1遺構面の遺構掘削終了。 写真撮影と平面図・断面図作成。

6月6日 雨で午前中休工。午後、排水後に 4-3 区第 2 遺構面の包含層 掘削開始。

6月7日 3-1 区遺構検出で水田畦畔検出。検出写真撮影。4-3 区にて完掘写真撮影、平面図・断面図作成。

6月8日 3-1区第2遺構面にて水田遺構の完掘写真撮影と平面図・断面図作成。埋戻し開始。4-3区埋戻し継続。5-1区の表土掘削。

6月9日 3-1 区南張出しの表土掘削と第1遺構面遺構検出。完掘後に写真撮影と平面図・断面図作成。第2遺構面の包含層掘削開始。4-3 区の埋戻し完了。5-1 区にて包含層掘削・遺構検出。終了後に写真撮影と平面図・断面図作成し、埋戻し完了。

6月10日 3-1区南張出しの第2遺構面遺構検出。遺構掘削後に完掘写 真撮影と平面図・断面図作成。埋戻し完了。4-2区北半第1遺構面の表 土掘削を終了し、002洪水溝を検出。遺構掘削完了後に写真撮影、平面図・ 断面図作成。第2遺構面の包含層掘削開始。

6月13日 3-2区第0.5遺構面の表土掘削と遺構検出。011池、001・010溝・003~009耕作溝、攪乱を完掘し、写真撮影と平面図・断面図作成。4-2区北半第2遺構面の遺構検出後、検出写真撮影。北半埋戻し終了。

6月14日 降雨のため休工。遺物洗浄。第2回工程会議。

6月15日 3-2区北半第1遺構面と第2遺構面の完掘写真撮影と平面図・断面図作成。北半埋戻し終了。4-2区南半第1遺構面の003溝を遺構掘削。 完掘写真撮影と平面図・断面図作成。第2遺構面包含層掘削。

6月16日 3-2区南半第1遺構面と第2遺構面の遺構検出、写真撮影と平面図・断面図作成。南半埋戻し完了。4-2区南半第2遺構面の遺構検出。 完掘写真撮影と平面図・断面図作成。南半埋戻し完了。6区・7区の位 置出し。

6月17日 休工。整理作業班との打ち合わせ。図面・写真の整理。

6月20日 6-1区の表土掘削と遺構検出。001・002 溝と003 ~ 009 土 坑を検出。溝の上層より弥生後期~古墳前期の土器多数出土。

6月21日 6-1 区攪乱を埋戻し。雨のため午後休工。

6月22日 排水作業。6-1 区遺構検出写真撮影。遺構掘削開始。

6月23日 6-1 区遺構掘削。001 溝より弥生土器多数が出土。完掘写真 撮影と平面図・断面図作成。埋戻し完了。7-1 区表土掘削開始。



写真 6. 3-1 区上層水田掘削状況 (北から)



写真 7. 3-1 区下層水田検出作業(南西から)



写真 8. 3-2 区狭小トレンチ調査状況 (北東から)



写真 9.6-1 区 001 溝掘削状況(南から)



写真 10. 出土遺物洗浄作業

6月24日 6-2~4区、7-1・3区の表土掘削開始。何れも遺構は検出されず、完掘写真撮影と平面図・断面図作成後に埋戻し完了。

6月27日 7-2・4区と6-5区で、各調査区で001溝を確認し、掘削を終了。 完掘写真撮影と平面図・断面図作成後に埋戻し完了。

6月28日 第3回工程会議。7-5・6区で、両調査区で001溝やその痕跡を確認した。完掘写真撮影と平面図・断面図作成後に埋戻し完了。今回の全地区の調査を完了。大阪府教育庁文化財保護課木村啓章氏が来跡し、調査状況を確認。



写真 11. 5-1 区遺構面精査(南東から)



写真 12. 7-5 区測量作業(北西から)



写真 13. 府教育庁木村啓章氏調査指導(北西から)



写真 14. 埋戻しの完了(北東から)

表 1. 各調査区の面積と実施期間

調査区名	調査面積	調査実施期間	町教委最終確認日
1-1⊠	200 m²	5月17日 ~ 5月26日	5月26日
1-2⊠	200111	5月17日	5月17日
2-1区	268 m²	5月17日 ~ 5月26日	5月26日
2-2区	200111	5月24日	5月24日
3-1⊠	397 m²	5月27日 ~ 6月10日	6月10日
3-2区	397111	6月13日 ~ 6月16日	6月16日
4-1⊠		5月30日 ~ 6月 3日	6月3日
4-2区	196 m²	6月10日 ~ 6月16日	6月16日
4-3区		6月 1日 ~ 6月 9日	6月9日
5-1区	39 m²	6月 8日 ~ 6月 9日	6月9日
6-1⊠		6月20日 ~ 6月23日	6月23日
6-2⊠		6月24日	6月24日
6-3⊠	213 m²	6月24日	6月24日
6-4⊠		6月24日	6月24日
6-5⊠		6月27日	6月27日
7-1区		6月23日 ~ 6月24日	6月24日
7-2⊠		6月27日	6月27日
7-3⊠	112 m²	6月24日	6月24日
113 m² 7 − 4 ⊠	6月27日	6月27日	
7-5区	iΣ	6月28日	6月28日
7-6⊠		6月28日	6月28日
	1,426 m²		

## 第2章 地理的環境と歴史的環境

### 第1節 調査地の位置と地理的環境

島本町は、大阪府の北部、京都府の境に位置し、その東側は北から京都市、長岡京市、大山崎町、八幡市、西側は大阪府高槻市、南側は淀川をはさんで枚方市に隣接する。町域は、概ね南北約8.9km、東西約3.3kmの範囲に南北に細長く広がり、その面積は約16.81kmである。標高は一番低い所が淀川河川敷の4mで、一番高い所が釈迦岳の631mである。町の北側から西側が山地・丘陵地であり、町域の約7割を占めている。市街地は、天王山の南側に広がる平坦地に形成されている。

山地部北側にはポンポン山山地が連なり、その東南側に一段低い天王山山地がある。これらの山地は主に丹波層群によって形成され、砂岩、頁岩、チャート等の岩石からなる。そして、天王山山地の南側には狭い範囲ながら山崎・桜井丘陵とよばれる丘陵地がみられ、主に礫層よりなり砂層をはさむ、下部及び最下部の大阪層群によって形成されている。また、平野部は9~13 m程度の標高で広がり、主に河川堆積物によって構成され、淀川低地とよばれる。本町南東の山崎狭隘部においては、京都盆地から流れ込む桂川、宇治川、木津川の三川が合流し、淀川となり大阪平野を南西に流れる。淀川低地は、主に淀川からの供給物によって構成されるが、山地・丘陵地を源とする水無瀬川等や他の河川からの堆積物によっても形成され、小河川付近には扇状地が広がる。また、水無瀬川沿いには、河岸段丘地形がみられる。

現在、本町域では、平野部から丘陵部にかけて宅地や工業用地として開発が進んでいるが、山地部では豊かな自然が残されており、「大沢のすぎ」、「尺代のやまもも」、「若山神社のツブラジイ林」が大阪府天然記念物に指定されている。また、町の花となっている「山吹」は実のある珍しい種類で、尺代の山奥や、山吹渓谷の一帯に群生している。

古来、淀川は琵琶湖・淀川水系を作り、日本最大の内陸水運路の一つとして重要な役割を果たしてきた。特に長岡京・平安京の遷都以降は、その重要性を更に増していった。飛鳥時代や奈良時代には、隣接する山崎で淀川に架橋され、平安時代には津も整備された。平野部においても、京と西国とを結ぶ山陽道(西国街道)が通り、陸路においても重要な幹線路が貫いていた。現在も町域には、JR 東海道新幹線、JR 東海道本線、阪急京都線といった鉄道や名神高速道路、国道 171 号といった重要な交通幹線が通っており、古来より島本町の地理的位置が、重要な要衝であることに変わりはない。

このように尾山遺跡は、水陸両方の交通上の要衝に隣接した地域に位置している遺跡で、南北は JR 島本駅の南側から島本町立第三小学校の北側まで、東西は JR 東海道本線の西側から山麓の御所池瓦窯跡のある段丘上を一部含む範囲の遺跡である。その大部分は比較的平坦で緩やかな南下がりの沖積地で、近年まで水田としての土地利用が顕著な地域であった。昭和 40 年(1965)に作成された島本町地籍図からみてみると、大字桜井の小字「尾山」の大部分と、「ミドロ」「柳田」「平井垣内」「御所ノ前」の其々一部で、主要部分は現在の桜井二丁目と桜井三丁目の一部に所在する。

### 第2節 歷史的環境

島本町では、国指定史跡桜井駅跡をはじめ、多くの遺跡(図 2)や文化財が周知されている。

最も古くは旧石器時代で、町の北東部に位置する山崎西遺跡では、サヌカイト製のナイフ形石器や チャートの剥片が採取されている。

縄文時代には、北摂山地の東麓の段丘面に位置する越谷遺跡で、縄文時代後期前葉から中葉の土器がまとまって出土している。扇状地に位置する広瀬遺跡では、縄文時代晩期の竪穴建物が検出されている。

弥生時代では、桜井駅跡で弥生時代前期の土器が出土している。弥生時代中期には平野部に集落や 耕作地が広がっていたと考えられる。青葉遺跡 B 地点では、弥生時代中期中葉の竪穴建物が検出され た。桜井駅跡・広瀬遺跡・広瀬溝田遺跡では、弥生時代中期中葉から後葉にかけての耕作溝が検出さ れ、遺物が出土した。また、越谷遺跡や伝待宵小侍従墓で、弥生時代後期の遺物が出土している。

古墳時代においては、水無瀬荘跡では古墳時代前期初頭の、桜井駅跡・越谷遺跡では古墳時代前期の遺物が出土している。広瀬遺跡・越谷遺跡・水無瀬荘跡では、古墳時代中期から後期にかけての遺物が出土している。特に越谷遺跡では、昭和35年(1960)の名神高速道路建設時に、古墳の副葬品と考えられる須恵器、鉄器が採集された。源吾山古墳群でも、副葬品と考えられる須恵器が出土しており、横穴式石室の一部と考えられる石材とともに古墳の存在が想定されている。神内古墳群は島本町と高槻市にわたる古墳群で、高槻市側で横穴式石室が確認されている。

飛鳥時代から奈良時代にかけての遺跡としては、御所池瓦窯跡がある。この瓦窯については、これまで瓦が採取されていたものの、その実態が不明であった。尾山遺跡は平成29年度の試掘調査の成果によって、埋蔵文化財包蔵地として登録された遺跡である。令和2年(2020)の発掘調査の際に、調査地西側で飛鳥時代後期から奈良時代前期にかけての瓦窯が検出され、御所池瓦窯跡の一部の可能性が高いとして、御所池瓦窯跡1号窯と名付けられた。この調査では、飛鳥寺東南禅院・飛鳥池瓦窯と同笵の軒丸瓦が出土した。また島本町北東部の丘陵に位置する鈴谷瓦窯跡では、2基の瓦窯が確認されており、飛鳥時代後期から奈良時代前期の瓦が出土した。鈴谷瓦窯跡の南西に隣接する御所ノ平遺跡では、竪穴建物が検出され、鈴谷瓦窯跡と同様の瓦や粘土塊が出土していることから、鈴谷瓦窯の工房と想定されている。また文献史料として、正倉院文書に天平勝宝8年(756)『摂津国嶋上郡水無瀬絵図』が現存する。奈良時代中期には、水無瀬川右岸において東大寺領水無瀬荘が造営され、西日本各地の東大寺の荘園から奈良に物資を運ぶ中継基地として機能していたと考えられる。『続日本紀』の和同4年(711)の箇所に「四年春正月丁未。始置都亭驛。(中略) 摂津国嶋上郡大原驛。」と記述があり、島本町内に大原駅が設置されたと考えられている。

平安時代には、風光明媚な島本町一帯は「水無瀬」と歌枕に詠まれ、隣接する「河陽」(京都府乙訓郡大山崎町)とともに皇族・貴族が遊行に訪れるようになった。平安時代前期に成立したとされる『大和物語』などに見られ、後代に能や謡曲などの芸能や文学作品の題材にも用いられるようになった「芦刈」の説話の舞台でもある。広瀬遺跡では、西国街道に近い発掘調査で小石敷きの路面をもつ中世の道路状遺構が検出されている。同地点で平安時代の遺物が出土していることから、山陽道とされる路面が平安時代においても整備されていた可能性がある。広瀬遺跡では、平安前期の掘立柱建物が検出されており、文徳天皇の子である惟喬親王の離宮であると想定されている。広瀬南遺跡では、淀川の河床から

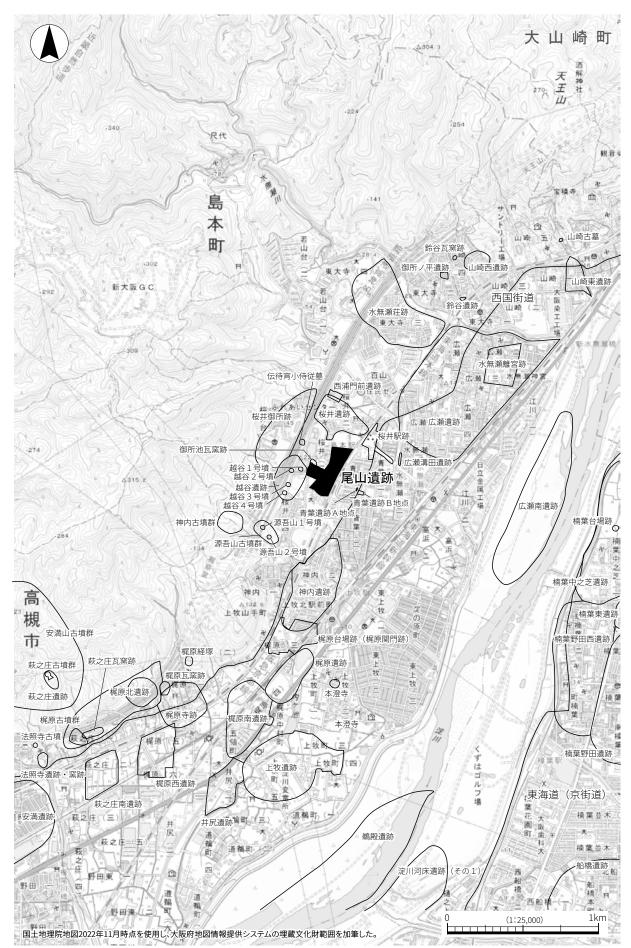


図2.遺跡分布図

平安時代の須恵器の大甕が出土しており、京域との往来を裏付ける資料とされている。

鎌倉時代には、後鳥羽上皇が正治元年(1199)に水無瀬離宮の造営を行った。平安時代末から南北 朝時代を描いた『増鏡』には、「見渡せば山もとかすむみなせ川ゆふべは秋となに思ひけむ」と、水無 瀬の山川を背景に滝や景石、松などを配置した庭園の見事な様子が描写されている。藤原定家が記した 『明月記』には、後鳥羽上皇が頻繁に水無瀬を訪れ、歌会・饗宴に興じたことが記される。また上皇の 御幸の際、定家は「山崎油売小屋」に宿泊した旨が書かれている。このころから当地域は荏胡麻油の生 産が盛んとなり、山崎と水無瀬の境にある離宮八幡宮を中心に油座が結成され「大山崎神人」として幕 府の保護を受け、京をはじめ西日本一帯の油の専売権を持つ組織となった。荏胡麻油業は、戦国時代末 期ごろに菜種・綿実油にその需要が取って代わるまで続いた。広瀬遺跡では鎌倉時代前期の礎石建物が 検出され、山城産の瓦が出土しており、水無瀬離宮に関係する施設の存在が想定されている。『百錬抄』 建保5年(1217)正月の箇所に、「十日、上皇が水無瀬殿新御所にお移りになった。この本御所は去年大 風洪水の時、傾倒流失の間、他所に造営(したものである。)」と記述がある。同じく『明月記』の建保 5年2月の箇所に、「水無瀬殿山上造營新御所」とある。水無瀬離宮跡の 1.1km 西に位置する西浦門前 遺跡では、平成26年(2014)の発掘調査で鎌倉時代前期以降の池や築地塀が検出されており、再建し た施設の一部と想定されている。水無瀬離宮跡に創建されたとされる御影堂(現、水無瀬神宮)の標高 は約 12 m、西浦門前遺跡の位置する桜井三丁目の標高は約 24 mである。なお、この調査で検出され た池泉(SG01)は、平成27年(2015)に「西浦門前遺跡庭園移築プロジェクト!」として住民参加の移 築復元が実施され、町立歴史文化資料館の敷地内に移設している。

室町時代に成立した『太平記』巻十六「正成兵庫に下向の事」に、新田義貞の命により、湊川の戦いに赴く際に楠木正成・正行父子が決別する件(くだり)があり、講談や絵画などの題材としてよく知られる物語である。その決別の地である「桜井宿」の推定地は、現在、桜井駅跡として国史跡に指定されている。

応仁の乱  $(1467 \sim 1477)$  から戦国時代にかけて、西国から京に入る要衝にあった本町は戦乱により荒廃した。とくに隣接地域であるが、天正 10 年 (1582) の山崎の合戦は『太閤記』などにも描かれ、その中心地である天王山の名とともに知られている。同じころ、水無瀬御影堂の門前になる地域は水無瀬家の所領となっていた。とくに水無瀬兼成は優れた文化人であり、また能書家であった。兼成の確立した将棋駒の様式は、「水無瀬駒」と呼ばれ、本町の指定文化財となっている。

江戸時代に山陽道は西国街道として整備された。山崎東遺跡の平成13年(2001)の発掘調査では、地下貯蔵庫跡と考えられる近世の石組み遺構を検出している。また広瀬遺跡の平成24年(2012)の発掘調査では、清朝の通貨である「道光通宝」を含む14種類の銭貨が出土しており、西国街道沿いに位置する当地域の経済活動の活発さを示すものである。

図2の尾山遺跡は、令和2年(2020)の発掘調査では縄文時代後期から中世に至る遺構・遺物が確認された。縄文時代後期の遺構としては、土坑・ピット・谷地形が検出され、谷地形では縄文土器が多数出土している。縄文時代晩期から弥生時代の遺物としては、突帯文土器や弥生土器が出土している。弥生時代後期から古墳時代前期の遺構としては、水田や土坑が検出されている。鎌倉時代の遺構としては、池泉(167 池泉)が検出され、滝組、ケヤキの植栽、取排水溝、曲物等を配置した遺構が検出された。池泉内からは、白磁四耳壺が出土した。

### <引用参考文献>

島本町史編さん委員会『島本町史』本文篇・史料篇、島本町役場、1975・1976 年

島本町教育委員会『島本町文化財調査報告書』第 1 集~第 42 集、第 44 集~第 47 集、2002 ~ 2023 年

島本町教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第 43 集、(公財) 大阪府文化財センター調査報告書第 316 集、2022 年

名神高速道路内遺跡調査会『水無瀬荘跡遺跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第1輯、1996年

名神高速道路内遺跡調査会『越谷遺跡他発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2輯、1997年

大阪府教育委員会『桜井駅跡 一般府道桜井駅跡線自歩道整備工事に伴う発掘調査』大阪府埋蔵文化財調査報告 2007-10 、2008 年 経済雑誌社『続日本紀』国史大系第 2 巻、 $1897 \sim 1901$  年

国書刊行会『明月記 第二』1911年

三教書院『増鏡』1935 年

経済雑誌社『百練抄 愚管抄 元亨釈書』国史大系第 14 巻、1897  $\sim$  1901 年

博文館『太平記』巻 1 ~ 40、1906 年

小瀬甫庵『太閤記』22巻(2)、1646年

### 第3節 既往の調査

当該地周辺は、近年まで農地として利用されていたため、調査例は少ない。尾山遺跡の範囲内で実 施したものとしては、表2の土地区画整理事業に伴い実施した平成29年度・令和元年度の試掘調査 (SIT17 - 1・SIT19 - 2) 及び令和 2 年度から令和 3 年度までの発掘調査(OY20 - 1 尾山)、下水道 工事に伴い実施した令和2年度の確認調査(OY20-2尾山)及び令和3年度の確認調査(OY21-1 才田・柳田)並びに令和3年度の発掘調査(OY21 - 2 尾山)の6件が挙げられる。平成 29 年度の試 掘調査(SIT17-1)において、遺物包含層が存在し、遺物包含層と同一の土層が周辺に広がっている ことを確認したため、散布地の埋蔵文化財包蔵地「尾山遺跡」として登録されることとなった。その 後、令和元年度に追加で、公益財団法人大阪府文化財センターと共同で試掘調査(SIT19 - 2)を実施 した結果、その試掘調査地点においても、遺構・遺物の存在が確認できたため、大阪府教育庁文化財 保護課と協議を行い、尾山遺跡の範囲を拡張することとなった。令和2年度の確認調査(OY20 - 2尾 山)時には、遺物包含層を確認したのみであるが、令和2年度から令和3年度まで大阪府文化財セン ターと共同で実施した発掘調査(OY20-1尾山)は、大規模なものであり、多種多様な遺構・遺物の 存在を確認した。そのため、発掘調査終了後に、大阪府教育庁と協議を行い、遺跡の種類を散布地から 集落跡に変更を行った。令和3年度の確認調査(OY21 - 1 才田・柳田)では、遺構・遺物の存在は確 認できていない。令和3年度の発掘調査(OY21 - 2 尾山)では、中世以前の遺構・遺物の存在を確認 しているが、調査範囲が狭小であったため、その詳細は不明である。

当該地は、令和2年度から令和3年度まで実施した発掘調査(OY20-1尾山)の3~5区にあたるが、弥生時代中期の水田遺構、弥生時代後期~古墳時代前期の水田遺構、鎌倉時代後半の溝跡や土坑等の遺構の存在を確認している。また、弥生時代中期の遺構面よりも下層において、遺構に伴うものではないが、縄文土器などが出土している。

これらのような遺構・遺物が存在する可能性があったため、事業主と協議し、工事着手前に発掘調査を行い、記録保存を行ったものである。

遺跡名 調査方法 検出遺構 所在地 調査期間 主な時代 出土遺物 引用文献 種別 (m) 包蔵地外 島本町桜井二~五丁目の各一 記録保存 弥生土器、土師器、須恵 島本町教育委員会『島本町文化財調査報告書 (SIT17-1) 器、瓦器、陶磁器、瓦、泥 桜井地区・百山地区遺跡範囲確認調査概要報 面子、加工杭 告 | 第34集, 2019年 試掘調査 島本町教育委員会『島本町文化財調査報告書 包蔵地外 20191118~20191126 島本町桜井二丁目地内 10 (SIT19-2) 尾山遺跡・御所池瓦窯跡』第43集、2022年 尾山遺跡・御所池瓦窯跡 三島郡島本町桜井2・3丁目 発掘調査 20200601~20210416 7,535 集落・ 縄文時代後 水田、土坑、 縄文土器、弥生土器、石 島本町教育委員会『島本町文化財調査報告書 器、土師器、須恵器、瓦、 代, 古墳時 井戸、池泉 石製品, 金属製品 代前期、古 代、中世 鳥本町教育委員会『鳥本町文化財調査報告書 屋山清跡 島本町桜井二丁月地内 節囲確認 20201127~20201214 85.8 集落 中世 なし 十 師器、 万器 (OY20-2尾山) 桜井地区・広瀬地区・東大寺地区遺跡範囲確 認調査概要報告』第42集、2022年 尾山遺跡 島本町桜井二丁目地内 節囲確認 20210526~20210528 19.3 島本町教育委員会『島本町文化財調査報告書 (OY21-1才田・柳田) 桜井地区・広瀬地区・東大寺地区遺跡範囲確 認調查概要報告』第42集、2022年 尾山遺跡 島本町桜井二丁目地内 範囲確認 中世以前 あり (OY21-2尾山)

表 2. 既往調査地一覧

## 第3章 発掘調査と整理調査の方法

今回対象となった尾山遺跡の発掘調査は、JR 島本駅西土地区画整理事業に伴い、令和 2~3年度に 公益財団法人大阪府文化財センターと本町教育委員会が合同で実施した前回の発掘調査(以下、「前回 調査」という。)に引き続く、今回の共同住宅建設工事に伴う発掘調査(以下、「今回調査」という。)で、 2回目の調査である。発掘調査及び整理調査は、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下に、本町教育委員会が実施した。

### 1. 調査名・調査区名

調査名は、尾山遺跡「OY22 -1 尾山」を使用し、出土遺物の注記は、「OY22 -1」を記した。調査区名は、調査地が図3のように $1\sim7$ 区の大区画と、これをさらに分けた21の小区画から成っていたため、図3下図の大区画に小区画の枝番を付したものを調査区名(=トレンチ名・グリット名)として用いた。

### 2. 地区割名

地区割名は、公益財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』(2010)に準拠し、世界測地系(測地成果 2000)の平面直角座標系第VI系を用いた。調査地の地区割名は、第 I 区画が「L7」、第 II 区画が「5」、第 III 区画は図 3 上図に示す「10L・10M・11M」の範囲にあたる。なお、今回の調査における遺物の取り上げ範囲は、調査区に面積の小さなものが多いため、調査区を基準として行った。

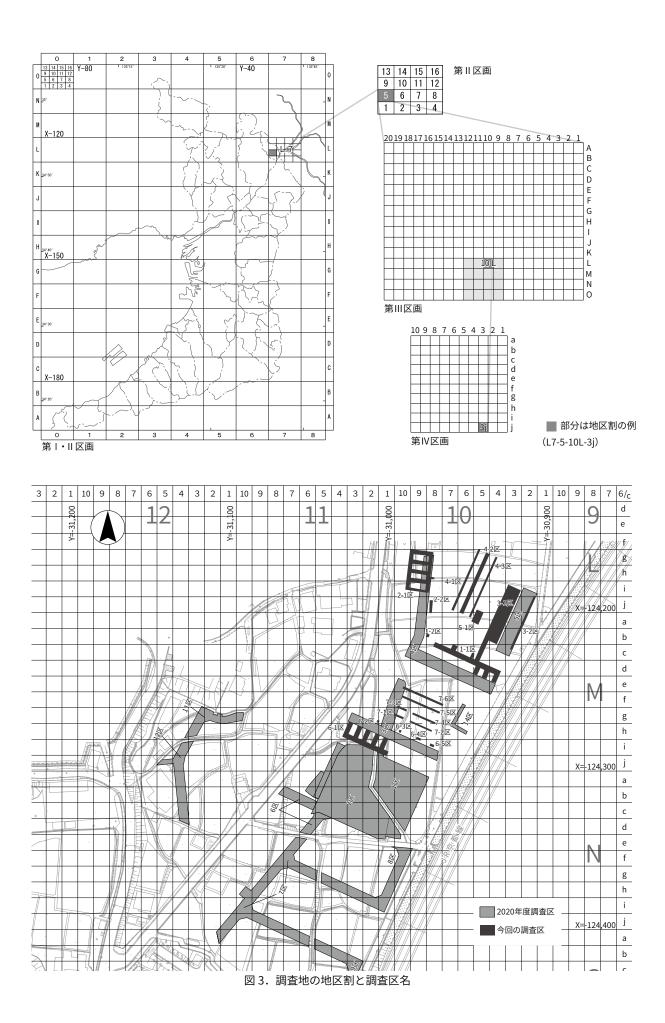
### 3. 層名・遺構面

層名の呼称は、上層からの通し番号とし、各調査区内の地層を土質・土色や出土遺物等から、後述する表3の22層に細別した。さらに前回調査の基本層序である16層大別にこれ等を比定し、同一遺跡内での理解を図るため、前回調査土層名は今回調査土層名の後に()内に記し、これらを併記して用いた。

なお、層名においては、層準を表す数字に、自然堆積した岩屑が動植物や人為による撹拌と有機物の混入により団粒という堆積構造をもつ土壌化作用を受けた地層(土壌層・耕作土・作土・耕土)を「a層」、そうでない岩屑の地層(自然堆積層)を「b層」、岩屑に少し土壌化作用が及んでいる地層を「a'」として用いられることが多いため、一覧表には参考として記入しているが、層名には付加していない。

また、調査の進展に従い、基本層序間に挟在する間層や、その層より掘り込まれた遺構やその埋土等が存在した場合は、枝番を付した。

調査深度は、各調査区の開発内容により、開発深度が異なる。このため、5-1 区、6-1~5 区、7-1~6 区は 1 面調査を、他は 2 面調査を実施した。この 1 面調査とは、基本層序で後述する第 11 層(第 4-1a 層)上面を指すもので、今回の「第 1 遺構面」である。2 面調査とは、上層の第 11 層(第 4-1a 層)と、下層の第 17 層(第 5a 層)上面を指すもので、下層の第 17 層(第 5a 層)上面は、今回の「第 2 遺構面」である。遺構面の名称は、地層名の上面に対応させて呼称した。なお、3-2 区のみ、調査幅が狭く、3-1 区の調査状況から洪水砂礫による湧き水が激しいことが予想され、安全深度が確保できず壁面崩落の危険性が高かったため、通常の 1 面と 2 面の調査ではなく、比較的明瞭であった最上層の第 5 層(第 3-1a 層)を除去した第 6~8 層(第 3-1b 層)上面を「第 0.5 遺構面」と呼称し調査を実施し、第 11 層(第 4-1a 層)上面と第 17 層(第 5a 層)上面での調査は、人が入らない形で進めた。



-12 -

表 3. 基本層序

土層 番号	土 色 ・ 土 質	堆積時期と性格	堆積成因	a=土壤(化)層 b=自然堆積層	『第43集』 地層対比	備考	遺構面
1-1	5Y6/3オリーブ黄 礫(φ~20cm)を30~40%含むシルト質細砂~極粗砂	現代/客土山ズリ造成層	客土層				
1-2	10YR5/1褐灰~10Y5/1灰 地盤改良材	現代/セメント系地盤改良層	人工改変層				
1-3	10YR5/2灰黄褐 礫( $\phi\sim$ 2cm)を10%含むシルト質極細砂〜細砂	現代/客土(耕土層を多く含む)造成層	客土層	a'			
1-4	2.5Y5/2暗灰黄 シルト質極細砂〜細砂	現代/客主造成層	客土層	a'			
1-5 1-6	5Y4/1灰 有機物を多く含むシルト質極細砂〜細砂 7.5YR5/1灰 有機物を含むシルト質極細砂〜中砂	現代/耕土湿地性放棄堆積物現代/潰燼埋土層		a'		杭跡、溝埋土	
1-7	N6/0灰 シルト質細砂	現代/遺構埋+層				杭跡	
1-8	10YR5/1褐灰 シルト質細砂	現代/遺構埋土層				土坑跡ヵ	
1-9	7.5YR4/1褐灰 細砂質シルト	現代/用水路埋土層				用水路堆積物	
1-10	7.5Y6/1灰 細砂質シルト	現代/用水路設置造成層	客土層			用水路造成土	
2-1	5Y3/1オリーブ黒~5Y4/1灰 シルト質極細砂 ~細砂	(近世)~現代/作土層	土壌層	а	第1a層		
2-2	5Y7/2灰白 礫(φ~0.6cm)を20%含むシルト質細砂	(近世)~現代/遺構埋土層				杭跡or溝跡	
3	$5Y6/1$ 灰 $\sim$ 10YR $6/2$ 灰黄褐 礫 $(\phi \sim 0.8$ cm $)$ を30%含むシルト質極細砂 $\sim$ 細砂	近世~(現現代)/作土層・床土層	土壌層	а	第2a層		
4	5Y6/1灰 極細砂質シルト	中世~近世/作土層・床土層	土壌化層	a'(b)	(第2a'層)		
5-1	2.5Y6/2灰黄 シルト質極細砂〜細砂	中世/遺物包含層・作土層	土壌層	а	第3-1a層		
5-2	10YR5/2灰黄褐 礫(φ~1cm)を10%含むシルト質細砂~中砂	第5-1層の細分	土壌層	а	第3-1a層		
5-3	$5Y5/1$ 灰 礫 $(\phi \sim 6cm)$ を $30\%$ 含むシルト質中砂〜極粗砂	第5-1層の細分	土壌化層	a'(b)	(第3-1a層)		
							⇒ 0.5面
6-1	2.5Y7/1灰 シルト質細砂~中砂	中世/自然堆積層	水成層	b	第3-1b層	13世紀中葉~14世紀前葉	, о.ощ
6-2	5Y7/2灰白 シルト質細砂	第6-1層の細分	湿地性堆積物	b	第3-1b層		
7-1	5Y7/2灰白 細砂混りのシルト質極細砂	中世/自然堆積層	湿地性堆積物	b	第3-1b層		
7-2	7.5Y7/2灰白 極細砂〜細砂質シルト	第7-1層の細分	湿地性堆積物	b	第3-1b層		
7-3	7.5Y7/1灰白 極細砂質シルト	中世/遺構盛土層				畦盛土ヵ	
7-4	5GY6/1オリープ灰 シルト質極細砂	中世/遺構埋土層				杭跡	
8-1	7.5Y7/2灰白 シルト質細砂〜粗砂	中世/自然堆積層	水成層	b	第3-1b層	希薄	
8-2	10Y7/2灰白 シルト質極細砂	第8-1層の細分	湿地性堆積物	b	第3-1b層	希薄	
9-1	2.5Y6/2灰黄 粘土質シルト	中世/作土層	土壌層	а	第3-2a層	13世紀中葉以前	
9-2	10YR7/2にぶい黄橙 極細砂質シルト	第9-1層の細分	土壌層	а	第3-2a層		
10-1	5Y7/1灰白 シルト質中砂~極粗砂	古墳前期/自然堆積層	水成層	b	第2.2b屬	古墳前期以前	
	2.5Y7/3浅黄 シルト質細砂~中砂	第10-1層の細分	湿地性堆積物	b	第3-2b層		
11	2.5Y6/3にぶい黄 極細砂〜細砂質シルト	弥生後期~古墳前期/作土層	土壌層	а	第4-1a層	弥生後期~古墳前期初頭	⇒ 1面
12	10YR7/1灰白 シルト質粗粒砂~極粗砂	古墳前期以前/自然堆積層	水成層	b	第4-1b層	古墳前期初頭以前、希薄	
13	10Y7/1灰白 極細砂質シルト	弥生後期~(古墳前期初頭)/作土層	土壌層	а	第4-2a層	弥生後期以降~古墳前期初頭	
14-1	5GY7/1明オリーブ灰 シルト質細砂~極粗砂	弥生後期~古墳前期/自然堆積層	水成層	b	第4-2b層	弥生後期以降、微高地上では	
14-2	5Y6/1灰 細砂質シルト	第14-1層の細分	湿地性堆積物	b	第4-2b層	古墳~中世の検出遺構面	
15	10Y6/1灰 シルト	弥生後期以前/自然堆積層	湿地性堆積物	b	第4-2b層	弥生後期以前	
16	5Y4/1灰 極細砂質シルト	弥生後期以前/自然堆積層	湿地性堆積物	b	第4-2b層		
17	7.5Y3/1オリーブ黒 炭化物を僅かに含む粘土質シルト	弥生中期/作土層	土壌層	a	第5a層	弥生中期前葉	⇒ 2面
18	10Y7/1灰白 極細砂質シルト~極粗砂	弥生中期/自然堆積層	湿地性堆積物	b	第5b層	弥生中期前葉以降	
19	2.5GY6/1オリーブ灰 極細砂質シルト〜粘土	縄文晩期~弥生前期/作土層	土壌層	а	第6a層	縄文晩期~弥生前期	
20	10Y7/1灰白 粘土質シルト~極粗砂	縄文晩期~弥生前期/自然堆積層	湿地性堆積物	b	第6b層	希薄	
21	5GY7/1明オリープ灰 シルト質粘土	縄文後期以前ヵ/(表土層)	(土壌層)	а	第7a層	縄文後期中葉	
	5GY8/1灰白 シルト質粘土 2.5GY8/1灰白 シルト質粗砂~極粗砂	縄文後期以前ヵ/自然堆積層 第22-1層の細分	湿地性堆積物水成層	b b	第7b層 第7b層		
22-2	2.3010/1八口 ンルド貝位切~で極位切	2022-1/20/和刀·	小及為	D	第7D階		

### 4. 遺構名

遺構番号は、小規模な調査区が多いこともあり、各調査区の遺構面毎に3桁の通し番号とし、遺構の属性は遺構番号の後に付け、「番号+遺構属性」という形で表現した。

### 5. 発掘調査

JR 東海道本線と名神高速道路に挟まれた調査地の現況は、区画整理工事に伴い造成工事が行われていたが、以前は農地として利用されていた。調査体制は、2 班体制(辻・日紫喜)で行った。発掘調査にあたっては、重機で盛土層・攪乱層・表土層等を掘削したのち、包含層掘削と遺構の検出、埋土の掘削を人力掘削で行った。

### 6. 測量作業・写真撮影

平面図や個別遺構図等は、トータルステーションを用いた電子平板測量と、Agisoft 社製 Metashape Professional によるオルソ写真測量を併用して行った。壁面図・断面図は、オルソ写真測量で作成した。縮尺は、基本 20 分の 1 で全て作成し、適時縮小して使用した。

遺構の写真撮影は、Nikon 社製一眼レフレックスタイプデジタルカメラ D610(有効画素数 2,426 万画素)を用いて、RAW と JPEG にて記録し、同時に Nikon 社製 35 mmフィルムカメラ F3 を用いて、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムによる記録も行った。

### 7. 整理作業と報告書作成

遺物は、袋台帳を作成し、洗浄・注記の基礎整理を行った。洗浄は出土遺物の大半を現地で洗浄し、整理事務所にて注記した。注記の記載内容は、「OY22-1-台帳登録番号」とした。この内、抽出作業を行った重要な遺物については、実測・拓本・デジタルトレース・写真撮影等を順次行って、挿図・遺物観察表・遺物写真図版等を作成した。

報告書作成では、遺構平面図・壁面図・個別遺構図・遺物実測図等をスキャニングしたのち、Adobe 社製 Illustrator を用いて浄書・調整して、写真を Photoshop で調整して挿図・図版を作成した。また、その他の調査記録の整理を進め、これらから本文原稿や表・挿図等を作成し、InDesign で編集して印刷製本を行い、本書を刊行した。

### 8. 出土遺物及び成果品の保管

整理調査終了後の出土遺物は、報告書掲載遺物と対象外の遺物に分けて収納を行い、図面・写真・台帳・調査日誌等の成果品と共に、本町教育委員会において保管・管理している。

## 第4章 基本層序と遺構面

### 第1節 基本層序と各層の概要

今回の調査地では、現代盛土層(第1層)以下、部分的に現地表下 2.3 mまでの各調査区の地層を、前章でも述べたように表 3 の 22 層に細別した。これらを、耕作土層(以下、「作土」という。)等の土壌層や自然堆積層の連続性、各地層から出土した遺物の年代等から再検討し、本報告書では前回調査の基本層序である 16 層大別に比定して併記した。また、粒度や色調については、場所によって同一層内でも異なるため、代表例を表記し、幅をもたせて記述した。

なお、基本層序と微地形変化を把握しやすくするため、調査で確認された層序のうち、堆積時期の 最も古い層から順に記述する。

### 第22層

第 22 層は、灰白色のシルト質粘土~極粗砂層で、下層ほど砂礫中心となる。縄文時代後期以前の水成層か湿地性堆積物である。前回調査の第 7b 層である。枝番は 2 層からなる。

今回調査では、1-1 区の 1 ヵ所のみではあるが、第 22 層上面まで深掘りを行った。前回調査時には、層厚が 3 m以上あり、地表面から 8 m以上の掘削でも基底には達しなかった。この第 22 層が作った地形は、その後の尾山遺跡の土地利用に、大きく係わっていることは明らかである。

### 第21層

第 21 層は、明オリーブ灰色のシルト質粘土層で、縄文時代後期以前の土壌化した泥質の湿地性堆積物である。前回調査の第 7a 層である。

なお、前回調査では、第 7a 層上面から遺構は確認できなかった。しかし、第 7a 層除去後の下層からは、1 区で土坑(71 土坑)やピットが検出され、7 区で溝状の谷地形(464 谷地形)から、縄文時代後期中葉の深鉢等が出土している。

### 第20層

第 20 層は、灰白色の粘土質シルト~極粗砂層で、縄文時代晩期~弥生時代前期の水成層か湿地性堆積物である。前回調査の第 6b 層である。

前回調査では、砂礫は7区の一部に、土壌化した粘土質シルトは1区東側・3区東側・4区西側等の狭い谷地形において堆積していた。前回調査でも今回調査においても、畦畔や溝等の耕作遺構を確認できてはいないが、初期の水田が営まれた可能性がある。

なお、前回調査の1区で、縄文時代晩期以前の粗製土器破片が出土しているが、今回も詳細な第 20 層の時期は不明である。

### 第19層

第 19 層は、オリーブ灰色の極細砂質シルト〜粘土層で、縄文時代晩期〜弥生時代前期の土壌層である。前回調査の第 6a 層である。

前回調査では、段丘上の11区・12区を除く、調査範囲全体の広範囲において第19層を確認している。1区では溝や土坑を検出しているが、水田に係る耕作遺構等は検出できなかった。しかし、縄文時

代晩期~弥生時代前期の水田が営まれた可能性は極めて高い。

なお、前回調査の1区・2区において、土坑(59土坑)や溝(60溝)遺構を検出しており、突帯文 土器の深鉢や弥生土器の壷・甕・蓋、サヌカイト製石鏃等が出土している。遺物は、1区・2区・8区 において縄文時代晩期~弥生時代前期の土器が、4区・6区・7区・8区で縄文時代晩期の土器が出土 している。

### 第18層

第 18 層は、灰白色の極細砂質シルト~極粗砂層で、弥生時代中期前葉の水成層か湿地性堆積物である。前回調査の第 5b 層である。

前回調査では、7区・8区・9区で粗砂~極粗砂層の水成層が微高地を形成していたが、それ以外の 谷状地では極細砂~粘土質シルト層が堆積し、概して希薄であった。

なお、前回調査の7区で溝(393・617 溝)や土坑(392・394・396・397 土坑)等が、段丘上の11区で溝(521 溝)や土坑(514 土坑)等の遺構があり、弥生時代中期前葉の壷・甕等が出土している。

### 第17層

第 17 層は、オリーブ黒色の炭化物を僅かに含む粘土質シルト層で、弥生時代中期前葉以降の土壌層である。前回調査の第 5a 層である。

今回調査では、この第 17 層上面を第 2 遺構面とした。前回調査の段丘上 11 区・12 区や微高地上 7 区を除く、全域で堆積が確認される。前回調査では、微高地上の 1 区東端で水田遺構に係る溝(44 ~ 47・49・51・54・57 溝)や段差(608 段)が、4 区・5 区・8 区で水田遺構に係る溝(611 溝)や畦畔(286・287・361・612 ~ 614 畦畔)を検出した。今回調査の 3 区においても畦畔(202 ~ 208・211 ~ 222・224・225 畦畔)や 1-1 区溝(201 溝)を含む水田遺構を検出した。

なお、前回調査の1区微高地際の溝(44~47・49・51・54・57 溝)から、弥生時代中期以前の壷・甕・サヌカイトの剥片、突帯文土器深鉢、縄文土器深鉢等が、3区第17層中から弥生時代中期以前の蓋が出土している。

### 第16・15層

第 16 層は灰色の第 17 層小ブロック粒を多く含む極細砂質シルト層で、第 15 層はその上層の灰色のシルト層であって、弥生時代後期以前の湿地性堆積物である。第 16 層は土壌化傾向にある。前回調査の第 4-2b 層の下部堆積層である。

この2層は、前回調査の段丘上11区・12区や、微高地上2区・6区・7区等の高所を除き、第5a層の上面に安定的に堆積する。

なお、2層共に明確な遺物の出土はない。

### 第14層

第 14 層は、明オリーブ灰から灰色の極細砂質シルト層から極粗砂層で、弥生時代後期以降の水成層から湿地性堆積物である。前回調査の第 4-2b 層の上部堆積層である。枝番は 2 層からなる。

前回調査の段丘上 11 区・12 区や、微高地上 2 区・6 区・7 区等の高所を除き、堆積が確認できる。今回調査の 4 区・5 区北側より 3 区にかけての洪水層である第 14-1 層の層厚は、最大 0.6m、平均 0.3  $\sim 0.4$  mの堆積がみられ、南西側では層厚は次第に薄く、第 14-2 層の細砂質シルト層に変化する。堆積回数は、少なくとも  $a\sim c$  の 3 層の大きな堆積供給が 3 区で確認でき、複数回の堆積があったものとみられる。堆積方向は、1 区や 3 区の壁面図から、北側からの堆積物であることが確認できる。また、

前回調査の微高地上の弥生時代後期・古墳時代前期~中世の遺構は、この第 14 層上面で検出されている。

なお、前回調査では砂礫や極細砂質シルト層から、弥生時代後期~古墳時代前期の遺物が出土している。今回調査の 6-1 区においても、同様な結果を得ている。

### 第13層

第 13 層は、灰白色の極細砂質シルト層で、弥生時代後期以降~古墳時代前期初頭と考えられる土壌層である。前回調査の第 4-2a 層である。

今回調査の3区の堆積では、洪水堆積物である第14層の堆積で凸凹となっていた部分や、砂礫層が堆積しなかった埋め残し部分に堆積し、第13層上面では緩やかな傾斜面が形成されている。前回調査では、畦畔や溝等の水田に係る耕作遺構を僅かに検出しているが遺存状態が悪く、今回調査においても検出できていない。

なお、前回調査でも今回調査においても、第 13 層からの明確な遺物の出土はなかった。このため、 古墳時代前期初頭まで時期が下がる可能性がある。

### 第12層

第 12 層は、灰白色のシルト質粗粒砂~極粗砂層で、古墳時代前期初頭以前と考えられる水成層である。前回調査の第 4-1b 層である。

前回調査では、遺構内や低所の一部で堆積が見られた。今回調査では、堆積を確認できていない。 なお、前回調査でも今回調査においても、第12層からの明確な遺物の出土はなかった。

#### 第11層

第 11 層は、にぶい黄色の極細砂〜細砂質シルト層で、弥生時代後期〜古墳時代前期初頭の土壌層である。前回調査の第 4-1a 層である。

今回調査では、この第 11 層上面を第 1 遺構面とした。前回調査の段丘上 11 区・12 区や、微高地上 1 区西側・2 区等の高所を除く全域で確認され、北側の 1 区東側・3 区・4 区・5 区・14 区と、南側の 7 区・8 区・9 区・10 区の低地にて畦畔や溝を含む水田遺構(25・50・52・295・412・484・560~562・567・602 溝、303・411・413・595・603・604・621 畦畔)を検出した。微高地や段丘上では、同時期の溝(127・206・207・276・311・322・459・473・484・486 溝)や土坑(28・133・164・205・208・474~476・479・485 土坑)を検出した。今回調査においても、第 11 層上面にて広範囲に検出し、1 区では水田区画である畦畔(004~007・024・025・026 畦畔)や溝(001~003・016・020~023 溝)、柵(030・031 柵)等を、2 区では溝(002・003 溝)を、3 区では水田区画である畦畔(102~113 畦畔、114~118 水口)や溝(101 溝)、池(011 池)を、4-1・2 区では溝(003 溝)や土坑(007 土坑)を、6-1 区では溝(001・002 溝)や土坑(003~009 土坑)を、7 区では溝(001 溝)を検出した。

なお、前回調査では第11層の堆積時期を、弥生時代後期~古墳時代前期初頭(庄内式期新段階)または古墳時代前期(布留式期)を想定していたが、今回調査においても詳細な時期は明らかにできていない。

### 第10層

第 10 層は、灰白から浅黄色のシルト質細砂~極粗砂層で、古墳時代前期以前に形成された、水成層から湿地性堆積物である。前回調査の第 3-2b 層である。枝番は 2 層からなる。

前回調査では、段丘上の11 区・12 区で御所池瓦窯跡第 1 号窯と関連遺構(469 溝、488 ~ 493、496、498 ~ 500、533 ~ 535 土坑・ピット)を、微高地上の1 区西側・2 区・6 区・8 区等の高所で溝(383 溝)、土坑(91・231・234・242・243・246・255・259 土坑・ピット)、掘立柱建物(掘立柱建物 3)、井戸(241 井戸)等を検出した。今回調査においても、南北方向の 3 区では第 11 層土壌層を薄く覆うように低い部分に堆積していて、東西方向の 1 区では東端の層厚が最大 0.3m 余りあり、東端に行くに従い厚く堆積していることから、洪水堆積の砂礫の供給源は 3 区よりも東側に中心があるものと考えられた。

なお、前回調査時には第10層上面で古墳時代中期の遺構を検出しており、その遺物に須恵器を含まないことから、古墳時代前期以前に形成されたものと想定した。

### 第9層

第9層は、灰黄からにぶい黄橙色の粘土質シルト~極細砂質シルト層で、13世紀後葉以前の土壌層である。前回調査の、第3-2a層である。枝番は2層からなる。

前回調査では、2 区・3 区・4 区・7 区・8 区・9 区・10 区において、畦畔や溝を含む水田遺構(277・291・297・395・405 溝、456 ~ 458・618・619・622 畦畔)を検出した。

今回調査においても、南北方向の 3-1 区では第 10 層洪水層を厚く覆うように堆積し、東西方向の 1 区では東端の厚い第 10 層の堆積部分を除き堆積しているようで、3-2 区では第 9 層の堆積は確認できなかった。

なお、前回調査時には第9層を切る14世紀代の遺物を出土する10区405溝等の遺構の存在から、 13世紀中葉以前に形成されたと想定した。

### 第8・7・6層

第8層は灰白色のシルト質細砂〜粗砂層、第7層は灰白からオリーブ灰色のシルト質極細砂〜細砂層、第6層は灰から灰白色のシルト質細砂〜中砂層で、13世紀中葉〜14世紀前葉の水成層や湿地性堆積物である。前回調査の第3-1b層である。枝番は第8層が2層、第7層が4層、第6層が2層からなる。

今回調査では、第5層の土壌層上面を遺構面とすべきところであるが、この第6層上面を第0.5 遺構面とした。前回調査では、第14層が形成した微高地上の1区西側・2区・6区・8区・3区西端にこの時期の池泉(167 池泉)、井戸(131・132・332・357 井戸)、土坑(9・95・123・190・217・218・220・271・378・451・481・585~587 土 坑、76・89・147・495・554 ピット)、溝(115・118・119・150・157・159・160・162・168・221・272・279・336・375・417・444・465・446・582 溝)、掘立柱建物(掘立柱建物1)、柵(柱穴列1)平坦面(211平坦面)等を検出し、微高地の北側である3区・4区・5区・14区と、微高地の南側である7区・9区・10区でこの第6~8層の堆積を確認し、溝等の耕作遺構(453 溝)を検出した。今回調査においても、南北方向の3区では全体に薄く第9層を覆い尽くし、1区では最も低い谷地形を中心に第8層がほぼ谷を埋め尽くし堆積している状況を確認できる。さらにこの上に、第7層、第6層と堆積し、1区では第6~8層の層厚が最大約0.5mにまで達し、周辺の傾斜を著しく平坦にしている。砂礫の供給源は3-1区中央付近の北側に中心があるものと考えられた。また、今回調査では、3区第6層上面において、東西方向の溝2条と、これに直行する耕作溝を検出した。

なお、前回調査時には、上記の検出遺構出土遺物から、第6~8層の堆積時期を 13 世紀中葉~ 14

世紀前葉と想定している。

#### 第5層

第5層は、灰黄色から灰色のシルト質極細砂~極粗砂層で、中世の土壌層又は土壌化層である。前回調査の第3-1a層である。枝番は3層からなる。

前回調査の1区・2区の微高地周辺や、今回調査の1区・3区の沖積地においても耕作に伴い多くの遺物が細片ながら出土し、遺物包含層を形成していた。第5層上面で水田畦畔や耕作痕跡が確認できるところもあるが、第2層作土に削平攪乱されて確認できないことが多い。本来であれば、この第5層上面で第0.5遺構面の水田や畑を検出すべきであるが、上層に厚い間層がなく、第2層による直接の削平が畦の存在を不明確にしていること、耕作溝や溝が第5層下の第6層上面においても明瞭に残存しているものが見られたため、第5層上面での遺構面としての調査は行っていない。

### 第4層

第4層は、灰色の極細砂質シルト層で、中世〜近世の氾濫堆積物層が土壌化した土壌層や床土層である。部分的にラミナの残るところもあるが、多くは土壌化している。前回調査に無いので、第2a'層とする。

### 第3層

第3層は、礫( $\phi$ ~ 0.8 cm)30%を含む灰色から灰黄褐色のシルト質極細砂~細砂層で、近世~(近現代)の土壌層や床土層である。前回調査の第2a層である。

第3層上面では、水田畦畔や耕作痕跡が確認されている。礫( $\phi \sim 0.8 \, \mathrm{cm}$ )を含む第 2b 層の供給が、 局所的で遺存状態が良くないため、上層の第2層と重層的である。

### 第2層

第2層は、オリーブ黒色から灰白色のシルト質極細砂〜細砂層で、近世〜現代の土壌層である。前回 調査の第1a層である。枝番は2層からなる。

場所によっては、複数単位の堆積が見られることから、第 1b 層の存在が予想されるが、前回調査においても今回調査においても明確な層を確認していない。近世~現代において、厚い河川堆積や浸食が無く、薄い堆積であったことが原因かと考えられる。

### 第1層

調査地の土地利用は、近年まで水田または畑としての土地利用が顕著であったが、調査時点では客 土層による盛土が厚く覆っていた。前回調査に無いので、第1層とする。枝番は10層からなる。

### 第2節 調査地の地形と堆積状況

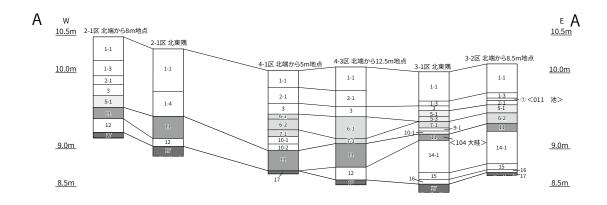
第2章第1節で述べたように、尾山遺跡の地勢は、大阪層群下部及び最下部が見られる北-北東側からの緩い主傾斜と、本山寺コンプレックスの山麓堆積からなる西-北西側の山麓からの急な傾斜よりなる。堆積物は、北-北東側の礫・砂・シルト及び粘土が堆積する後背湿地・沖積地性堆積物と、西-北西側山麓部の礫や砂が堆積する扇状地性堆積物からなり、調査地はこの境界域に立地する。前回調査の1区・2区は、後者の堆積物の上に形成された微高地上の居住域であり、今回の調査区の多くは前者の堆積物からなる生産域(水田)である。

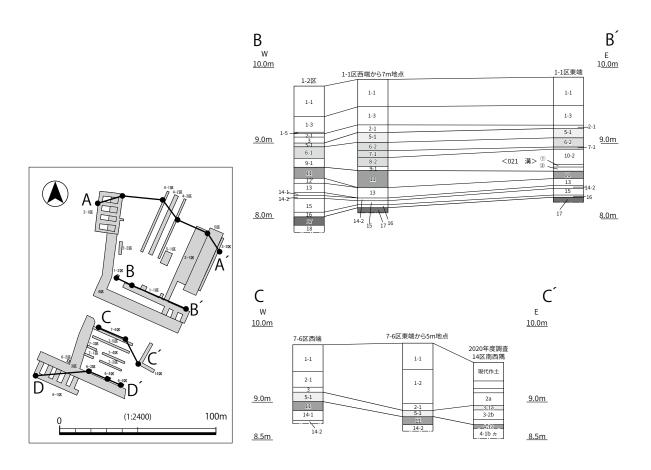
今回の調査地の地形を、前回調査の柱状図も一部用いて、東西柱状図を図4に、南北柱状図を図5に示した。今回の調査地は、東西幅約90m、南北長約150mで、東西にA~Dの4列、南北にE~Gの3列について柱状図を作成した。この内、鍵層となる中世の第5層(第3-1a層)上面、中世(13世紀中葉~14世紀前葉)の第0.5遺構面(第5層下層の第6~8層(第3-1b層)上面)、弥生時代後期~古墳時代前期初頭の第1遺構面(第11層(第4-1a層)上面)、弥生時代中期後葉~後期前葉の第2遺構面(第17層(第5a層)上面)の変化を中心に見てみる。

まず、東西柱状図の図4により、A~Dの4列について堆積状況を見てみる。

最も北側の A - A'の 6 地点直線距離約 85 mにおける、〔西〕2-1 区西端- 2-1 区北東隅- 4-1 区- 4-3 区-3-1 区北東隅-3-2 区北端から 8.5m〔東〕の、凡その高さ(標高)を示す。第2遺構面の各標高 は、〔西〕9.22m - 9.03m - 8.7m - 8.58m - 8.53m - 8.69m〔東〕である。第2遺構面では、西側か らの勾配は 0.5 度の緩い傾斜があり、東側でも少し高くなり、最も低い地点は西端よりも 0.7m 余り 低い、3-1 区周辺であった。4-1 区から 3-1 区にかけての低い平場が存在したものと見られる。その後、 東端から 4-3 区までが、第 16 ~ 14 層の湿地性堆積物、0.5m 以上の厚い堆積物により埋まる。第 1 遺 構面は、〔西〕9.55m-9.44m-8.98m-9.07m-9.2m-9.35m〔東〕である。第1遺構面では、上層 と同じように西側が最も高く、東側も少し高くなっているのは同じであるが、最も低い場所が周辺より 0.5m 余り低い 4-1 区周辺にあって、第 11 層は西側に厚く堆積する。その後、水成層の第 10 層や土壌 層の第9層が 4-1 区から 3-1 区に堆積し、益々谷が埋まっていく。さらにその上に、4-1 区~ 4-3 区中 心に第8~6層が厚く堆積する。第0.5遺構面では、〔西〕(削平)-(削平)-9.48m-9.43m-9.37m - 9.48m〔東〕である。第 0.5 遺構面でも、西側での堆積状況が上層の削平で不明であるが、下層と同 じように西側と東側が少し高く、3-1区の周辺が最も低いが、その差は少ない。第5層上面では、〔西〕 9.7 m-(削平)-(削平)-(削平)-9.5m-9.65m 〔東〕である。第5層上面では、西側での堆積状況 が上層の削平で不明であるが、地勢のごとく山麓の西側がやや高く、東端でも少し高くなり東西の落差 は少なく、中世では 4-1 区から 3-1 区の周辺が 0.2m 余り低くなっていたようである。その後、第 4 ~ 2層の堆積によって、工事開始前の西側から東側への傾斜景観が形作られたといえる。

中央部北側の B-B'の 3 地点直線距離約 50 mにおける、〔西〕 1-2 区-1-1 区西端から 7 m-1-1 区 東端〔東〕の、およその高さ(標高)を示す。第 2 遺構面の各標高は、〔西〕 8.02 m-8.14 m-8.29 m 〔東〕である。第 2 遺構面では、東側から西側への緩い傾斜があり、最も低い地点は西端の 1-2 区であるが、さらに西側に低い地点があることを推測させる。その後、A-A'では東側からの第  $14\sim16$  層の湿地性堆積物により埋まるが、ここでは西側の低地を中心に 0.3 m  $\mathfrak{s}$  り、東側でも薄く堆積が全体に





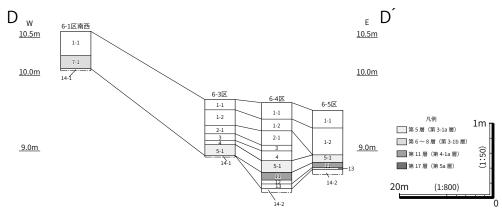


図 4. 調査区東西柱状図

及んで、平地化が進み土壌層である第 13 層(第 4-2a 層)がその上に安定的に形成されている。第 1 遺構面は、〔西〕 8.68m - 8.64m - 8.63m 〔東〕である。僅かに西側への傾きが見られるが、比較的安定した堆積となっている。その後、水成層第 10 層の 0.2m 余りの洪水堆積を、1-1 区東端に確認できる。この洪水堆積を埋めるように、西側の 1-2 区~ 1-1 区西端に第  $6 \sim 8$  層が堆積して、ほぼ平坦化している。第 0.5 遺構面は、〔西〕 8.95m-9.01m-9.08m 〔東〕である。第 0.5 遺構面でも、下層と同じように東側が少し高いが、その差は少ない。第 5 層上面では、〔西〕 9.0m-9.14m-9.2m 〔東〕である。第 5 層上面でも、東側よりも西側がやや低く、中世では 1-2 区から西側が 0.2m 余り低くなっている。

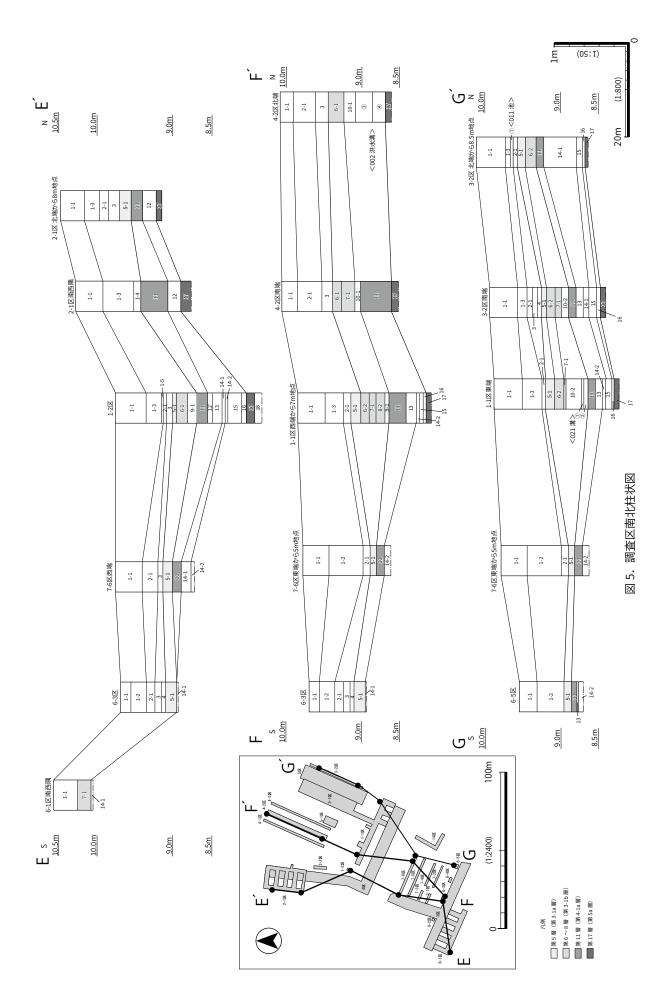
中央部南側のC-C'の3地点直線距離約37mにおける、〔西〕7-6区西端-7-6区東端から5m-2020年度14区南西隅〔東〕の、およその高さ(標高)を示す。この調査区では、第1遺構面までが調査対象である。第1遺構面は、〔西〕9.02m-8.82m-8.71m〔東〕である。東側への明らかな傾きが、見られる。その後、水成層第10層(第3-2b層)の0.2m余りの洪水堆積を、2020年度14区南西隅に確認できる。第0.5遺構面は確認できないが、第5層上面では、〔西〕9.13m-8.88m-8.97m〔東〕であった。第5層上面では、第10 層(第3-2b 層)の洪水堆積で東側が少し上がり、7-6 区東端周辺が最も低くなっている。

最も南側の D - D'の 4 地点直線距離約 56m における、〔西〕6-1 区南西隅 - 6-3 区 - 6-4 区 - 6-5 区 [東〕の、およその高さ(標高)を示す。この調査区では、第 1 遺構面までが調査対象である。第 1 遺構面の第 11 層についても、6-1 区南西隅と 6-3 区では確認されておらず、6-1 区南西隅では第 7-1 層下に、6-3 区では第 5-1 層下に、直ぐに第 14-1 層(第 4-2b 層)の微高地形成層がみられる。第 1 遺構面の高さは、〔西〕(未堆積) - (未堆積 or 削平) - 8.73m - 8.86m 〔東〕である。6-4 区周辺が最も低く、再び東側に高くなる。第 0.5 遺構面は確認できず、第 5 層が第 11 層上面に直接堆積する。第 5 層上面の高さは、〔西〕(未堆積 or 削平) - 9.09m - 8.88m - 8.96m 〔東〕である。ここでも、6-4 区周辺が最も低く、再び東側に高くなる。その後、6-4 区周辺では第 4 層(第 2a'層)の堆積が確認でき、緩やかな東下がりの安定的な地形が形成されている。

この東西柱状図 A ~ D の 4 列により、読み取れる地形がある。第 2 遺構面では、6 区と 7 区が第 2 遺構面まで調査を行っていないものの、第 1 遺構面・第 0.5 遺構面・第 5 層上面では、丘陵のある西側と JR 東海道本線のある東側の間に、やや南南東方向に振る南北方向の浅い谷状地(を流れる河川又は溝)の存在することが読み取れる。その位置は、第 2 遺構面の第 17 層(第 5a 層)上面では、A 列が最も西端の 2-1 区北端よりも西側に、B 列でも西端の 1-2 区よりも西側にあり、C 列と D 列は不明ではあるが、第 5 層上面の最も低い地点の周辺を通過しているものと考えられる。第 1 遺構面の第 11 層(第 4-1a 層)上面では、A 列が 4-1 区北端から 8 m南と 2-1 区北東隅との間に、B 列が 1-1 区西端に、C 列が 7-6 区東端と 2020 年度調査 14 区の間に、D 列が 6-5 区の東側を通過していると考えられた。また、A 列と B 列では西側への緩やかな傾斜があるのに対し、C 列では東側への緩やかな傾斜に変化し、下層の第 2 遺構面よりも埋積が進み、東西面では傾斜が極めて緩い平地化が進んでいることを示している。さらに、その後の中世~近世に堆積した第  $4 \sim 2$  層により、現代耕作土上面の緩い東側傾斜の景観に変化させてきたものと考えられる。

次に南北柱状図の図 5 により、 $E \sim G$  の 3 列について堆積状況を見てみる。

最も西側の E - E' の 6 地点直線距離約 120 mにおける、〔南〕6-1 区南西隅- 6-3 区- 7-6 区西端- 1-2 区- 2-1 区南西隅- 2-1 区北端〔北〕の、およその高さ(標高)を示す。第 2 遺構面は、1-2 区から北側



について調査を行っている。その標高は、「南」8.02m-8.9m-9.22m [北] である。第 2 遺構面では、北側からの勾配は 1.3 度余りの傾斜があり、最も低い地点は 1-2 区の西側にある。その後、低い部分を中心に第  $16\sim12$  層により埋積していく。第 1 遺構面は、南側の微高地上の 6-1 区南西隅では見られないが、7-6 区西端から北側で確認でき、その高さは〔南〕9.02m-8.68m-9.42m-9.55m [北〕である。最も低い地点は、1-2 区の東側に移動する。第 0.5 遺構面は、標高の低い 1-2 区周辺のみに見られ、8.92 mである。第 5 層上面は、後世の削平で不明な地点もあるが、〔南〕 (未堆積) -9.1 m-9.12m-9.0m-(削平)-9.7m [北〕である。6-3 区 $\sim1-2$  区では、最も低い 1-2 区周辺で下がり、北側へは再び 0.5 m余り高くなる。勾配は、0.7 度余りと、第 2 遺構面の半分と緩やかである。

中央の F-F' の 5 地点直線距離約 125m における、〔南〕 6-3 区-7-6 区東端から 5m-1-1 区西端から 7m-4-2 区南端-4-2 区北端〔北〕の、およその高さ(標高)を示す。第 2 遺構面は、1-1 区から北側について調査を行っている。その標高は、〔南〕 8.14m-8.6m-8.7m 〔北〕である。第 2 遺構面の最も低い地点は、1-1 区の西側で急に下がっている。1-1 区周辺の低い地形にあっては、第  $16\sim13$  層により埋積している。第 1 遺構面は、南側の微高地裾の 6-3 区では見られないが、7-6 区西端から北側で確認でき、その高さは〔南〕(未堆積)-8.82m-8.64m-9.0m-(洪水層にて削平)〔北〕である。最も低い地点は、1-1 区の西側にある。第 0.5 遺構面は、標高の低い 1-1 区周辺から北側で確認でき、「南〕(未堆積)-9.01m-9.38m-9.45m 〔北〕である。第 5 層上面は、北側が洪水堆積で不明な地点もあるが、〔南〕 9.09m-8.88m-9.14m-(削平)-(削平)〔北〕である。標高の最も低い所は、7-6 区から 1-1 区の間に移動してくる。

最も東側の G-G' の 5 地点直線距離約 106 mにおける、 [南] 6-5 区-7-6 区東端から 5m-1-1 区東端-3-2 区南端-3-2 区北端から 8.5m [北] の、およその高さ(標高)を示す。第 2 遺構面は、1-1 区東端から北側について調査を行っている。その標高は、 [南] 8.29m-8.48m-8.69m [北] で、勾配は約 0.6 度である。1-1 区から北側では、その後第  $16\sim14$  層が厚く堆積している。第 1 遺構面は、全ての地点で確認でき、その高さは [南] 8.86m-8.82m-8.63m-8.9m-9.35m [北] である。最も低い地点は、7-6 区と 1-1 区の間にある。最も低い 1-1 区周辺では、第 10 層洪水層が 0.3m 余り堆積している。勾配は、0.8 度余りとなる。第 0.5 遺構面は、標高の低い 1-1 区周辺から北側で確認でき、 [南] (未堆積) -9.01m-9.38m-9.45m [北] である。第 5 層上面は、 [南] 8.96m-8.88m-9.2m-9.25 m-9.65 m [北] である。第 1 遺構面や第 0.5 遺構面同様に最も低い地点は、7-6 区と 1-1 区の間にあるようである。

この南北柱状図  $E \sim G$  の 3 列によっても、読み取れる地形がある。ここでも、第 2 遺構面では、同様に 6 区と 7 区が第 2 遺構面まで調査を行っていないものの、丘陵のある西側と IR 東海道本線のある東側の間を、北側から南側への基本的な傾斜の間を縫うように、やや南南東方向に振る南北方向の浅い谷状地(を流れる河川又は溝)の存在することが、東西柱状図と同じように読み取れる。その位置は、第 2 遺構面の第 17 層(第 5a 層)上面では、E 列が 7-6 区西端と 1-2 区の間を、F 列が 6-3 区と 7-6 区東端の間を、G 列が 6-5 区よりも西側を通過していると考えられた。第 1 遺構面の第 11 層(第 4-1a 層)上面では、E 列が 2-1 区北端から 8 m南の東側を、F 列の 7-6 区東端から 5 m西の東側を、G 列の 6-5 区と 7-6 区東端から 5 m西の東側を、5 のの 5 区と 5 のを表えられた。これらの結果は、東西列と南北列共にほぼ同じ結果であった。

# 第5章 調査成果

# 第1節 各調査区の遺構と遺物

ここでは調査区ごとに、遺構面検出の遺構や出土遺物について概要を報告し、各調査区を縦覧した 各遺構面の総括的な内容は、第5章総括において遺構変遷として記述することにする。

なお、今回の様にトレンチやグリット調査を主とした調査では、遺構名は第3章において先述したように、隣接する各調査区間においてさえ同一の遺構であることを確認することは極めて困難である。 今回調査の遺構番号は、調査区ごとに機械的に遺構番号が連番でふられており、同一の遺構と考えられても、調査区で異なる遺構番号が付されているものがある。

#### **1-1 区**(図 6 ~ 13、写真図版 1-1、2-1・2)

本調査区は、2 面調査である。前回調査の 4 区北側にあたる。第 1 遺構面である第 11 層 (第 4-1a 層) 上面では、溝 4 条、洪水溝 7 条、畦畔 3 条、杭列 2 条を検出した。第 2 遺構面である第 17 層 (第 5a 層)上面では、溝 1 条を検出した。

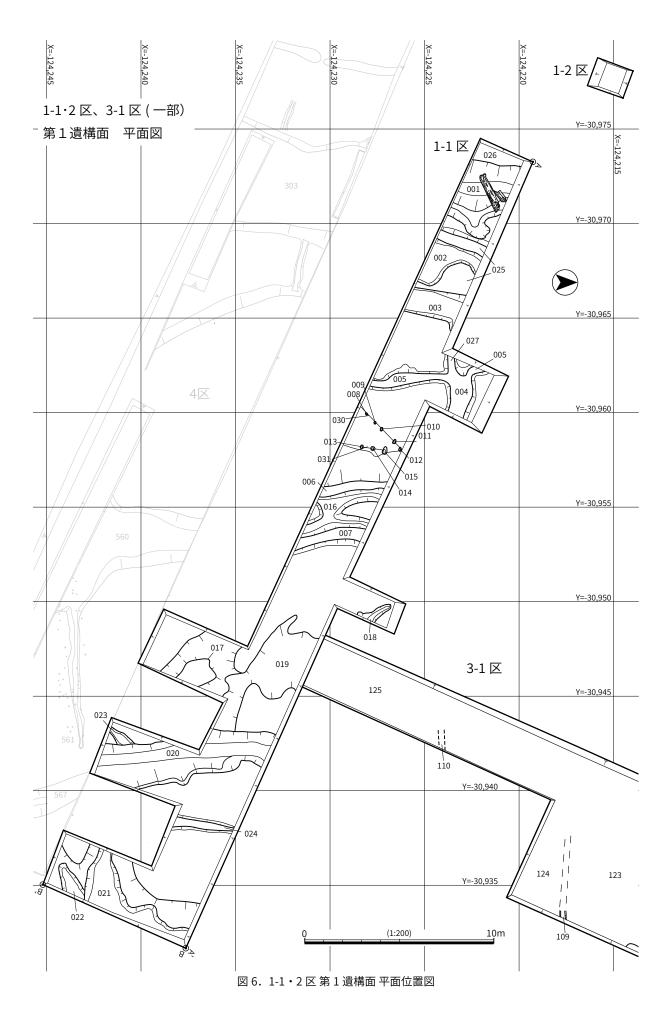
なお、図9に示した3点の遺物が出土した。第4層から、01土師器皿が出土した。時期は、口径の大きさからN系列11A・B期で、江戸時代前期の17世紀前半の遺物と思われる。第5層から、02須恵器の壷または甕の口縁部片が出土した。時期は、飛鳥時代のTK217型式新相の7世紀中葉の遺物と思われる。第8層から、03瓦質土器鍋が出土した。時期は中世の7A~C期、13世紀後半~14世紀前葉と考えられる。

#### 「第1遺構面」

### **001溝**(図 6 ~ 9、写真図版 3-1 ~ 5)

1-1 区の北西端で検出した。前回調査の 4 区 307 流路と同一遺構である。第 11 層 (第 4-1a 層) から掘り込まれた、南北方向の溝である。検出できたのは、トレンチを横切る延長約 2.6 m、上幅 4  $\sim$  4.2 m、畦畔上面までの深さは 0.82 m、溝底からは最大 0.96 mもの厚い堆積で、南方向の調査区外へと延びる。断面形状は、逆台形である。

堆積状況から、少なくとも埋土は①~③層、④~⑧層、⑨~⑯層、⑰・⑱層の4回の変遷を確認できる。この内、図9の壁面図からも明らかなように、001溝の最終段階ともいえる、①~③層の埋土で埋まる溝がある。この溝は、埋没後に第9層(第 3-2a 層)が被るが、下層の砂礫層の溝外にまで溢れ出た高まりの上に堆積していて、畦畔状の沖積リッジとなっている。前回調査において、303 畦畔とされたものに相当する。この 001 溝の両側には、東側に 025 大畦が、西側に 026 大畦が伴う。この 025 大畦と 001 溝の間には、026 大畦側にはない平坦な中段ができている。流路は溝底幅いっぱいに常に流れているのではなく、大畦間を蛇行しながら流れていたのではないかと考えられる。東側に堆積を広げた⑩層は、025 大畦を越え 002 洪水溝に切られており、溝の最終段階の堆積である①~③層がこの002・003 洪水溝によるものである可能性がでてくる。001 溝は、その断面規模が大きく、それに伴う流量も大きい。第 11 層水田面から溝底までの深さは 77 cmで、給排水路として大きな効果をもつ溝であったといえる。



-26-

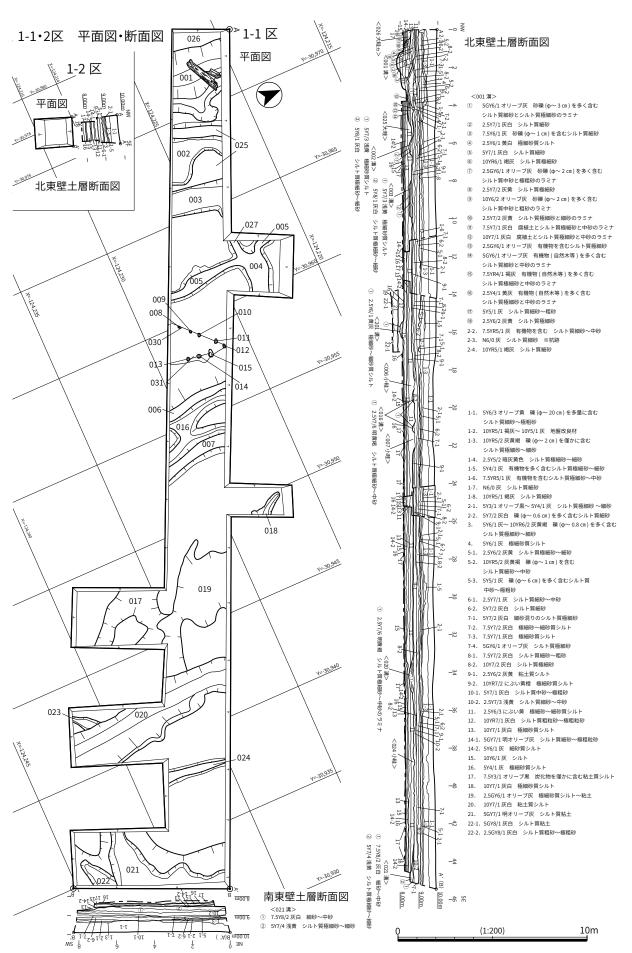


図7.1-1・2区第1遺構面平面図・壁面図

#### 1-1区 北東壁

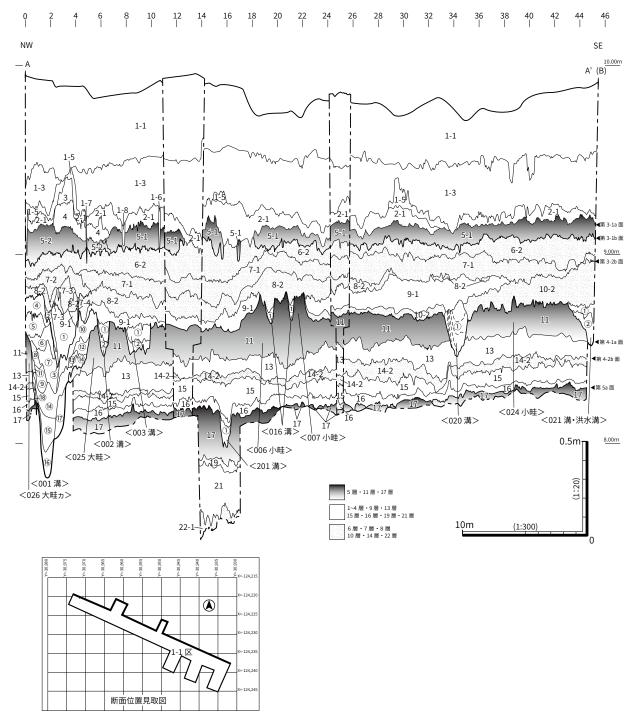
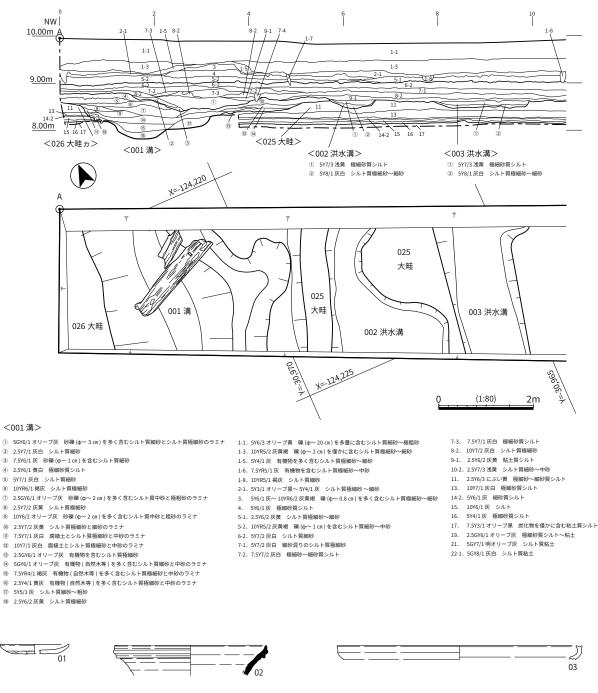


図8.1-1区北東壁縦横変倍図

埋土は 18 層で、①砂礫( $\phi \sim 3$  cm)を多く含むシルト質細砂とシルト質極細砂のラミナ、②シルト質細砂、③砂礫( $\phi \sim 1$  cm)を含むシルト質細砂、④極細砂質シルト、⑤シルト質細砂、⑥シルト質極細砂、⑦砂礫( $\phi \sim 2$  cm)を多く含むシルト質中砂と極粗砂のラミナ、⑧シルト質極細砂、⑨砂礫( $\phi \sim 2$  cm)を多く含むシルト質中砂と粗砂のラミナ、⑩シルト質極細砂と細砂のラミナ、⑪腐植物混ざりのシルト質極細砂と中砂のラミナ、⑪腐植物混ざりのシルト質極細砂と中砂のラミナ、⑬有機物を含むシルト質極細砂、⑭有機物(自然木等)を多く含むシルト質極細砂と中砂のラミナ、⑮有機物(自然木等)を多く含むシルト質極細砂と中砂のラミナ、⑯有機物(自然木等)を多く含むシルト質極細砂と中



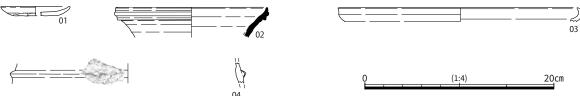


図 9. 1-1 区 第 1 遺構面 001 溝、002・003 洪水溝、025・026 大畦、包含層出土遺物

砂のラミナ、⑰シルト質細砂〜粗砂、⑱シルト質極細砂である。①〜③層は水成堆積、④〜⑧層は⑦層 が水成堆積で他は湿性堆積、⑨~⑯層は有機物と砂礫のラミナからなる堆積が繰り返していた水成堆積 で、⑰・⑱層は当初の堆積物で湿性堆積に近い堆積である。有機物(自然木等)を含む⑮・⑯層では、 厚さ 1 cm以下の薄い板材 2 枚(長さ 2.17 m×幅約 0.4 m、長さ約 0.9 m×幅約 0.3 m)が底から浮い た状態で出土したが、加工痕跡は確認できなかった。

なお、図9の04突帯文土器の深鉢は、⑦~⑨層中から1点出土したもので、肩部突帯の破片であ る。器形は小片のためはっきりしないが、口縁部と肩部に各1条の突帯をもつもので、肩部で緩やかに 屈曲し、頸部は内湾または外傾する器形とみられる。肩部の復元径は、直径 24 cm余りである。突帯文の刻目形状は、刻み目断面が小さな半円形を呈するo字形である。器壁は約 7 mmである。時期は口縁部や胴部が無いこともあり年代決定の要素に乏しいが、長原式中相(林 A-2 類)と考えられる。

#### $025 \cdot 026$ 大畦 (図 6 $\sim$ 9)

1-1 区の北西端で検出した。001 溝の両側に大畦があり、東側を025 大畦、西側を026 大畦とする。 前回調査の4区の東側606 畦畔と西側605 畦畔と同一遺構である。025・026 大畦は、第11 層を削り 出して作っている。

025 大畦は、畦上を 002 洪水溝が蛇行しながら流れ、肩部が壊されていることから、その規模ははっきりとしない。025 大畦の検出できた規模は、延長約  $2.6\,\mathrm{m}$ 、水田面との高さ  $5\,\mathrm{cm}$ 余りで、幅は 002 洪水溝の西側までとすると上幅  $0.5\sim0.58\mathrm{m}$ 、下幅  $0.9\sim1.1\,\mathrm{m}$ 、003 洪水溝の西側までとすると上幅  $2.8\sim3.2\mathrm{m}$ 、下幅約  $3.3\sim3.5\mathrm{m}$  となる。前回調査の幅が  $1.2\sim1.8\mathrm{m}$  であるので、東肩は洪水溝に壊されていることになり、本来の  $025\,\mathrm{大畦東}$  再は  $002\,\mathrm{洪水溝}$  と  $003\,\mathrm{洪水溝}$  の間にあったことになる。さらに、図  $8\,\mathrm{北東壁を確認すると}$ 、水田面と  $2\,\mathrm{cm}$ 余りの差がある部分があり、これが畦東端とすると上幅約  $1.9\mathrm{m}$ 、下幅  $2.36\mathrm{m}$  に復元される。なお、前回調査では、 $025\,\mathrm{大畦の内側}$  同部に、溝に並行して畦畔を補強するためと思われる杭列(杭列 6)が部分的に検出していたが、今回調査範囲では検出されなかった。

026 大畦は大部分が西側調査区外にあり、規模は明らかにできなかった。

#### **002・003 洪水溝**(図 6 ~ 9、写真図版 4-1・2)

1-1 区の北西で検出した。前回調査でも検出されている。北東からきた洪水が 025 大畦に当たり、溝状に第 11 層水田面や 025 大畦を壊して流れた洪水溝で、第 9 層(第 3-2a 層)がこの上に被る。検出できた規模は、延長約 2.6 m、幅は溝が蛇行していて曖昧であるが、002 洪水溝で  $1 \sim 2.5$  m、深さ  $16 \sim 25$  cm余り、003 洪水溝で  $1.3 \sim 2$  m、深さ  $17 \sim 32$  cm余りであった。埋土はどちらの洪水溝も 2 層で、①極細砂質シルト、②シルト質極細砂〜細砂と同じであり、一つの流れが枝分かれして堆積したものと考えられる。前回調査の 4 区では、1 本の溝となっているので、再び南側で合流したものと思われる。この洪水溝は、001 溝の⑩層を切るので、001 溝の①~③層を埋没させて大きな畦(303 畦畔)を形成したのは、この洪水溝の堆積物ではなかったかと考えられる。出土遺物はなかった。

### 016 溝(図6~8・10、写真図版4-4・5)

1-1 区の中央で検出した。016 溝の両側には小畦を伴い、西側を 006 小畦、東側を 007 小畦とする。前回調査の 4 区 560 流路と同一遺構である。南北方向の溝である。溝の上部は北東からきた第 8 層洪水砂に洗刻され、畦畔は上部が消失して高さを減じ、溝底しか残っていない。溝内は狭い溝が交差しながら 2 本流れ、中央には中島状のものが残されている。これも 001 溝と同様で、蛇行しながら流れた流路の痕跡が、溝底に残ったものではないかと思われる。検出できた規模は、延長約 3.5 m、上幅 1.7~2 m、深さ 15~ 27 cm余りで、南方向の調査区外へと延びる。残存する埋土は 1 層のみで、①シルト質極細砂~中砂であった。断面形状は、皿状から U 字状である。016 溝の上のみ第 9 層(第 3-2a 層)が堆積していないが、これは第 9 層を覆った第 8 層(第 3-1b 層)洪水層が、001 溝と同じように沖積リッジとなっていた溝上部を洗刻したためと考えられる。この小畦を両側に伴う 016 溝は、上部が壊されているにも関わらず、図 8 の如く第 11 層水田面よりも 14~ 20 cmも高く突出し、さらに溝底は第 11 層の水田面よりも高く、排水溝には成り得ない給水用の溝といえる。出土遺物はなかった。

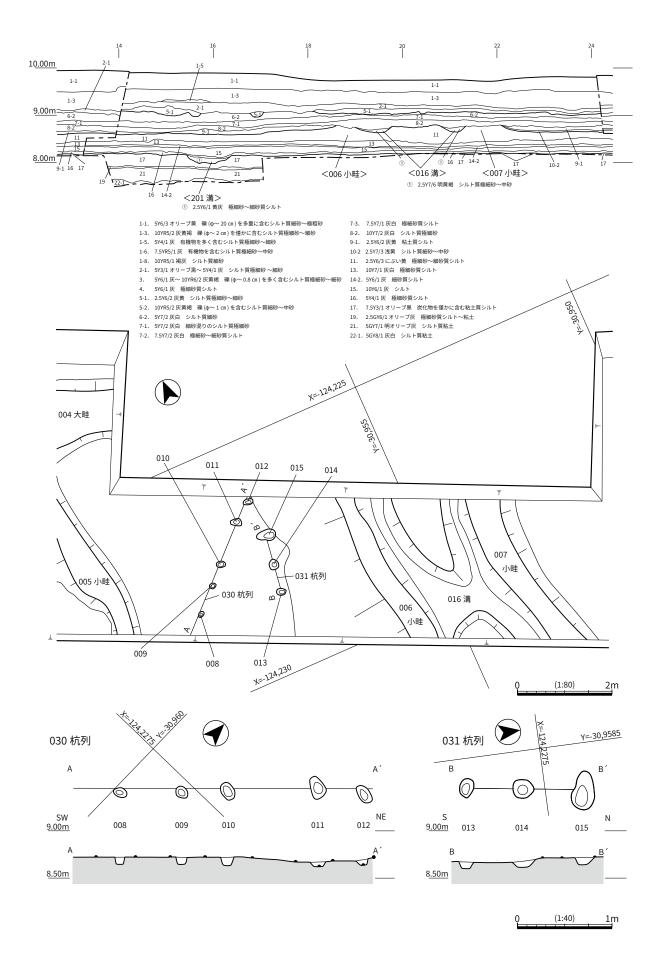


図 10. 1-1 区 第 1 遺構面 016 溝、006・007 小畦・030・031 杭列

#### **006・007 小畦**(図 6~8・10、写真図版 4-4)

1-1 区の中央で検出した。016 溝の両側に伴う小畦で、西側を 006 小畦、東側を 007 小畦である。第 11 層を削り出して作った部分が残っているが、消失した上部は、盛土であったかもしれない。

006 小畦は、現況の規模から小畦としているが、大畦であった可能性がある。現況の検出できた規模は、延長約 3.4 mで、幅は 006 小畦の西肩下までとすると上幅  $0.4 \sim 0.56$ m、下幅  $0.74 \sim 0.9$  mで、高さ  $3 \sim 4$  cm余りとなる。しかし、006 小畦西側の 031 杭列が畦畔補強用の杭列で下場を示すものだとすると、現況では緩やかな傾斜となっている水田面と考えている部分が、消失した畦畔部分となり、下幅約  $1.9 \sim 2.7$ m、高さ  $18 \sim 20$  cm余りとなる。

007 小畦の現況の検出できた規模は、上幅  $0.4 \sim 0.6$ m、下幅  $0.9 \sim 1.2$  mで、高さ  $12 \sim 16$  cm余りとなる。洪水層である第 10 層(第 3-2b 層)は、この 007 小畦で止まり、西側には及んでいない。

#### $017 \sim 019 \cdot 023$ 洪水溝(図 6 · 7、写真図版 4-7)

1-1 区の南東から南東端で検出した。017・018・019・023 洪水溝は、第 11 層水田面を洗刻し覆う、第 10 層(第 3-2b 層)の洪水層の溝である。017・018・019 洪水溝は、北西方向の 018 洪水溝側から南東方向の 017 洪水溝や 019 洪水溝側に流れ、020 溝上部を覆い堆積する。形状は図 7 の様に不定形で、幅 5m 以上に広がり、深さは水田面から 10 cm以上に及んでいる。023 洪水溝についても、後述する 020 溝の上部に、北東方向から第 10 層洪水砂を堆積する流れの痕跡である。出土遺物はなかった。

#### **020 溝**(図 6~8・11、写真図版 5-1・2)

1-1 区の南東で検出した。前回調査の 4 区 562 溝と同一遺構である。検出できた規模は、延長約 9 m、幅  $1.5 \sim 2.4$  m、深さ  $21 \sim 24$  cm余りで、南方向の調査区外へと延びる。残存する埋土は 1 層のみで、①シルト質極細砂~中砂のラミナであった。断面形状は、皿状である。この 020 溝も洪水砂の堆積でリッジとなり、30 cmの厚みの堆積が残る。020 溝に伴う畦畔は、洪水砂が押し寄せた東側は、図 8 の如く著しく水田面を洗刻して荒れていて、西側も同様な状況がみられ、畦畔の存在は確認できなかった。溝底は、畦畔が存在したかどうかの問題もあるが、水田面から 20 cm余り下にあり、排水溝の可能性がある。なお、020 溝の北側延長部は、3-1 区で表れる可能性が高かったが、痕跡を確認できなかった。平面図をよくみると、北東壁際で東に僅かに折れ曲がっているようにもみえ、3 区 101 溝に繋がるか、それとも 3-1 区までの間で止まっている可能性もある。出土遺物はなかった。

# **021 溝・洪水溝**(図 $6 \sim 8 \cdot 12$ 、写真図版 $5-4 \sim 6$ )

1-1 区の南東端で検出した。前回調査の 4 区 561 流路の東側延長部の可能性がある。この溝は、図 8 でも明らかなように、北側方向からの第 10 層(第 3-2b 層)洪水層が 3 区 101 溝の西側 102 大畦沿いに南東方向に流れ、西側方向にも広がる位置に当たる。この 1-1 区南東端では、第 11 層上面に堆積するのみではなく、洪水の推力が大きかったため、洗刻が第 13 層(第 4-2a 層)や第 14 層(第 4-2b 層)にまで達し、当初の遺構の存在を分からなくしている。検出できた規模は、延長約 7 m、幅 0.7~2 m以上、深さ 18~37 cm余りで、南北方向の谷状地になっている。埋土は 2 層で、①細砂~中砂、②シルト質極細砂~細砂で、いずれも水成堆積物であった。断面形状は、皿状である。では、洗刻される前の遺構とはどんなものであったのか。痕跡としては、西側の 020 溝側に延びる溝の存在がある。この延長を図 6 の前回調査 4 区の遺構からみてみると、南北方向の 560 流路に接続し直交する、東方向に流れ延びる 561 溝があり、この東側延長部が今回調査の狭く溝状になる 021 溝・洪水溝の西側に繋がる可能性があるように思われる。前回調査の 4 区 561 溝の規模は、幅 0.2~ 0.6m、深さ 10 cmである。

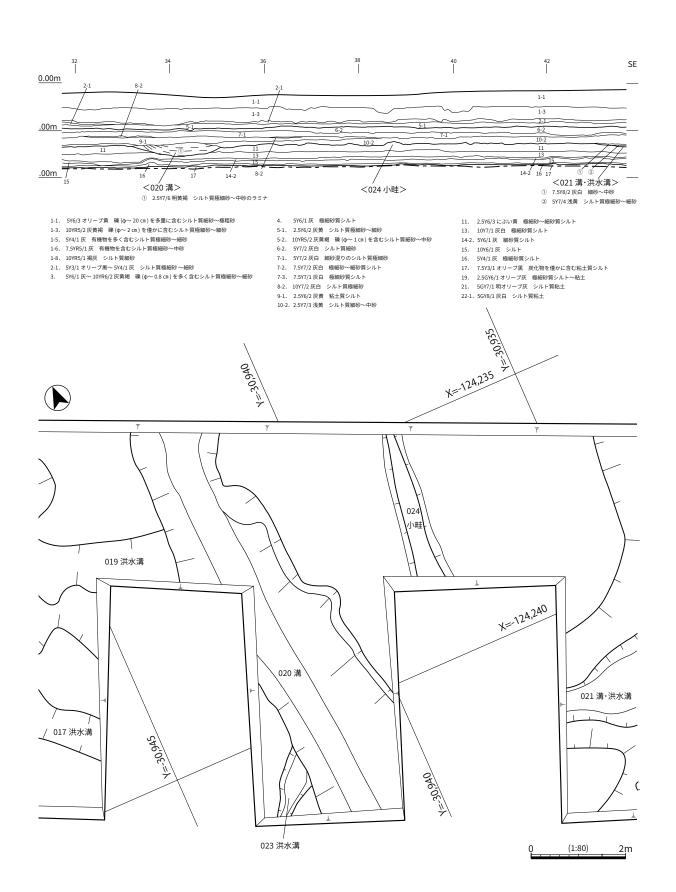


図 11. 1-1 区 第 1 遺構面 017・019・023 洪水溝、020 溝、024 小畦

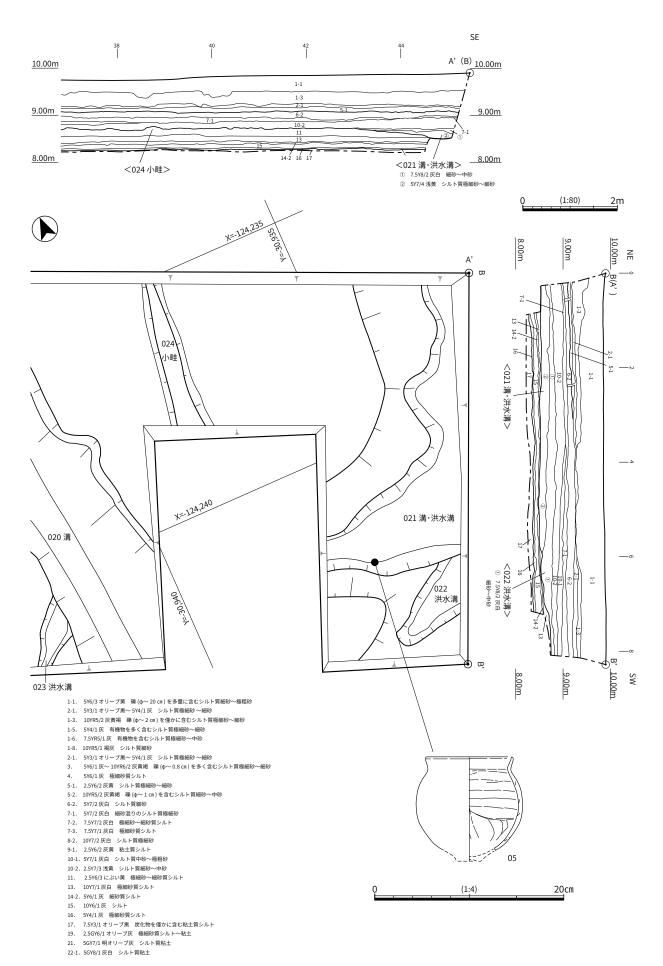


図 12. 1-1 区 第 1 遺構面 021 溝・洪水溝、022 洪水溝、遺構出土遺物

西側で560流路に接続し、流向は東方向である。

なお、021 溝・洪水溝の狭く溝状になる部分で、溝底に接して、完形土器が縦方向に割れて重なった 状態で、図 12 の 05 小型鉢 C が出土した。器面の摩滅が激しいが、時期は弥生時代後期後半新段階の 遺物と考えられる。第 11 層の水田遺構の最終時期を示す遺物といえる。

#### **022 洪水溝**(図 6 ~ 8 · 12、写真図版 5-4 · 5)

1-1 区の南東端で検出した。検出できた規模は、延長約  $2.2 \,\mathrm{m}$ 、幅  $0.4 \sim 1 \,\mathrm{m}$ 以上、深さ  $5 \sim 26 \,\mathrm{cm}$ 余りである。 $021 \,$ 溝・洪水溝と同じ埋土の上層である、(1)層の洪水堆積物で埋まる。

#### 004 大畦・005 小畦・024 小畦・027 小畦(図 $6 \sim 8 \cdot 10 \cdot 12$ 、写真図版 4-3、5-3)

畦畔で、明確に確認できたものは少ない。検出した畦畔の方向は、001 溝や 016 溝の方向と同じ南北 方向か、それに直交する東西方向の畦畔である。

005 小畦・027 小畦と 004 大畦は、調査区の北西で検出した。005 小畦は南北方向の小畦で、東西方向の 004 大畦と直交して接続した部分から、西側を 027 小畦とした。005 小畦の検出できた規模は、延長約 6 mで、上幅  $0.3 \sim 0.6$ m、下幅  $0.6 \sim 1.2$  mで、高さ  $3 \sim 5$  cm余りである。004 大畦の検出できた規模は、延長約 2.6 mで、上幅  $0.9 \sim 1.2$ m、下幅  $1.3 \sim 1.6$  mで、高さ  $5 \sim 7$  cm余りであった。004 大畦や 005 小畦・027 小畦が検出された場所は、001 溝の東側であるが、溢流堆積物が被覆していたためか、前回調査でも 001 溝周辺で、畦畔( $621 \cdot 622 \cdot 303$  畦畔)が検出されている。

024 小畦は南東で検出した。南北方向の畦畔である。024 小畦の検出できた規模は、延長約  $3.1~\mathrm{m}$ で、上幅  $0.2\sim0.5\mathrm{m}$ 、下幅  $0.35\sim0.7~\mathrm{m}$ で、高さ  $3\sim7~\mathrm{cm}$ 余りである。

#### 030 杭列・031 杭列(図 6・7・10、写真図版 4-6)

1-1区の中央で検出した。2条の杭列が交差した状態で確認された。

030 杭列は、直径 5 cm以下の 5 本の杭( $008 \sim 012$ P)からなる。抜き取られていたものか、杭は残存していなかった。検出できた規模は、延長約 2.6 mで、座標北から東に 46 度振る。北方向と南方向の調査区外に延びる。第 11 層上面でこの方向の遺構は他になく、どのような性格の遺構かは不明である。

031 杭列は、直径 5 cm以下の 3 本の杭( $013\sim015P$ )からなる。杭は残存していなかった。検出できた規模は、延長約 1.2 mで、座標北から東に 8 度振る。南北方向に延びるかは不明である。この杭列は、016 溝の西側 006 小畦が大畦であった可能性を示す、畦畔補強用の杭列と考えている。

### [第2遺構面]

#### **201 溝**(図 7・8・10・13、写真図版 6-1・2、7-1~4)

1-1 区の北西で検出した。前回調査の 4 区 613 溝と同一遺構である。検出できた規模は、延長約 1.7 m、幅  $0.4 \sim 0.5$  m、深さ  $10 \sim 17$  cm余りで、座標北から東に 56 度余り振り、北東方向から南西方向の調査区外へと延びる。残存する埋土は 1 層のみで、①極細砂~細砂質シルトの湿地性堆積物であった。断面形状は、皿状である。前回調査の 613 溝は、「幅  $0.2 \sim 1.4$  m、深さ 0.06 m、埋土は泥質堆積物である。溝の両側に擬似状の高まりを検出しており、畦畔を伴っていた可能性がある。」とあるが、明確な畦畔は確認できなかった。しかし、下層のブロック粒が溝の両側に多く見られたことから、可能性は高いように思われる。堆積物や溝の規模から、排水溝であったと考えている。

### **1-2 区**(図 6 · 7 · 13、写真図版 7-5 ~ 8)

本調査区は、2 面調査である。第 11 層及び第 17 層上面で遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

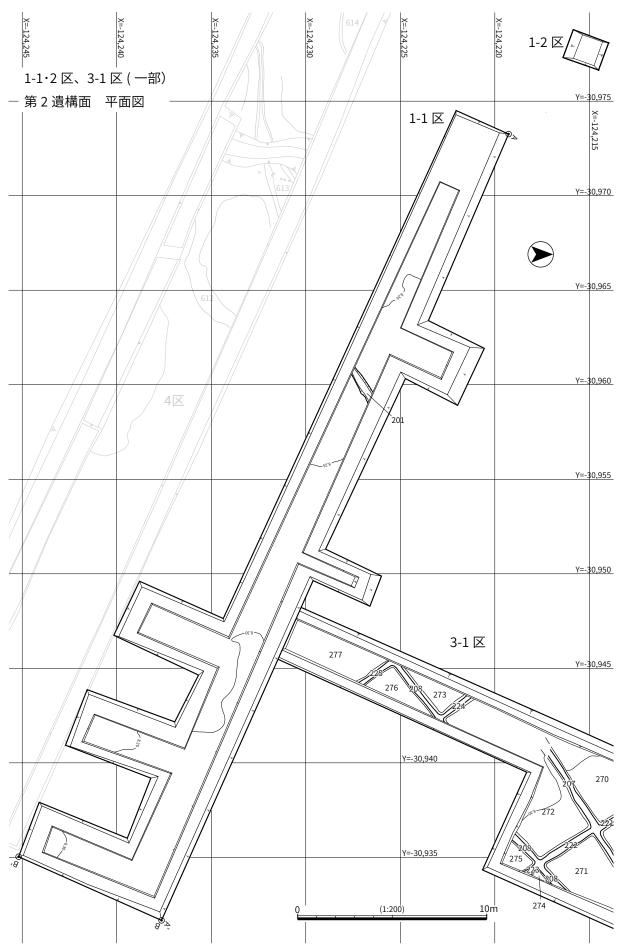


図 13. 1-1 区 第 2 遺構面 平面位置図

#### **2-1 区** (図 14·15、写真図版 8-1·2)

本調査区は、1 面調査である。地表面より約 $0.8 \sim 0.9 \,\mathrm{m}$ 下げたところで第1 遺構面である第11 層 (第4-1a 層)上面を確認した。精査を行ったところ、調査区の西側で3 条の溝を検出した。遺構掘削後に、各遺構の断面観察を行うため第17 層上面まで断割りを行った。東側に関しては、前回調査の範囲内であったため、遺構は残存していなかった。

#### 「第1遺構面」

#### 001 溝(図 14・15、写真図版 8-4)

2-1 区の南西隅で検出した。第 11 層から掘り込まれており、検出できたのは延長約 2.4m、幅約 1.2 m以上、深さ約 0.3m 以上で、溝の東端を検出したに留まり、幅も深さも不明であるが南南東方向の調査区外へと延びる。確認できた埋土は上層の 2 層で、上層の①層が粗砂質シルト、下層の②層が粗砂~極粗砂で、出土遺物はなかった。湧水が著しく、掘削深度も限界に達したことから完掘は出来ず、下層の形状は明確にできなかった。延長上の遺構との繋がりは不明である。

#### **002 溝**(図 14·15、写真図版 8-5)

2-1 区北西端で検出した。前回調査の 4 区 295 流路、今回調査の 1-1 区 001 溝と考えられる。第 11 層から掘り込まれており、検出できたのは延長約 15m、幅 2.4~5 m余り、深さ 0.5m 以上で、蛇行しながら南東方向へと延びる。溝幅は、トレンチ調査であるためと、蛇行しているため正確ではない。確認できた上層の埋土は 6 層で、上層の①・②層がシルト質粗砂~極粗砂、下層の③~⑥層が粘土質シルト~粗砂質シルトの泥質堆積物で、出土遺物はなかった。湧水が著しく、掘削深度も限界に達したことから完掘は出来ず、下層の形状は明らかにできなかった。断面形状は、現況で皿状である。なお、前回調査では、295 流路の両側に、西側に 293 畦畔、東側に 294 畦畔が確認されていたが、今回調査では上層の洪水砂と現代のコンクリート用水路等により攪乱され、確認できなかった。出土遺物はなかった。

002 溝は、北側で蛇行している。これは本来自然河道であったものを両側に畦畔を作ることによって 固定したものか、人工的な溝が洪水による破堤により蛇行したものかは、明確にできなかった。しか し、前回調査の 295 流路や、今回調査の 1-1 区 001 溝の逆台形の断面形状や当初の堆積物が粘土質シルト等の泥質堆積物と砂層のラミナ層であることは、今回調査とも共通する。このことから、後者で あった可能性が高いと考える。出土遺物はなかった。

#### **003 溝**(図 14·15、写真図版 8-3)

2-1 区南西部で、001 溝の北側で検出した。壁面が近現代の板側壁杭止め用水路や、その後改修された現代のコンクリート用水路により上部が攪乱されていた。検出できたのは最下層のみで、延長約 10m、幅  $1\sim1.2m$ 、深さ 0.2m 以上で、北北西方向から南南東方向に調査区外へと延びる。埋土は最下層の 1 層のみで、①シルト質粗砂~極粗砂の水成堆積物である。断面形状は逆台形である。延長上の遺構との繋がりは不明である。出土遺物はなかった。

#### **2-2 区**(図 14·15、写真図版 9-1·2)

本調査区は、2 面調査である。現地表面より約 1.5m 下げたところで、前回調査の第 11 層を確認し、遺構検出を行った。しかし、第 1 遺構面で遺構は確認できなかった。このため、さらに下層の第 2 遺構面第 17 層上面で検出を行い、溝(201 溝)と考えられる北側への落ち込みを確認した。

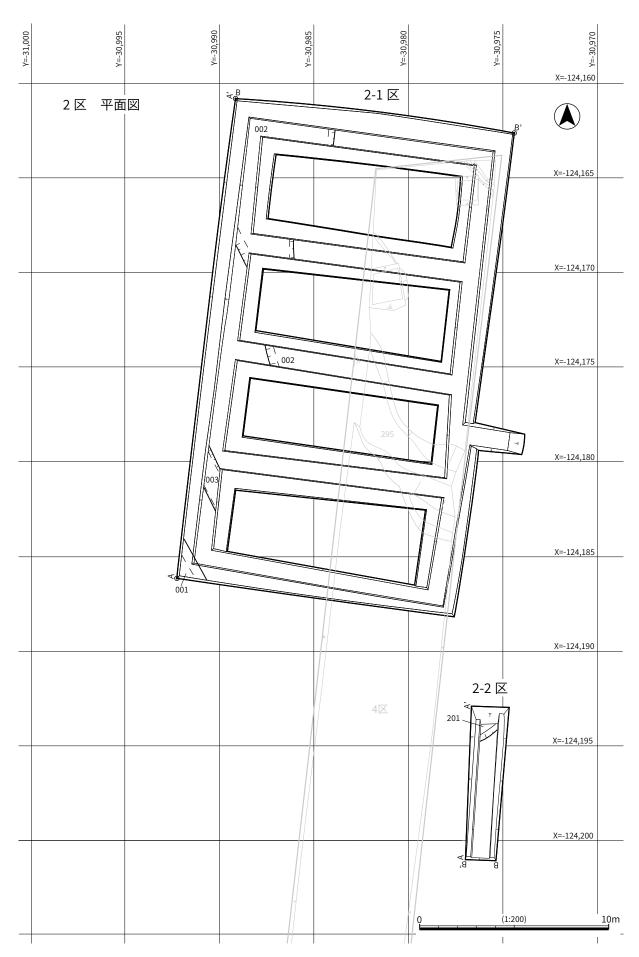
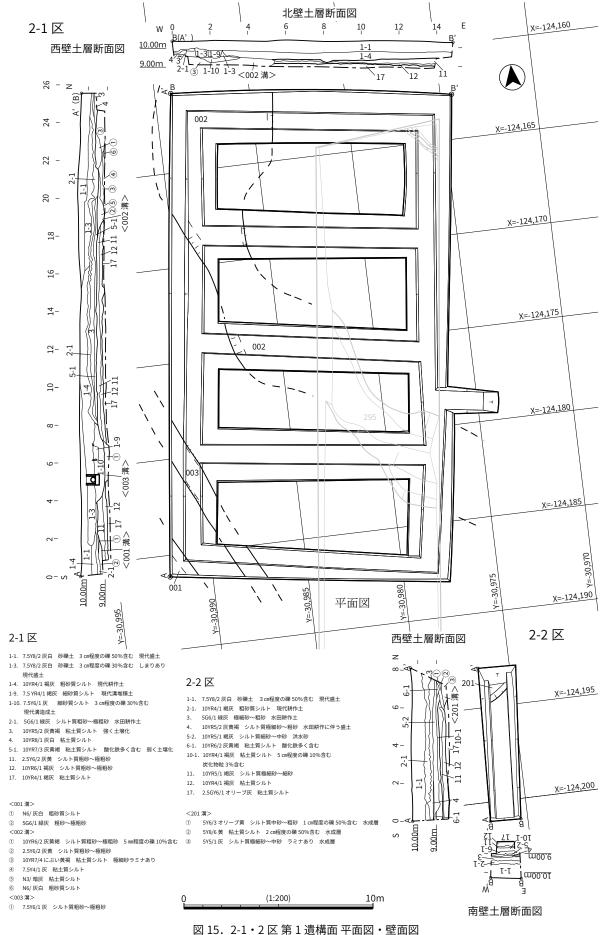


図 14. 2-1・2 区 第 1 遺構面 平面位置図



#### [第2遺構面]

#### 201溝(図14・15、写真図版9-3・4)

2-2 区北端で、001 溝の北側で検出した。検出できたのは延長約 1.2m、幅 1m 以上、深さ約 0.4m で、北東方向から南西方向の調査区外へと延びる。延長上の遺構との繋がりは不明である。溝幅全体を検出してはいないが、北端では溝底が上がっており、幅は 1.3 m余りではないかと思われる。埋土は 3 層で、① 1 cm程度の礫を 50% 含むシルト質中砂~粗砂、② 2 cm程度の礫を 50% 含む粘土質シルト、③シルト質極細砂~中砂で、全て水成堆積物である。断面形状は逆台形である。出土遺物はなかった。

#### 3-1·2区 (図 $16 \sim 25$ )

本調査区は、2 面調査である。3-1 区では第1遺構面にまで残った第0.5 遺構面の遺構と、3-2 区の第0.5 遺構面の遺構について記すため、3-1 区と3-2 区を合わせて記載する。前回調査の5 区の西側が3-1 区、東側が3-2 区である。第0.5 遺構面である第6層(第3-1b層)上面では、溝2条、耕作溝7条、畦畔1条、池1ヵ所を検出した。第1遺構面である第11層(第4-1a層)上面では、溝1条、洪水溝1条、水田遺構を検出した。第2遺構面である第17層(第5a層)上面では、水田遺構を検出した。

なお、3-2 区第 5 層から、摩滅した 17 の瓦器椀が出土した。時期は楠葉型IV -1 で、13 世紀後葉頃とみられる。

# [第 0.5 遺構面]

# **001 溝・012 大畦** (図 16 ~ 18・20・22、写真図版 10-1 ~ 4)

001 溝は、 $3-1\cdot 2$  区の中央を横切る、東西方向の溝である。検出できたのは、前回調査の 5 区も含めた延長約 19.6 m、上幅  $0.2 \sim 2$  m、深さ  $3 \sim 14$  cm、西側方向へと延びる。断面形状は、北側がなだらかな皿状である。堆積は 1 層で、3-1 区では①シルト質極細砂〜細砂、3-2 区では①シルト質細砂〜中砂で、湿地性堆積物である。この溝の北側に伴って、幅  $1 \sim 1.2$  m、高さ  $12 \sim 15$  cmの 012 大畦がある。この大畦は、図 3 下図の様に同じ位置に作り直され、現代まで残っていた。この 012 大畦は、北側作土層の段差(=段)上に作られたもので、14 cm余り下の段差下には 001 溝を作る。

#### 002 土坑 (図 16・17、写真図版 10-3)

 $3-1 \boxtimes 001$  溝の南側、南東壁に切られる土坑と考えられる。検出できたのは、延長約 0.48 m、幅  $0.64 \sim 0.67 \text{ m}$ 、深さ 8 cmである。断面形状は、浅い皿状である。堆積は 1 層で、001 溝と同じ①シルト質極細砂~細砂である。耕作溝である可能性もあるが、耕作溝より深いこと、幅が広いことから他の性格をもつ遺構と考えられる。

# 003~009 耕作溝(図 16・18・20・22、写真図版 19-2)

3-2 区北側の 011 池の上から、南側の 010 溝までの範囲に確認できる、耕作に係る溝群である。この耕作溝は、素掘り溝・畝溝・畝状窪み等と呼ばれるもので、その性格はまだ確定されていないといえる。今回調査における検出範囲は、全ての耕作面下に残されているのではなく、ここでもかなり限定的である。基本は南北溝で、溝の密集するところが、前回調査では 001 溝・012 大畦の北側に空白地を挟んで南北溝が 2 群、南側にも南北溝が 1 群検出された。3-2 区では 001 溝・012 大畦の北側で南北方向の 003・004 耕作溝が、南側で南北方向の 005・008・009 耕作溝と東西方向で南北方向の溝を繋ぐ 006・007 耕作溝を検出した。検出できたのは、延長については 001 溝・012 大畦の北側も南側も約 10 mで、幅  $0.1 \sim 0.4$  m、深さは浅いものが多いが、深いもので 10 cm余りである。断面形状は、浅い皿

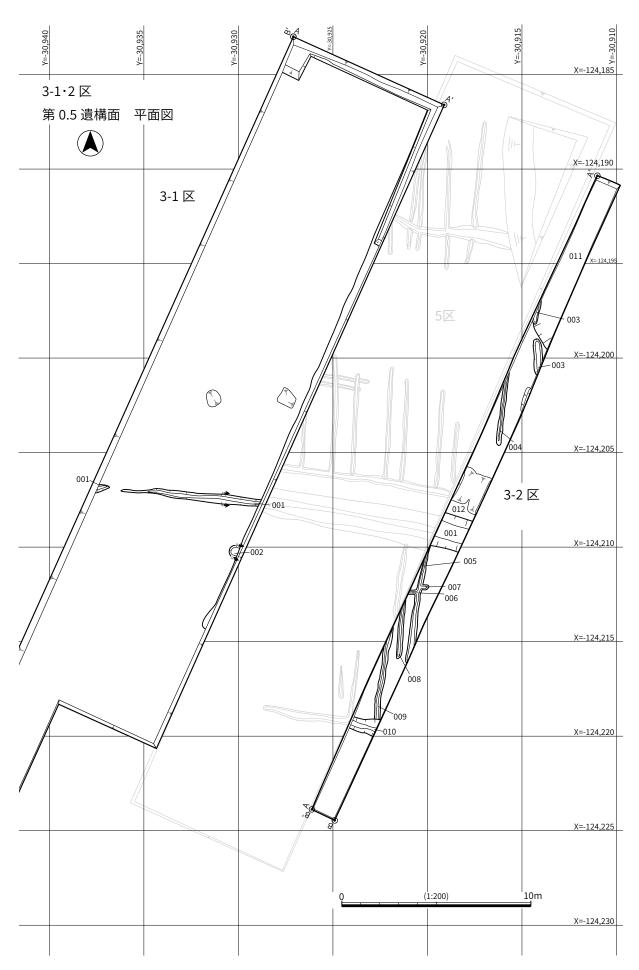


図 16.3-1・2 区 第 0.5 遺構面 平面位置図

状である。堆積は1層で、001溝と同じ①シルト質細砂 $\sim$  3-1区 第 0.5 遺構面 遺構図・断面図 中砂である。012 大畦北側の耕作溝は、図 16 の前回調査で は012大畦の北側に東西方向の溝が検出されていて、今回 調査では攪乱で検出できなかったが、この溝が排水を効か せている。001 溝南側の耕作溝は、図 22 の溝底レベルが示 すように、北側の001溝に排水を行っている。この様に、 ここでは耕作溝が排水を主たる目的とした溝であることが 考えられた。

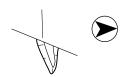
なお、005 耕作溝から、図 18 の 16 鉄滓が出土している。 **010** 溝(図 16·18·20·22)

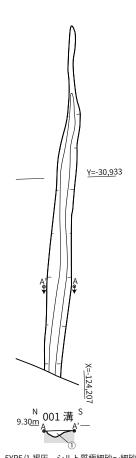
3-2 区南側の 005・008・009 耕作溝を切るように設けら れた、東西方向の溝である。いずれも耕作溝を切る。検出 できたのは、延長約 $1.3 \,\mathrm{m}$ 、幅 $0.3 \sim 0.5 \,\mathrm{m}$ 、深さ $11 \,\mathrm{cm}$ で ある。断面形状は、浅い皿状である。堆積は1層で、001 溝・耕作溝と同じ①シルト質細砂~中砂である。前回調査 では北側にも同様の同規模の東西方向の溝が1条みられた。 これらは010溝と同時期の遺構と考えられ、その性格は耕 作溝と同じ排水を意図した遺構と考えられる。

#### **011** 池 (図 16・18・20・22)

3-2 区北端から前回調査の5区北東端にかけて検出され たもので、溢流堆積物が見られないので河道ではなく池跡 と考える。これが溜池であったのか、湧水池であったのか は不明である。全体の形状や大きさも不明であるが、南北 12 m以上、東西 6m 以上、深さ 1.3 m以上の池である。埋 土は5層で、①シルト質細砂~中砂、②シルト質細砂~シ ルトのブロック、③シルト質細砂~中砂、④シルトと細砂 ~中砂のブロック、⑤細砂質シルトである。当初の池は、 第11層(第4-1a層)水田遺構を切っていて、⑤層の湿地 性堆積物が斜面に堆積する。その後、周辺で堆積する第10 層や第7層といった洪水砂の堆積がみられず、いきなり第 6層(第3-1b層)が厚く被ることから、第7層直後の堆 積から第6層堆積直前までの間にできた中世の遺構と考え られる。第6層の堆積によってかなりの部分が埋まったと 考えられるが、011池を掘り込んで使用している。その後、 ④層にて溝肩部より一部埋戻しが図られているが、完全に 埋められることはなく、その後、第5層(第3-1a層)水 田層が埋戻土である④層の上にまで形成されている。第5 層水田時には、001溝・002土坑・003~009耕作溝やそ

001 溝 遺構図・断面図





① 5YR5/1 褐灰 シルト質極細砂〜細砂 (1:80)

002 土坑 遺構図·断面図

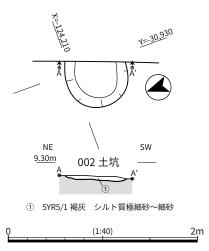


図 17. 3-1 区第 0.5 遺構面 平面図・断面図

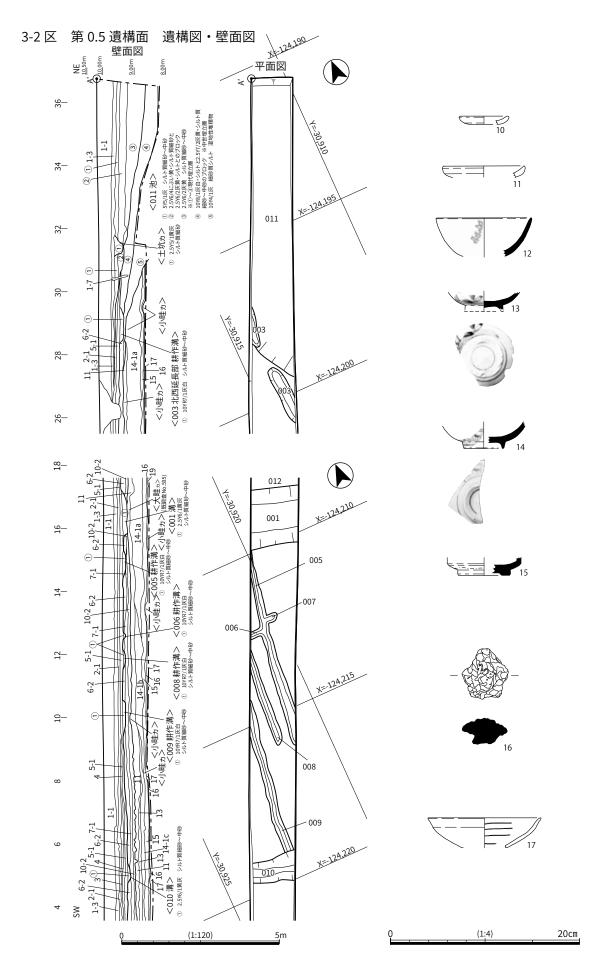


図 18. 3-2 区第 0.5 遺構面平面図・壁面図、包含層・遺構出土遺物

の後の 010 溝が機能していたと考えられ、011 池③層は堆積物も同じで、この頃の堆積と考えられる。011 池はその後も存続し、第 2 層現代作土水田の時には②層で埋立を行い、最終上部に①層を入れて整地し、水田化したものと考えられる。埋立の時期は、下記に記す①・②層整地土・埋立土出土の遺物に、18 世紀後葉頃の遺物が入ることから、この時期以降と考えられる。

出土遺物は、011 池の埋戻し最終段階の①・②層より、図 18 の 6 点の遺物が出土した。10・11 は土師器皿である。時期は 10 が N 系列、11 が Sb 系列、何れも 13B 期、江戸時代中期末・後期初頭の 18 世紀後葉の遺物と考えられる。12 は肥前系磁器・波佐見の花文染付丸碗で、腰張形厚手の「くらわんか手」、呉須は鈍く濁った色をした団鶴文のコンニャク印判で、波佐見 V-1 期の 18 世紀前半頃の遺物と考えられる。13 と 14 も肥前系磁器・波佐見で、厚手の花文染付丸碗と草花文染付丸碗の破片で、波佐見 V-1 期か V-2 期の 18 世紀前葉~中葉の遺物と思われる。15 は京焼系陶器の筒型椀である。小型化が進んだ煎じ茶用の椀で、13B 期の 18 世紀後葉頃の遺物と考えられる。

#### 「第1遺構面]

# 101 溝・101 西溝(図 19 ~ 21・23、写真図版 11-1、12-1・2、13-1・2)

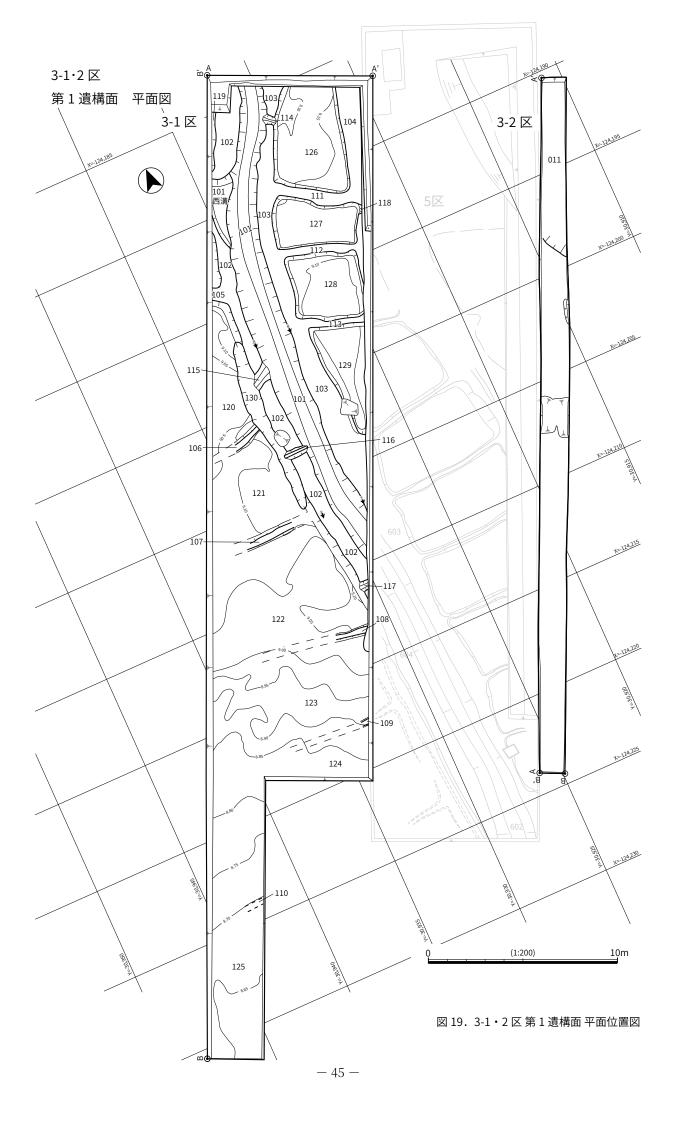
101 西溝は、北東壁から南へ約 6m のところに、101 溝の水を西側に流す溝(以下、「101 西溝」という。)が、北西壁際にみつかっている。規模は、延長も流れている方向も不明ではあるが、南北幅約 1.5m、深さ 18 cm余りである。溝底は、101 溝本流よりも  $2\sim6$  cm余り浅い。

第1遺構面では、103 大畦の東側に 4 面、102 大畦の西側に 8 面余りの水田を検出した。溝内において、シガラミ等は検出しなかった。101 溝は、その断面規模からも、主要な給排水路であったと考えられる。

出土遺物は、101 溝内③層より図 23 の 4 点の弥生時代後期の土器が出土している。図 23 の 06 は有 稜高杯の外傾する杯部で、時期は弥生時代後期後半中段階である。07 は平行条叩きの弥生形甕の胴肩 部で、時期は弥生時代後期後半古段階~中段階頃と思われる。08 は壷の底部で、時期は弥生時代後期 後半頃と思われる。09 は小型の平行条叩きの弥生形甕の頸部から胴肩部で、時期は弥生時代後期後半 古段階~中段階頃と思われる。

#### **102・103 大畦**(図 19 ~ 21・23、写真図版 13-1・2)

3-1 区の北側で検出した。101 溝の両側に大畦があり、西側を102 大畦、東側を103 大畦とする。前回調査の5 区の西側604 畦畔、東側603 畦畔と同一遺構である。102・103 大畦は、第11 層を削り出して作ったものではなく、残存してはいないが当初の盛土畦が洪水により壊され、堆積した水成堆積層を成形して作ったもので、これが少なくても2回繰り返された後に、さらに上部に盛土を行った畦畔



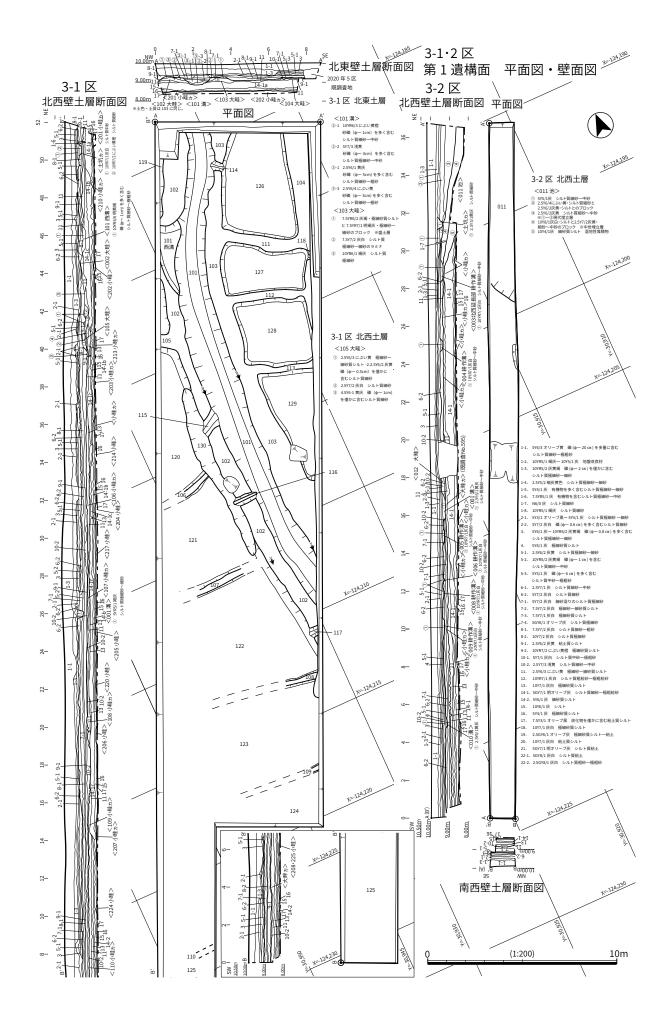


図20.3-1・2区第1遺構面平面図・壁面図

を検出したことになる。検出できた規模は、102 大畦の延長は約 28 m、前回調査の 5 区も含めた延長は約 42 mで、上幅  $0.6 \sim 1.3$  m、水田面からの高さ  $8 \sim 16$  cm余りで、103 大畦の延長は約 21 m、前回調査の 5 区も含めた延長は約 41 mで、上幅  $0.4 \sim 1.6$  m、水田面からの高さ  $10 \sim 17$  cm余りである。 畦畔盛土層は、先述したように 3 層で、残存する最下層が3シルト質極細砂、水成層が2シルト質極細砂〜細砂のラミナ、最上部盛土層が1 極細砂質シルトと極細砂〜細砂のブロックである。102 大畦上には 1 ヵ所に水口が、103 大畦上には 1 ヵ所の水口が検出された。

#### **104 大畦** (図 19 ~ 21 · 23)

3-1 区の北東隅で検出した。104 大畦は、126 水田の南東壁際にある、南北方向の低い大畦で、大部分が前回調査区内にある。前回調査の5 区の595 畦畔と同一遺構である。104 大畦は、第11 層を削り出して作ったものである。検出できた規模は、延長は約5 m、前回調査の5 区も含めた延長は約18 mで、上幅0.7m以上、前回調査の5 区も含めた上幅 $2\sim2.8$ m、水田面からの高さ $5\sim11$  cm余りである。前回調査時には、595 畦畔直下に堆積する粗粒砂~極粗粒砂・・・、高まりを加工して畦畔として利用したと考えられる。」ものがあり、 $102\cdot103$  大畦と同様な自然堆積を利用した畦畔の復元が、前回調査でもあったものと考えられる。こうして幅広の104 大畦と103 大畦との間には、一列の南北方向の $126\sim129$  水田が作られたようである。

#### **105 大畦**(図 19 ~ 21 · 23)

3-1 区の北西側で検出した。105 大畦は北西壁際にある、東西方向の大畦で、大部分が調査区外にある。検出できた規模は、延長は約0.8 m、上幅0.9 mである。

3 区周辺は、南西傾斜が大きい所で、水を張ることが困難な傾斜地である。これを解消するため大畦や小畦で段差(=段)を設け、滞水を図っている。分かりやすいのが、図 22 の 3-2 区北西壁面である。3-2 区では、第 2 遺構面である第 17 層上面においても、8 m地点、20 m地点に段差があり、第 14 層洪水層堆積後の第 1 遺構面である第 11 層上面においても、10 m地点、16m 地点、20 m地点で段差があり、さらに第  $6\cdot7\cdot10$  層洪水層堆積後の第 0.5 遺構面である第 5 層上面においても、8m 地点、20 m地点で段差がある。この急傾斜面に水田を作るために、棚田風に水田を造成している。

この 3-1 区 105 大畦は、第 1 遺構面の 44 m地点の約 30 cmもの段差上に設けられた畦畔である。105 大畦と 101 西溝の間の水田は、ほぼ全てが調査区外にあるため水田番号は付していないが、水田が存在していたことは疑えない。この水田の南にあったのが 105 大畦で、東側の 102 大畦に接続する。

#### **130** 洪水溝(図 19 ~ 21 ⋅ 23)

3-1 区の西側で検出した。130 洪水溝は、105 大畦から 102 大畦に当たり、畦畔や水田面等の水田遺構を壊す洪水溝である。この洪水堆積層は第 10 層で、厚さ  $10\sim20$  cmの堆積を残す。特に 102 大畦に激突し大畦沿いに流れ、明確な溝状を呈するのが 130 洪水溝である。さらに、図 19 の等高線の乱れからも明らかなように、南西方向にも分岐して溝を作り、18m 地点では水田面を深さ 20 cm余りも抉り、1-1 区に流れる。

#### **106~110 小畦**(図 19~21・23)

102 大畦の西側で検出した。洪水堆積層第 10 層の洗刻を辛うじて逃れた、102 大畦から枝分れした、5 本の東西方向の小畦を検出した。北から南に  $106\sim110$  小畦とする。検出できた平均的な規模は、上幅  $0.2\sim0.4$  m、下幅  $0.3\sim0.6$  m、高さ  $2\sim8$  cmである。畦間隔は、102 大畦側の上幅で、105 大畦と 106 小畦間が約 7 m、106 小畦と 107 小畦間が約 5 m、107 小畦と 108 小畦間が約 6.2 m、108 小畦と

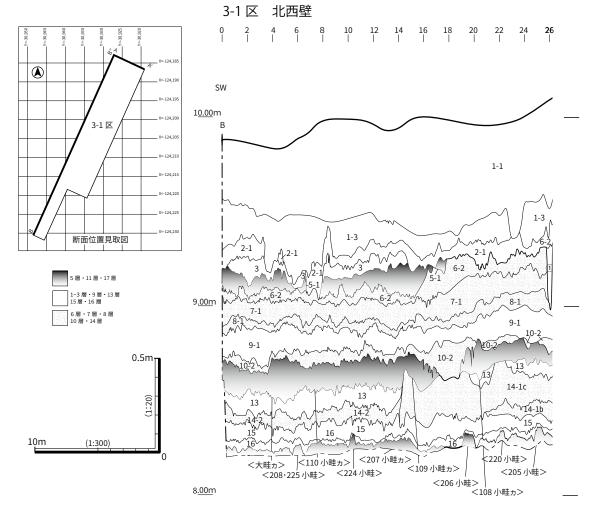


図 21-1. 3-1 区 北西壁・北東壁縦横変倍図

109 小畦間が約 4.6m、109 小畦と 110 小畦間が約 5.4m である。図 21 の北西壁面図からも明らかなように、小畦でも段差を設け、滞水を図っているのが確認できた。

#### **111~113 小畦**(図 19~21・23)

103 大畦の東側で検出した。この 103 大溝の東側でも、洪水堆積層第 10 層の堆積を受けているが、洗刻は生じていないようである。103 大畦から枝分れした、3 本の東西方向の小畦を検出した。北から南に  $111 \sim 113$  小畦とする。検出できた平均的な規模は、上幅  $0.3 \sim 0.8$  m、下幅  $0.6 \sim 1.1$  m、高さ $2 \sim 12$  cmである。畦間隔は、103 大畦側の上幅で、111 小畦と 112 小畦間が約 2.8m、112 小畦と 113 小畦間が約 3.4m、129 水田は約 6.2m である。これに続く南側を前回調査の 6 面の水田でみると、約 3.2 m、約 3.3m、約 3.4m、約 3.6m、約 3.6m、約 3.0m であった。ここでも、小畦による段差が確認でき、傾斜に合った設置が確認できた。

#### $114 \sim 118$ 水口 (図 19 $\sim$ 21 · 23、写真図版 13-3 $\sim$ 6)

 $102 \cdot 103$  大畦の上に 4 か所、104 大畦の上に 1 ヵ所を検出した。検出できた平均的な規模は、長さ  $0.8 \sim 1.4$  m、上幅  $0.4 \sim 0.6$  m、下幅  $0.1 \sim 0.17$  m、深さ  $6 \sim 21$  cmである。102 大畦上には 3 ヵ所 の水口が確認されており、北側から 120 水田の 115 水口、121 水田の 116 水口、122 水田の 117 水口と、各隣接する水田 1 枚に 1 ヵ所の水口が設けられていた。これに対し 103 大畦上では 1 ヵ所の水口のみしか検出されておらず、126 水田の 114 水口のみであった。126 水田南側の低い側に繋がる 127 水田では、104 大畦のある東側に 118 水口がある。さらに南側の 128 水田や 129 水田でも、103 大畦に水口は確認

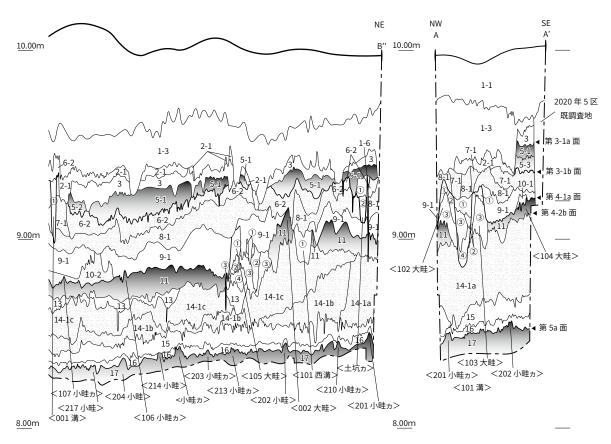


図 21-2. 3-1 区 北西壁・北東壁縦横変倍図

できなかった。114 水口から取水して、 $111 \sim 113$  小畦に水口を切って用水を流していたのか、118 水口の存在意義を考え、104 大畦側に排水施設(溝)があったものかは不明である。水口は、取水排水口である場合と、取水専用や排水専用である場合がある。 $102 \cdot 103$  大畦に設けられた水口は、水田面の傾斜や水口底の高さ等から、取水専用であると考えられるが、118 水口については不明である。

# 119~129 水田 (図 19~21·23、写真図版、写真図版 14-1~4)

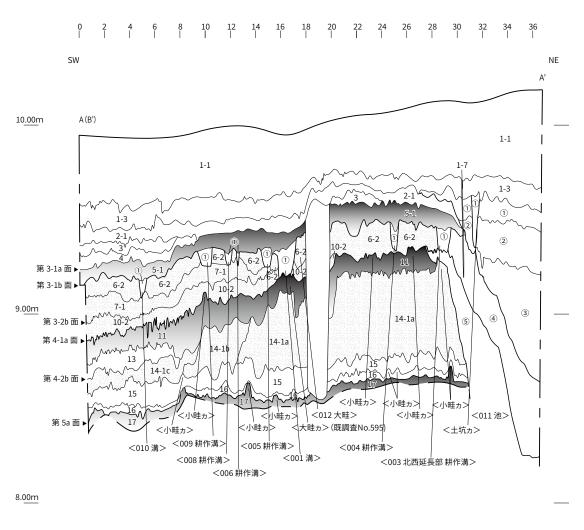
3-1 区では、水田区画(=水田)を痕跡程度のものも含め、11 面検出した。水田は畦畔による区画があって、初めて視覚的に確認できるものであり、洪水層による洗刻がある 102 大畦西側から 1-1 区にかけては、確認できなかった水田も数多い。この内、上幅面積がほぼ判明した水田は、103 大畦東側の  $127 \sim 129$  水田と、前回調査の 2 面である。127 水田は約 10 ㎡、128 水田は約 13 ㎡、129 水田が約 27.2 ㎡、前回調査の 129 水田の南側水田が約 22.4 ㎡、そのさらに南側水田が約 22.6 ㎡であった。水田面の傾斜は、洪水による影響もあるが、126 水田と 127 水田では西側が低い。各水田面には、洪水砂第 10 層が入り込んだ、足跡らしきものや洪水砂の流れがラミナ状に残されていた。今回調査で最も足跡らしきものが残されていたのは、126 水田面である。個別の説明は行わないが、図 23 に示しておく。足跡が残された頃には、水田面は柔らかく、水田の埋没時期を示唆するかもしれない。

#### 「第2遺構面]

**201~208 小畦**(図 21・24・25、写真図版 15-1、16-1・2、17-1~8、18-1~4)

3-1 区の北東側から南西側において、第 17 層(第 5a 層)を作土とする水田区画を検出した。前回調

# 3-2区 北西壁



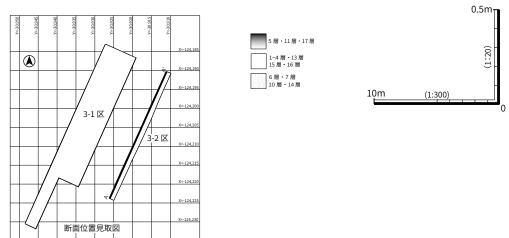


図 22. 3-2 区 北西壁縦横変倍図

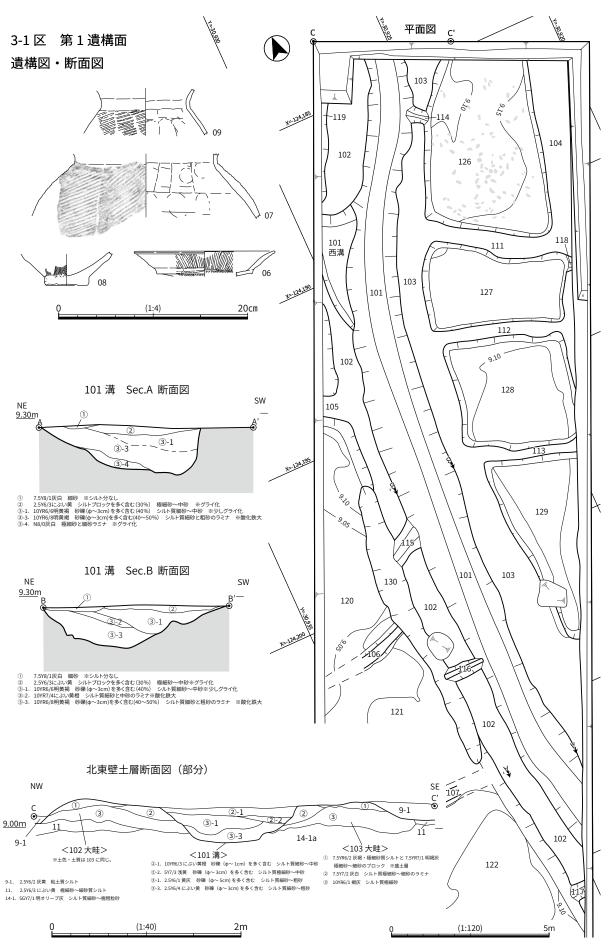


図 23. 3-1 区 第 1 遺構面 101 溝、水田遺構、包含層出土遺物

査の 5 区水田跡と同一遺構である。検出できた平均的な小畦の規模は、上幅  $0.2 \sim 0.4$  m、下幅  $0.4 \sim 0.6$  m、高さ  $2 \sim 6$  cmである。3-1 区の近くに大きな給排水溝は確認できておらず、前回調査の南北方向の 4 区 6 11 溝「灌漑用の基幹水路」と考えられるものは、西に 50 m余り離れている。他の西南西方向の 1-1 区第 2 遺構面の 201 溝・前回調査の 4 区 6 13 溝は、溝の規模が小規模であり、排水路と考えられた。しかし、3-1 区では水田区画のみしか検出されていない。それは、図 21 の第 17 層の変化や、図  $24 \cdot 25$  の等高線からも理解されるように、南西傾斜のなだらかな斜面が続くためで、給排水溝を特に設けなくても給排水ができるからではないかと考えられる。

本調査区内における水田区画の特徴は、阿弥陀籤状に畦畔が作られていることである。 $202 \sim 208$  小畦は、北東から南西にかけて作られた縦方向の小畦(縦畦)で、等高線に対し直角に直線的に配されていて、小畦が折れ曲がる箇所はほぼなく、阿弥陀籤の縦線に当たる。畦間隔は、上幅で202 小畦と203 小畦間が約3m、203 小畦と204 小畦間も約3m、204 小畦と205 小畦間が $3 \sim 3.3m$ 、205 小畦と206 小畦間が $2.8 \sim 3m$ 、206 小畦と207 小畦間が $2.9 \sim 3.1m$ 、207 小畦と208 小畦間が $3.1 \sim 3.3m$ 、208 小畦(前回調査286 畦畔)と前回調査287 畦畔間が $3.5 \sim 3.8m$ である。ほぼ、縦畦の間隔は $3 \sim 3.8m$ で、幅広の区画はない。

### **210~222・224・225 小**畦(図 21・24・25、写真図版 15-1、16-1・2、17-1~8、18-1~4)

縦畦である  $202 \sim 208$  小畦等に対し、等高線に水平な小畦(横畦)である。傾斜地の小さな微地形に合わせた滞水可能な位置に配されているため、その長さはまちまちで、横畦どうしの交点は少なく階段状で、阿弥陀籤の横線に当たる。畦間隔は、215 小畦と 217 小畦間が約 4.4m、216 小畦と 218 小畦間が  $3.8 \sim 4$ m、218 小畦と 220 小畦間が約 5.7m、219 小畦の北側が約 2.6m、219 小畦と 221 小畦間が  $7.4 \sim 7.6$ m、222 小畦の北側が約 9.1m、222 小畦と 224 小畦間が  $9 \sim 9.2$ m である。横畦の間隔は、 $2.6 \sim 9.2$  mとかなりの幅がある。水口は、今回調査では確認できなかったが、前回調査では縦畦 1 ヵ所、横畦 1 ヵ所で水口を切ったものが確認されている。水口は縦畦よりも横畦中心に作業されることが予想されるが、今回の状況は第 17 層(第 5a 層)の埋没時期とも関わる問題であり、今後検討を要する。

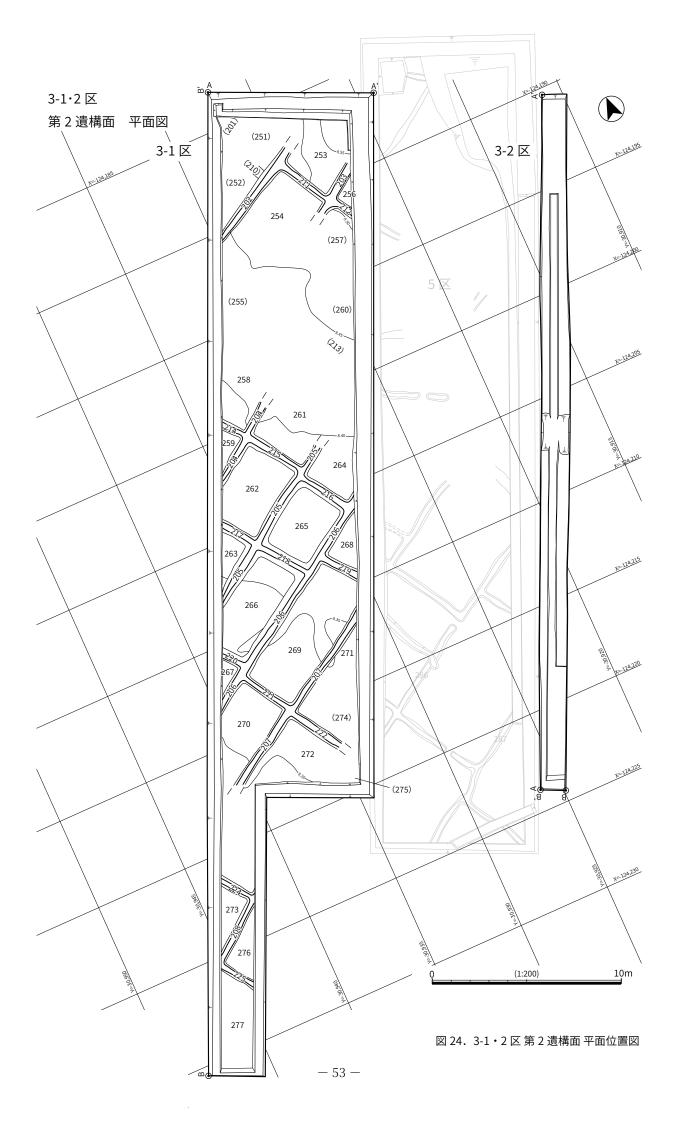
# **251~277 水田**(図 21・24・25、写真図版 15-1、16-1・2、17-1~ 8、18-1~ 4)

今回調査では、畦畔の残りはそれほど良くなかった。しかし、3-1 区では水田区画(=水田)を 15 面以上検出した。第 15・16 層(第 4-2b 層)の堆積状況により、遺構が確認できなかった水田も数多い。この内、上幅面積がほぼ判明した水田は、262 水田は約 13.3 ㎡、265 水田は約 11.3 ㎡、266 水田が約 15.9 ㎡、268 水田は約 9 ㎡、269 水田は約 22.5 ㎡、271 水田西側の 270 水田は約 24.8 ㎡、271 水田は約 13.2 ㎡、前回調査の水田が約 37.7 ㎡であった。水田の面積も横畦の間隔に影響され、9  $\sim$  37.7 ㎡と幅がある。

なお、図 22 の 3-2 区北西壁からは、第 17 層上面に 1m 地点、8m 地点、20 m地点で、大きな落差のあることを示している。3-1 区とは異なる畦畔配置が予想される。

#### 4-1区(図 26~28、写真図版 4-1~3)

4-1 区は、2 面調査である。現地表面より約 1.05m 下げたところで第 11 層 (第 4-1a 層)を確認し、精査を行った。この結果、北側で自然流路と思われる洪水溝を 2 条、南側で溝 1 条を検出し、第 1 遺構面として調査を行った。さらに、下層の第 17 層上面を第 2 遺構面とし精査を行ったが、遺構は確認できなかった。なお、第 1 遺構面包含層より、土師器が 1 点出土したが、細片のため図示できなかった。



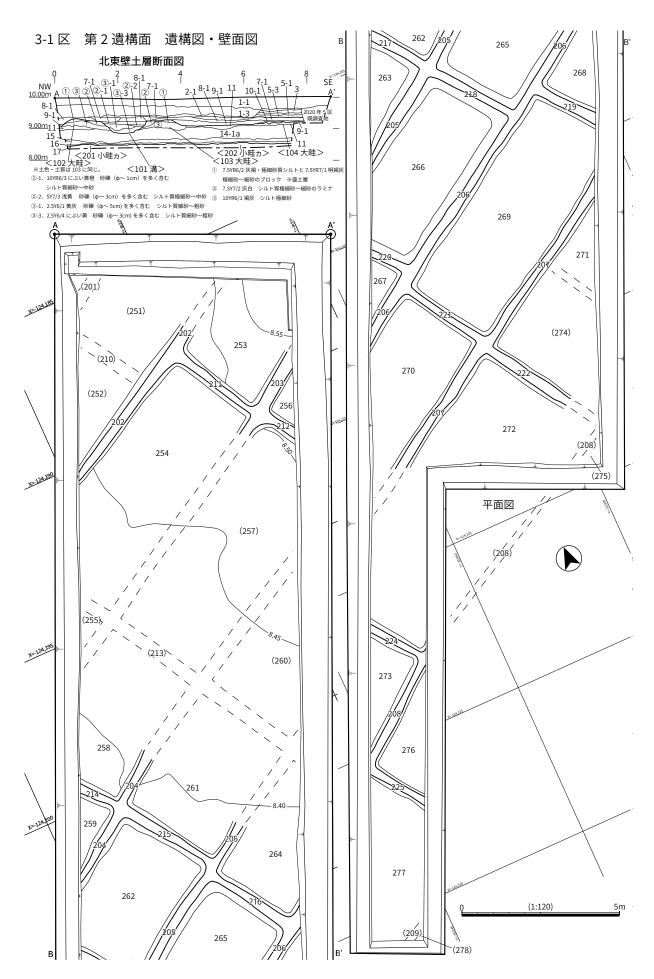


図 25. 3-1 区 第 2 遺構面 水田遺構

#### [第1遺構面]

#### **001 洪水溝**(図 26・28)

4-1 区北側で検出した。東側 4-3 区の 001 洪水溝と、同一の溝と考えられる。第 11 層から掘り込まれており、検出できたのは延長約 1.2m、幅 3 m以上、深さ 0.5m 以上で、蛇行しながら南東方向へと延び 4-3 区 001 洪水溝に繋がるものと思われる。溝幅は、北側の立ち上がりがトレンチ調査で調査区外へ延びるため、全幅を確認できていない。埋土は 2 層で、①シルト質極細砂〜細砂、②粘土質シルトで泥質堆積物である。断面形状は皿状である。出土遺物はなかった。

#### **002 洪水溝**(図 26·28、写真図版 20-2)

4-1 区北側で検出した。検出できたのは、延長約2 m、幅約5 m、深さ約0.5 mで、南西方向の調査区外へと延びる。埋土は5 層で、①1 cm程度の礫を10%含む粘土質シルト、②シルト質極細砂〜細砂、③2 cm程度の礫を30%含む粗砂、④粘土質シルト、⑤2 cm程度の礫を20%含む粗砂で、水成堆積物と泥質堆積物の互層である。断面形状は浅い皿状である。出土遺物はなかった。

#### **003 溝**(図 26・28)

4-1 区南側で検出した。前回調査の 4 区 560 流路、今回調査の 1-1 区 016 溝と同一遺構と考えられる。第 11 層から掘り込まれている。検出できたのは、延長約 1.8m、幅  $1.8 \sim 2$  m、深さ約 0.3 mで、北西方向から南南東方向に調査区外へと延びる。上層は洪水砂に覆われ、本来はもう少し高い位置にあったものと思われる。埋土は 1 層で、①粘土質シルトの泥質堆積物である。断面形状はシャーレ状である。出土遺物はなかった。

#### 4-2 区 (図 26 ~ 28、写真図版 20-4 ~ 8)

4-2 区は、2 面調査である。地表面より約 1m 下げたところで、第 11 層上面を確認した。精査を行ったところ、北側で自然流路と思われる洪水溝を 1 条、南側で溝 1 条を検出し、第 1 遺構面として調査を行った。さらに、下層の第 17 層上面を第 2 遺構面とし精査を行ったが、遺構は確認できなかった。

なお、第2層現代作土から、図28の18 堺の擂鉢の高台を欠いた底部片が出土した。時期は、13A・ B期(江戸VIb期)で、江戸時代中期の18世紀後半の遺物である。

# [第1遺構面]

### **002 洪水溝**(図 26・28)

4-2 区北側で検出し、北側の 1/3 を占める。西隣 4-1 区の 002 洪水溝、東隣 4-3 区の 002 洪水溝と、同一の溝と考えられる。第 11 層から掘り込まれている。検出できたのは、延長 10 m余り、幅 12 m以上、深さ 0.5m 以上で、蛇行しながら南南東方向へと延び、4-3 区 002 洪水溝に繋がるものと思われる。溝幅は、トレンチ調査であるため正確ではない。確認できた埋土は 4 層で、上層の①・②層が粘土質シルト、③ 2 cm程度の礫を 30%含むシルト質粗砂、④粘土質シルトの水成堆積物と泥質堆積物の互層である。湧水が激しく、掘削深度も限界に達したことから完掘は出来ず、下層の形状は明らかにできなかった。断面形状は、現況で浅い皿状である。出土遺物はなかった。

#### 003 溝(図 26・28、写真図版 20-5・6)

4-2 区南端で検出した。前回調査の 4 区 560 流路、今回調査の 1-1 区 016 溝と同一遺構と考えられる。第 11 層から掘り込まれている。検出できたのは、延長約 5m、幅  $0.8 \sim 1$  m、深さ約  $0.3 \sim 0.4$  mで、北西方向から南南東方向に調査区外へと延びる。埋土は 5 層で、①粘土質シルト、②シルト質極

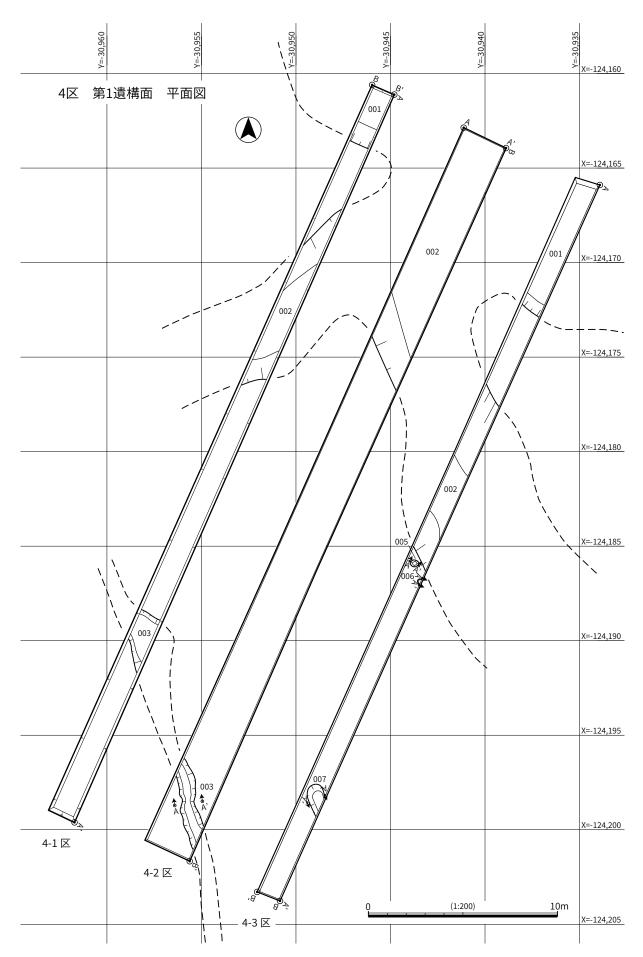


図 26. 4-1  $\sim$  3 区 第 1 遺構面 平面位置図

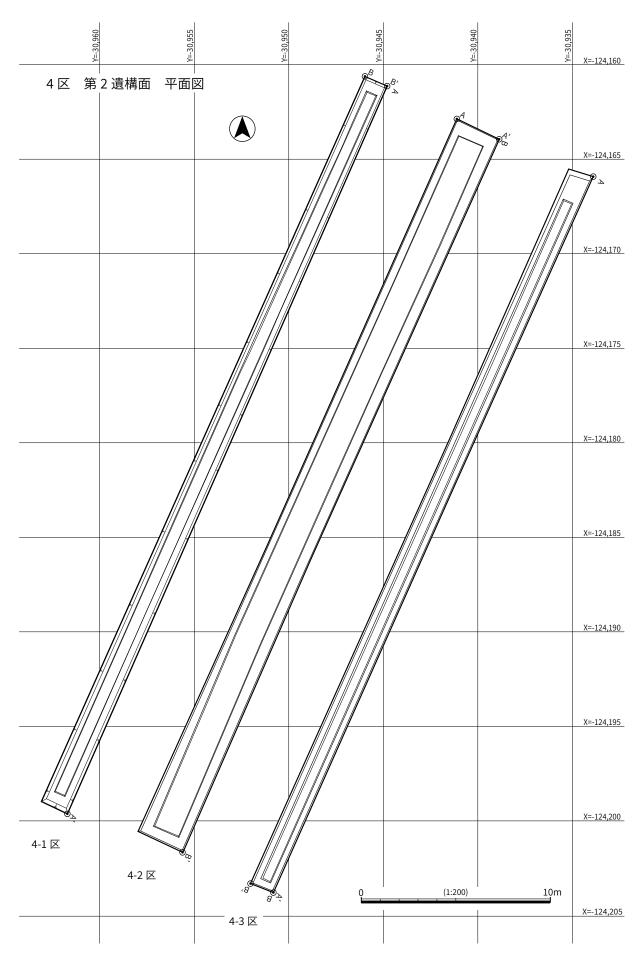


図 27. 4-1~3区第2遺構面平面位置図

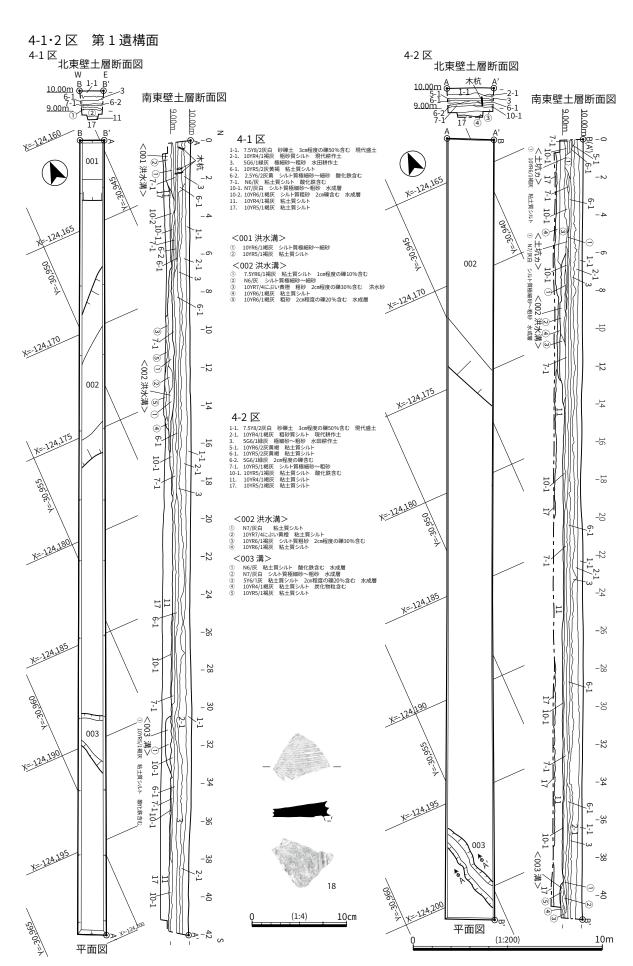


図28.4-1・2区第1遺構面平面図・壁面図、包含層出土遺物

細砂〜粗砂、③2cm程度の礫を20%含む粘土質シルト、④・⑤層は粘土質シルトで、最下層は泥質堆積物である。断面形状はシャーレ状である。出土遺物はなかった。

#### 4-3 区 (図 26・27・29、写真図版 21-1・4・5)

4-3 区は、2 面調査である。現地表面より約  $1 \sim 1.2$  m下げたところで、第 11 層上面を検出した。精査を行ったところ、北端と中央部北側よりで自然流路の洪水溝 2 条、中央部にてピット状の土坑 2 基、南端にて土坑 1 基を検出し、第 1 遺構面として調査を行った。さらに、下層の第 17 層上面の第 2 遺構面で精査を行ったが、遺構は確認できなかった。

#### [第1遺構面]

#### **001 洪水溝**(図 26・29)

4-3 区北端で検出した。隣接する 4-1 区 001 洪水溝と同一遺構と考えられる。検出できたのは、延長約 1.1m、幅約 7.4m、深さ約 0.4m で、北西方向から南東方向の調査区外へと延びる。埋土は 1 層で、①粘土質シルトの泥質堆積物であった。断面形状は皿状である。出土遺物はなかった。

#### **002 洪水溝**(図 26・29)

4-3 区中央部で検出した。西隣の 4-2 区 002 洪水溝、4-1 区 002 洪水溝と同一の溝と考えられる。第 11 層から掘り込まれている。検出できたのは、延長 2 m余り、幅 6 m以上、深さ 0.4 m 以上で、蛇行しながら南東方向へと延びる。溝底については、湧水が激しく、掘削深度も限界に達したことから完掘は出来ず、下層の形状は明らかにできなかった。埋土は 4 層で、上層の①・②が粘土質シルト、③ 2 cm程度の礫を 30%含むシルト質粗砂、④粘土質シルトの水成堆積物と泥質堆積物の互層である。断面形状は、現況で浅い皿状である。出土遺物はなかった。

堆積物は、4-1 区 002 洪水溝も、4-2 区 002 洪水溝もよく似ており、同一の溝と判断される。さらに、 $4-1 \sim 3$  区で検出された、001 洪水溝と 002 洪水溝との遺構の切りあいを平面的にも断面的にも確認できていないが、4-2 区 002 洪水溝の北東方向からの堆積物の広がりから、001 洪水溝が古く、002 洪水溝が新しいものと想定しておく。001 洪水溝が北西方向から南東方向に流れ堆積した後に、北東方向から来た洪水堆積物が 4-2 区北側付近で、南西方向と南南東方向に分岐して流れたものと思われる。この002 洪水溝は、南側では 3-1 区の 101 溝の西側大畦に当たり、水田西側の畦畔を悉く壊し、大畦西側沿いに 130 洪水溝を作り、第 10 層堆積物を供給した洪水溝である。

#### 005 土坑 (図 26・29、写真図版 21-3)

4-3 区中央の 002 洪水溝南側に接して、006 土坑と共に検出した。第 11 層上面で検出した。平面形状は楕円形で、断面形状は逆台形状である。規模は、長さ 46 cm、幅 37 cm、深さ 16 cmである。埋土は 1 層で、①粘土質シルトである。出土遺物はなかった。

#### 006 土坑(図 26・29、写真図版 21-4)

4-3 区中央の東壁際で、005 土坑と接して検出した。第 11 層上面検出した。平面形状は円形もしくは楕円形と考えられ、断面形状は逆台形である。規模は、長さ 17 cm以上、幅は 33 cm、深さ 13 cmである。東側は調査区外へと延びる。埋土は 1 層で、①粘土質シルトである。005 土坑と同じ堆積物である。005・006 土坑は掘削深度も浅く、柱痕も見つからなかったことから建物としての想定は難しい。出土遺物はなかった。

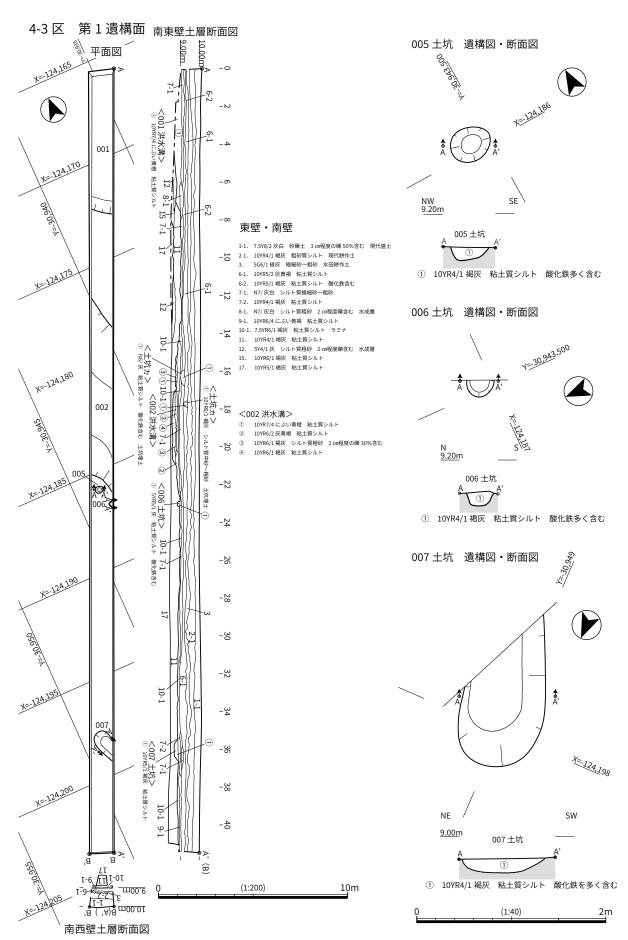


図 29. 4-3 区 第 1 遺構面 平面図・壁面図、005 ~ 007 土坑

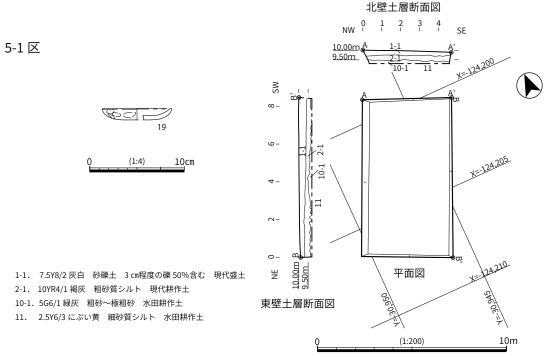


図30.5-1区第1遺構面平面位置図、包含層出土遺物

## 007 土坑(図 26・29、写真図版 21-2)

4-3 区南部の東壁際で検出した。第 11 層上面で検出した。平面形状は楕円形で、断面形状は逆台形である。規模は、長さは 1.2m 以上、幅 0.9 m、深さ 22 cmである。東側は調査区外へと延びる。埋土は 1 層で、①粘土質シルトである。005・006 土坑と同じ土質土色の堆積物であった。007 土坑に関しても、単層であり遺物もなく、調査区外へ延びることから性格は把握出来なかった。出土遺物はなかった。

#### 5-1 区 (図 30、写真図版 21-7・8)

本調査区は、1 面調査である。第 11 層 (第 4-1a 層)上面で遺構は検出されなかった。

なお、第2層現代作土から、くらわんか茶碗片と土師器皿が出土した。図30の19土師器小皿は、 手捏ね成形である。口縁端部内面に煤が付着することから、灯明皿として使用されていたものと思われる。時期は、N系列の11B・C段階で、江戸時代前期の17世紀中葉頃の遺物と思われる。

## **6-1 区**(図 31~36、写真図版 22-1~5)

本調査区は、1 面調査である。6-1 区は、前回調査の 3 区が北側に、2 区が南側にあり、その間に今回の 6-1 区が所在する。遺構は、調査区の中央部分のほぼ全てが攪乱されていた。遺構の存在が確認できたのは、調査区西側のみであった。表土下より約 0.5m 下げたところで、前回調査の  $1\cdot 2$  区検出面である第 7 層(第 3-1b 層)と第 14 層(第 4-2b 層)上面を確認し、第 1 遺構面として調査を行った。精査を行ったところ、溝 2 条、ピット状の土坑 7 基を検出した。

なお、第2層現代作土から、図32の20京焼(京・信楽産)行平鍋の蓋が出土している。体部の上に環状の摘みを作り、口縁端部を屈曲させ、体部外面には3条の沈線が巡るもので、全面に灰釉を施釉する。時期は、14B期(江戸IX期)の19世紀中葉頃か。第7層から、21瓦器椀が出土している。摩滅が著しいが、口縁端部内面には1条の沈線が巡り、器壁は肉厚である。時期は、楠葉型瓦器椀III-1期の12世紀後葉頃と思われる。

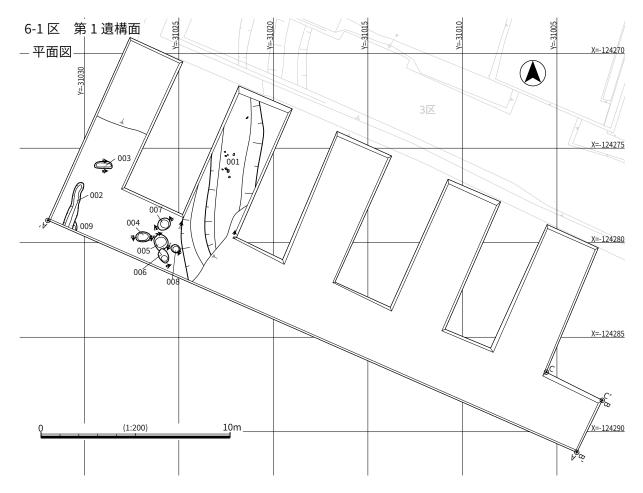


図31.6-1区第1遺構面平面位置図

## [第1遺構面]

**001 溝**(図 31 ~ 36・表 4・5、写真図版 23-1・2・7)

6-1 区の西側で検出した。前回調査の 2 区 206 流路と 3 区 276 流路と同一の遺構である。盛土が上に乗る、斜面の第 14 層(第 4-2b 層)上面で確認した。検出できたのは、延長約 10 m、幅約 3.6 m、深さ約 0.8 mである。断面の形状は、逆台形もしくは U 字状である。調査区の南側及び北側上層においては、攪乱の影響を受け、3 区との接合に不整合を生じている。溝底の高さは、3 区 276 流路が標高 9.43 mで、今回調査の断面位置が標高 9.5 m であり、2 区 206 流路の南半が浅くなっていたことから、緩やかに南南西方向の微高地を横断して、北北東方向の水田域に、不自然ではあるが自然堆積方向とは逆の北側に流れていた可能性がある。この点については、検討を要する。また、今回調査地が緩やかなカーブ地点に当たることから、溝の掘直しもしくは再堆積が、少なくとも 2 回みられる。発見時の埋土は 7 層で、⑦~⑤層が当初の堆積、④・③層が 2 回目の堆積、②・①層が最終の堆積である。堆積物は①シルト質極細砂〜細砂、②粘土質シルト、③ラミナのあるシルト質極細砂〜細砂、④1 cm程度の礫を 20%含むシルト質中砂、⑤1 cm程度の礫を 50%含む粘土質シルト、⑥1 cm程度の礫を 20%含む粘土質シルト、⑦粘土質シルトで、①・②層は泥質堆積物で、③~⑥層が水成堆積物、最下層の⑦層が泥質堆積物である。この堆積状況は、3 区 276 流路の上層が泥質堆積物で、下層が水成堆積物であるのと同じ状況がみられる。

出土遺物は、今回の調査区で最も多くの出土があった。これ等の遺物は、図 34 の②層の遺物出土状況図 からも明らかなように、完形土器は無く接合個体も距離があいていること、土器の一部のみが出土する

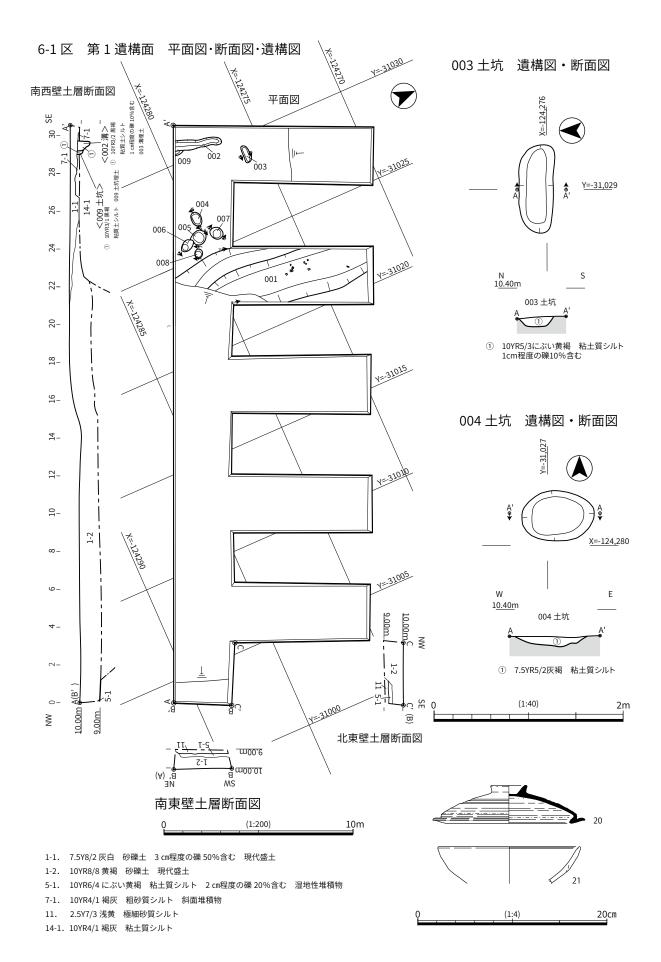


図32.6-1区第1遺構面平面図・壁面図、003溝、004土坑、包含層出土遺物

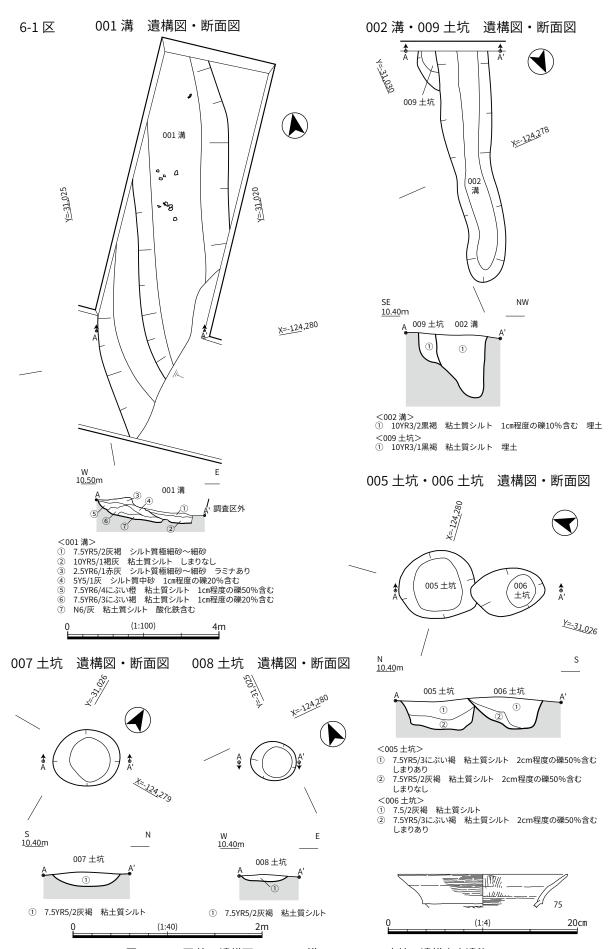


図 33. 6-1 区 第 1 遺構面 001・002 溝、005 ~ 009 土坑、遺構出土遺物

こと、表面が摩滅していることなどから、集落内を通っていた溝に廃棄された土器が水に流されて散在 しているといった状況が想定される。なお、③~⑦層からの遺物の出土はなかった。

以下には、出土遺物で図化できた図 35・36 の遺物について記載する。なお、遺構検出までの遺物を上層、遺構検出以後の掘削から①層出土遺物までを中層、②層出土遺物を下層とした。遺物の分類により年代が古いと思われるものから順に記述する。分類基準は、本遺跡の所在する摂津でのこの時期の編年が整っていないため、中河内地域の編年であるが西村 (2008) を主に用いた。

#### 弥生時代後期前半新段階

22 は生駒西麓産の胎土をもつ広口壷の胴肩部で、半球形の体部に、大きく外反する口頸部を付けるものと思われる。

#### 弥生時代後期後半中段階

23 は広口壷の胴肩部で、球形の体部に頸部が直上方にのびた後に、外折れする口縁部を付けるものと思われる。胴部の破片であり、古段階か中段階に属すものかは不明であるが、ここでは器形や刷毛目調整等から中段階に含めて扱う。24 は広口壷の頸部から胴肩部で、大きく外反する口頸部が付くものと思われる。25 は大型鉢 A の口縁部で、擂鉢状の体部からやや外反し、口唇部に端面をもつもの。26 は平底の甕の底部で、底部のみであるが、出土層位からここに入れる。27・28 は弥生形甕の口縁部で、外反する口縁部をもち、口唇部に面をもつ。29 は弥生形甕の口縁部で、真っすぐ立ち上がって外傾し、口唇部に端面をもつもの。調整は荒い刷毛目である。

#### 弥生時代後期後半新段階

30 は広口壷の口縁部で、頸部より大きく外反する口縁部をもち、口唇部に丸い端面をもつ。31 は弥生形甕の口縁部で、逆ハの字に開き、端部を尖らせ気味にして、口唇部を丸く収める。32 は弥生形甕の胴肩部から口縁部で、外面叩き内面板ナデの半球形の体部に、頸部は立ち上がって外傾し、口唇部を尖り気味に収める。33・34 は甕の口縁部で、逆ハの字に開き、外傾する口縁端部に僅かに垂下する口唇面を作る。35 は甕の口縁部で、逆ハの字に開き外傾する厚い口縁で、口唇部に端面を作る。36 は弥生形甕の胴肩部で、外面は叩き、内面は細い刷毛目調整を残す。37~39 は近江系の土器で、37 は装飾の無い受口状口縁壷の口縁部、38 は外面に直線文と波状文を施す小型の受口状口縁甕の胴肩部、39 は受口状口縁屈曲部外面に、斜め刺突文を施す浅甕の口縁部である。40 は椀形高杯 A の台部裾を欠くもので、浅い椀形の杯部に大きく開く中空の台部が付く。41 は椀形高杯 A の椀口縁と台部裾を欠くもので、椀形の深めの体部に大きく開く中実の台部がつき、4 穴の透孔が確認できる。42・43・44 は小型鉢 C の口縁部と体部で、小さく外折れする口縁部に、尖り気味の体部が付くものと思われる。45 は小型鉢 D の口縁部で、擂鉢状の体部に短く外反する口縁部が付くものである。

## 庄内式古段階古相

46・47 は広口壷の口縁部で、大きく口頸部が外反し、端部先端を摘まみ上げる。48 は弥生形甕の口縁から胴肩部で、口頸部がくの字に折れ曲がり、尖らせた口唇部端部上を返らせる。49 は弥生形甕の口頸部で、口頸部がくの字に折れ曲がり、口唇部を丸くおさめ、内面をヘラケズリとする。50 は庄内系高杯 A の杯部で、口縁部が緩やかに外反し、全面ヘラミガキとする。

## 庄内式古段階新相

51 は直口壷 A の口縁部で、球形の体部に僅かに斜め上方向に短い口頸部が伸びるもので、口唇部に端面を作る。52 は加飾性垂下口縁壷の口頸部で、真っすぐ上がる頸部が斜めに折れ曲がり、その上面

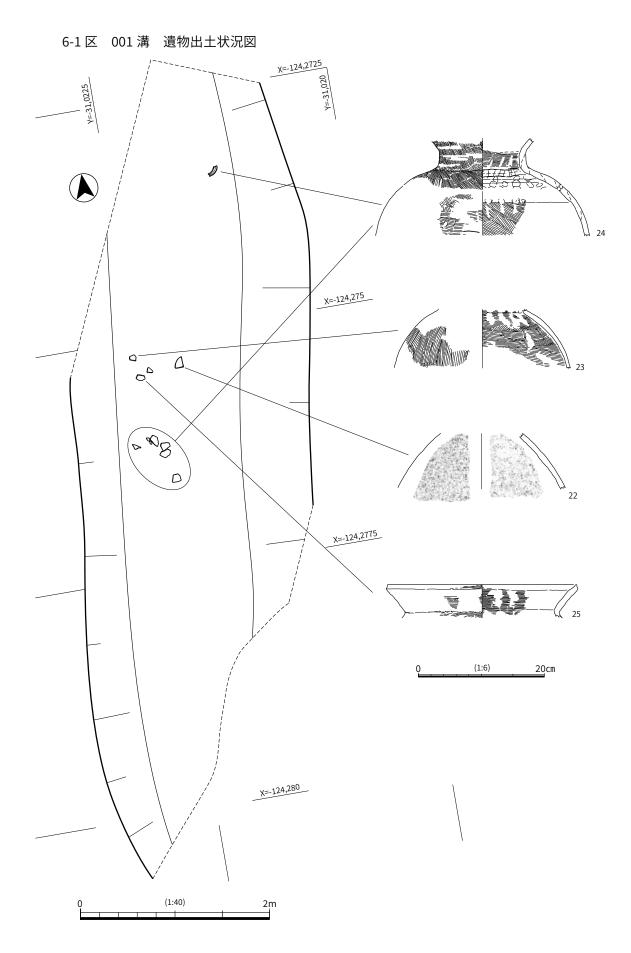


図 34. 6-1 区 第 1 遺構面 001 溝遺物出土状況図

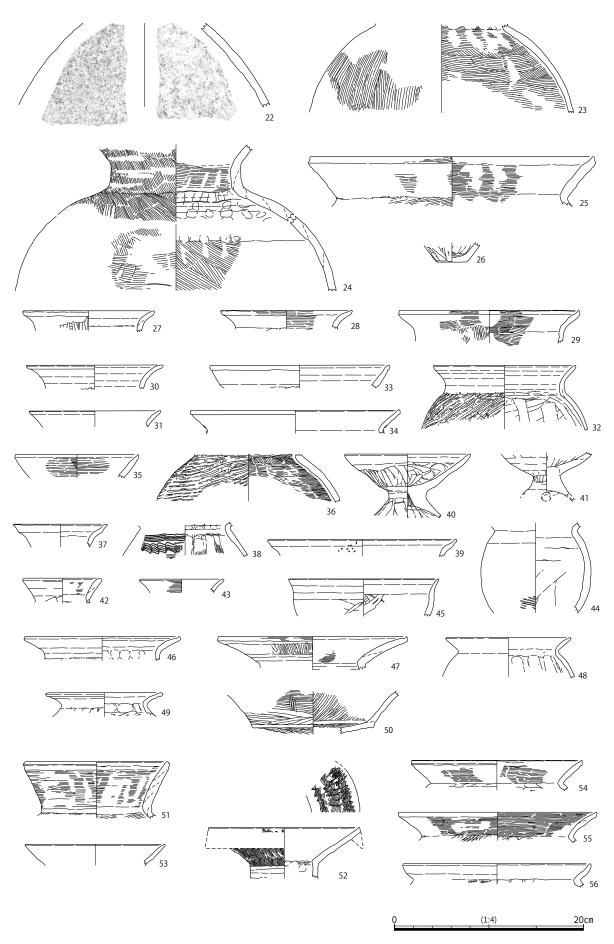


図 35. 6-1 区 第 1 遺構面 001 溝出土遺物 (1)

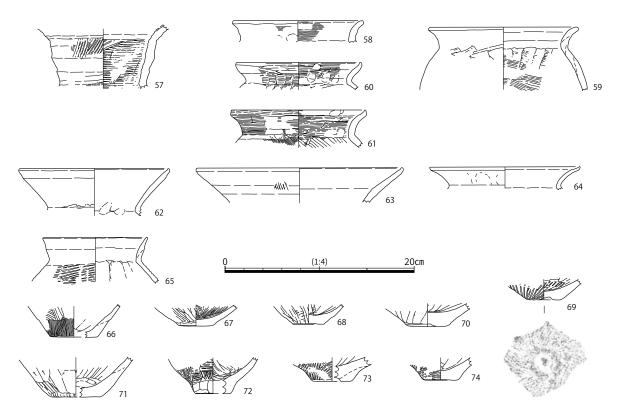


図 36.6-1 区 第 1 遺構面 001 溝出土遺物 (2)

に波状文3帯、口縁部端の垂下部分は欠失するが、端面に波状文1帯以上の痕跡を残すものである。53は小型の庄内形甕の口縁部で、口頸部がくの字に折れ曲がり、口唇部を丸くおさめる。54・55は弥生形甕の口頸部で、頸部でくの字に折れ曲がり、やや外反しながら口唇部を上に摘まみ上げる。外面は叩きで、内面はヘラケズリとする。なお、54は生駒西麓産の胎土である。56は中型鉢の口頸部で、頸部から受口状に内湾しながら折れ曲がり、口唇部は丸く収める。

## 庄内式中段階

57 は複合口縁壷の頸部で、二重に外反する口縁部もつ壷の頸部である。58・59 は弥生形甕の口縁から胴肩部で、口縁は強く短く外反し、口唇部は丸くおさめる。外面は板ナデ、内面は刷毛目である。60・61 はあまり見ない異形甕の口頸部で、頸部で大きく外反して口唇部を摘まみ上げ、面を作る。外面は細い刷毛目で、内面はヘラケズリである。

#### 庄内式新段階

62 は直口 Aの口頸部で、大きく逆ハの字に直線的に開き、口縁部を口唇部で細めて少し摘まみ上げるもので、丸底と思われる。63 は直口 Bか、口縁の直径が大きくて傾きが大きいため複合口縁 Bのどちらかになるものと考えられる。64 は庄内形甕の口頸部で、大きく外反する口縁の先端を摘まみ上げて面を作る。外面には叩きが僅かに残り、内面はケズリである。

# 布留式古段階古相

65 は弥生形甕の口頸部から胴肩部で、直口壷に近い口縁部で、真っすぐに立ち上げた口唇部を薄く仕上げて丸く収める。外面は叩き、内面は板ナデである。

## 所属時期が不明確な土器底部

このほかに、 $66 \sim 74$  の土器底部がある。66 は広口壷の底部と思われるもので弥生時代後期前半新段階に、67 は細頸壷と思われるもので弥生時代後期後半中段階に、68 は小型鉢 C で、69 は弥生形甕

の底部と思われるもので弥生時代後期後半新段階に、70・71 は広口壷と思われるもので庄内式古段階に、72・73 は弥生形甕と思われるもので庄内式古段階に、74 は弥生形甕と思われるもので庄内式中段階付近に所属するものと思われる。

以上の様に、001 溝の小片ながら図化した53 点の内、帰属時期の不明確な底部片10 点を除いた43 点について、器種分類を行ってみた。この結果、001 溝の機能していた時期は、弥生時代後期前半新段階~布留式古段階古相までであることが明らかとなった。途中、弥生時代後期後半古段階の遺物が出土していないかにみえるが、これは分類した遺物に胴部や口縁部のみの破片が多いためであり、集落自体は比較的連続して営まれていたものとみておきたい。

表4は底部を除いた、時期別の上層・中層・下層別出土土器の点数表である。下層以外の中層と上層は作業上で設けた層位であり余り意味がないが、およその傾向を知ることができる。下層の出土ピーク時期は、弥生時代後期後半中段階の3点である。1点ではあるが弥生時代後期前半新段階の遺物も出土している。この下層の時期である弥生時代後期前半新段階から弥生時代後期後半中段階の時期が、微高地上の集落や第11層の水田の経営を始めた時期と考えてよいように思われる。中層の出土ピーク時期は、弥生時代後期後半新段階の、7点であった。弥生時代後期後半中段階から庄内式新段階まで出土

しているが、3点以上は弥生時代後期後半中段階か ら庄内式古段階新相で、中層の本来の堆積時期がこ の時期にあることを示しているように思われる。上 層の出土ピーク時期は、弥生時代後期後半新段階の 9点であった。このピーク時期より前の出土は無く、 後の時期も1~2点であり、次に多くなる3点は庄 内式中段階であった。本来は中層であった遺物が、 上層に含まれてしまっていた場合、この庄内式中段 階から布留古段階古相が本来の上層の遺物の年代に 相当するものと考えることもできる。さらに、本来 は上層であった遺物が、中層に含まれてしまってい た場合、弥生時代後期後半中段階から庄内式古段階 新相が本来の堆積時期であった可能性も考えられる。 これらの不正確な点を含めても、001 溝の出土時期 の幅は、そう大きく混乱していないことを知ること ができる。

表 4. 6-1 区 001 溝 出土遺物時期別層別変遷表

下層	中層	上層	計
0	0	1	1
0	1	2	3
0	2	3	5
0	5	1	6
0	3	2	5
0	7	9	16
3	3	0	6
0	0	0	0
1	0	0	1
4	21	18	43
	0 0 0 0 0 0 0 3	0 0 0 0 0 1 0 0 5 0 3 0 7 3 3 0 0 1 0	0 0 1 0 1 2 0 2 3 0 5 1 0 3 2 0 7 9 3 3 0 0 0 0 1 0 0

\*底部のみを除く

表5は底部を除いた、時期別の器種別出土土器の点数表である。001 溝が掘削された弥生時代後期前半新段階と、埋没により001 溝の機能が止まった布留古段階古相では、壷または甕のみが検出され他の器種は出土していない。この他の時期では壷と甕は必ず存在し、最も器種が充実しているのは、弥生時代後期後半新段階の5器種16点であった。最も多い器種は甕の22点、次に壷の約半分の12点と続く。

001 溝はその後、微高地上で古墳時代前期前葉の布留式古段階古相以降の遺物が確認できないこと、溝の掘直しが無く埋没していることから、微高地にあった集落の廃絶や移動が考えられる。前回調査で確認された次の時期の遺構は、古墳時代中期後半の TK216 ~ TK208 型式段階の 2 区 246 ピットであ

表 5. 6-1 区 001 溝 出土遺物時期別器種別変遷表

	広口壷	近江系 壷	直口壺 A	加飾性 垂下口 縁壷	複合 □縁壷	直口壷 or複合 口縁壷	簉	有稜高 杯	椀型高 杯	大型鉢	中型鉢	小型鉢 A~E	dž
布留式古段階古相	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
庄内式新段階	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	3
庄内式中段階	0	0	0	0	1	0	4	0	0	0	0	0	5
庄内式古段階新相	0	0	1	1	0	0	3	0	0	0	1	0	6
庄内式古段階古相	2	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	5
弥生時代後期後半新段階	1	1	0	0	0	0	8	0	2	0	0	4	16
弥生時代後期後半中段階	2	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	6
弥生時代後期後半古段階	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
弥生時代後期前半新段階	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
dž	6	1	2	1	1	1	22	1	2	1	1	4	43

\*底部のみを除く

り、この間の集落の動向は今のところ不明である。

### 002 溝(図 31~33、写真図版 23-4)

6-1 区西側南壁際で検出した。前回調査の攪乱溝で、第2層現代作土の上段水田の段下水田部分に設けられた溝である。第7層(第3-1b層)上面で検出した。検出できたのは、長さ延長2.6m以上、幅約0.6m、深さ約0.67mである。断面形状はV字状である。南側は前回調査の2区へと延びる。埋土は1層で、①1 cm程度の礫を10%含む粘土質シルトであった。また、同じ第7層(第3-1b層)より切る、009 土坑を切る。出土遺物はなかった。

#### 003 土坑 (図 31・32、写真図版 23-4)

6-1 区西側で検出した。第7層上面で検出した。形状は東西方向の短辺の丸い溝状で、断面形状は逆台形である。規模は長さ0.95m、幅は0.37m、深さ10cmである。埋土は1層で、①1cm程度の礫を10%含む粘土質シルトである。出土遺物はなかった。

# 004 土坑 (図 31・32、写真図版 23-5)

6-1 区西側の 001 溝沿いで検出した。第7層上面で検出した。平面形状は楕円形で、断面形状は皿状である。規模は長さ 0.76m、幅 0.54m、深さ 11cm である。埋土は1層で、①粘土質シルトである。出土遺物はなかった。

# 005 土坑(図 31~ 33、写真図版 23-6)

6-1 区西側の 001 溝沿いで検出した。第7層上面で、006 土坑に南端を切られる形で検出した。平面 形状は隅丸方形で、断面形状はシャーレ状である。規模は長さ 0.8m、幅 0.53m、深さ 0.33m である。 埋土は 2 層で、①・②層共に 2 cm程度の礫を 50%含む粘土質シルトである。

なお、②層より図 33 の 75 庄内系高杯 A の外反する杯部片が出土している。時期は庄内式古段階古相の遺物である。001 溝の遺物が混入したものであろう。

## 006 土坑 (図 31 ~ 33、写真図版 23-6)

6-1 区西側の 001 溝沿いで検出した。第7 層上面で、005 土坑を切る形で検出した。平面形状は柱穴 状で、断面形状は片傾斜の U 字状である。規模は長さ 0.78m、幅 0.5m、深さ 0.34m である。埋土は 2層で、①粘土質シルト、②2cm程度の礫を50%含む粘土質シルトである。出土遺物はなかった。

#### **007** 土坑(図 31~ 33、写真図版 23-5)

6-1 区西側の 001 溝沿いで検出した。第7層上面で検出した。平面形状は円形で、断面形状は皿状である。規模は長さ 0.7m、幅 0.61m、深さ 15cm である。埋土は 1層で、①粘土質シルトである。出土遺物はなかった。

## 008 土坑 (図 31 ~ 33、写真図版 23-6)

6-1 区西側の 001 溝沿いで検出した。第7層上面で検出した。平面形状は円形で、断面形状は皿状である。規模は長さ 0.5m、幅 0.42m、深さ 7 cmである。埋土は 1 層で、①粘土質シルトである。出土遺物はなかった。

#### 009 土坑(図 31 ~ 33)

6-1 区西側南壁際で検出した。第7層上面で、002 溝に切られた状態で検出した。平面形状・断面形状共に明確でない。規模は、長さ0.53m、幅0.23m、深さ0.3mである。埋土は1層で、①粘土質シルトである。出土遺物はなかった。

ピット状の土坑 7 基は、前回調査の 2 区においても複数検出されているが、柱の痕跡がなく規則性がないことから、建物の柱穴であった可能性はない。埋土の変化から、003 土坑 $\rightarrow$  005 土坑 $\rightarrow$  006 土坑 $\rightarrow$   $004 \cdot 007 \cdot 008 \cdot 009$  土坑 $\rightarrow$  002 溝の遺構変遷が推測される。検出面が第 7 層(第 3-1b 層)上面であることも含め、埋土がよく似た単層であることから、002 溝とも係る近世 $\sim$ 現代の遺構ではないかと思われる。

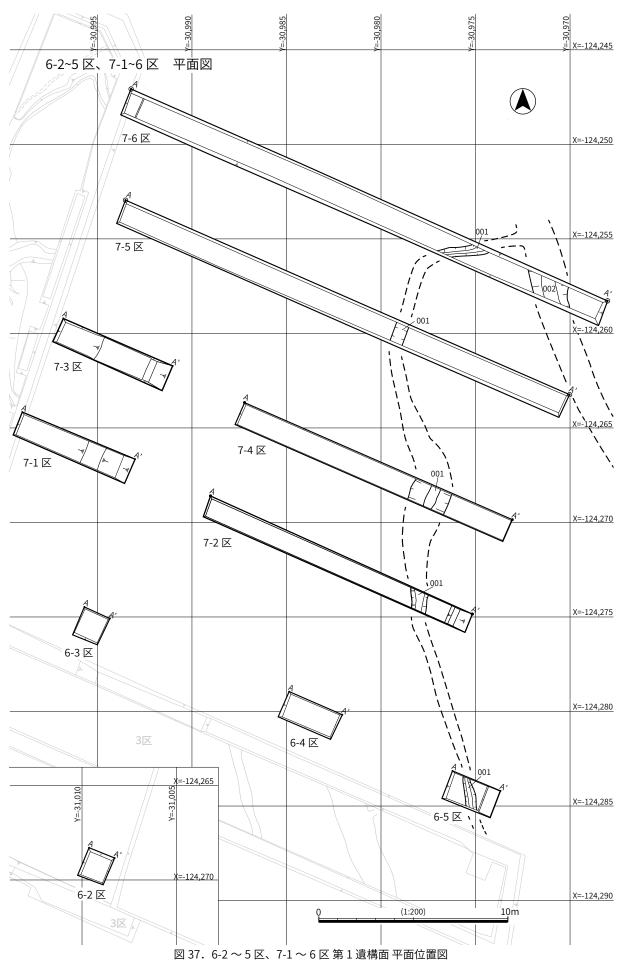
# **6-2 区**(図 37・38、写真図版 24-1)

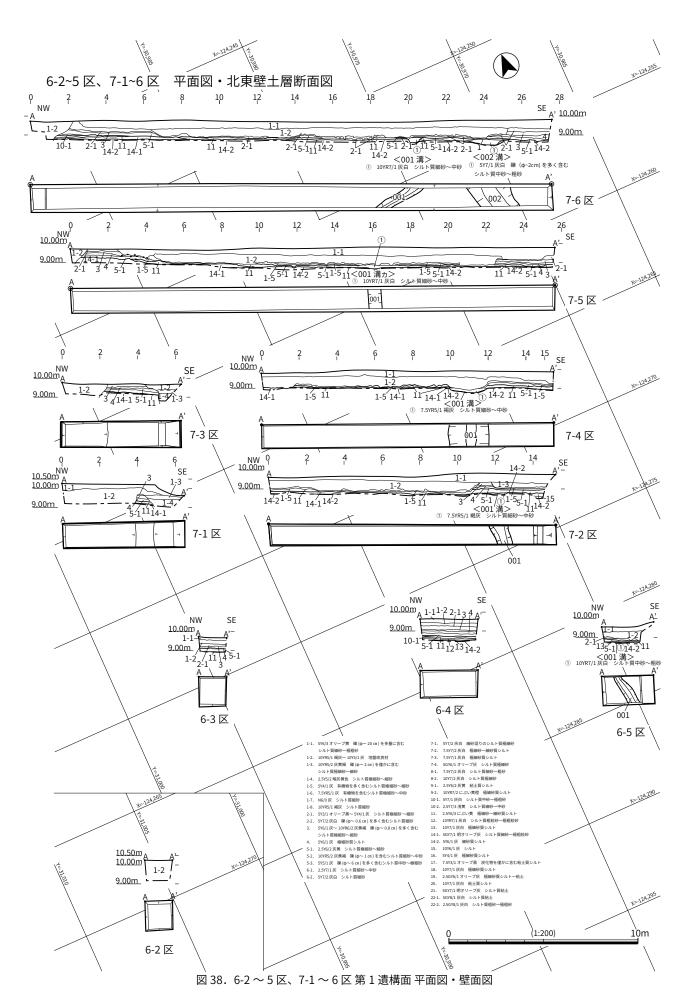
本調査区は、1 面調査である。6-2 区は前回調査の上字形トレンチ 3 区の西側隅部に所在する。遺構は、 調査区のほぼ全てが攪乱され、確認できなかった。出土遺物はなかった。

## **6-3 区**(図 37 ~ 39、写真図版 24-2)

本調査区は、1 面調査である。6-3 は、前回調査の上字形トレンチ 3 区の東側に所在する 3 トレンチの内の西側のトレンチである。現地表面より約 0.75 m下げたところで、第 11 層(第 4-1a 層)上面を検出した。6-3 区では、第 11 層上面に遺構は確認できなかった。

なお、5層(第 3-1a 層)より 2 点の遺物が出土している。図 39 の 76 は、古墳時代前期後葉の布留式中段階古相の甕で、丸底になるものとみられる。77 は軒丸瓦で、瓦当の直径が 16 cm余りに復元される大きなもので、厚さ約 2.5 cm、瓦当厚約 1.5 cm、周縁幅約 1 cm、内区圏線径約 9 cm、外区圏線径約 14 cmである。内区文様は明確ではないが、圏線状に残っているものが巴の尾部と尾部が圏線状になったものであれば、巴文と考えられる。外区文様は、直径 1.1 ~ 1.3 cm、高さ 0.4 ~ 0.5 cmの大きな珠文を密に配すもので、3 個が残存する。外縁は直立縁で、素文である。瓦当の側面並びに裏面の調整は、ヨコナデまたはナデとする。77 は、前回調査の微高地上の 2 区 150 溝より出土した 317 右巻三巴文軒丸瓦と内区径、外縁内側下の径、珠文帯の幅、珠文の形状等がほぼ同じで、極めてよく似た笵である。時期は 13 世紀後葉から 14 世紀前葉頃とみられる。





#### **6-4 区**(図 37・38、写真図版 24-3)

本調査区は、1 面調査である。6-4 区は、前回調査の上字形トレンチ 3 区の東側に所在する 3 トレンチの内の中央のトレンチである。現地表面より約0.9 m下げたところで、第11 層上面を検出した。第11 層上面に遺構は確認できなかった。出土遺物はなかった。

## 6-5 区(図37·38、写真図版24-4)

本調査区は、1 面調査である。6-5 区は、前回調査の上字形トレンチ 3 区の東側に所在する 3 トレンチの内の東端のトレンチである。現地表面より約 0.8 m下げたところで、第 11 層上面を検出した。第 11 層上面で、斜めにトレンチを横断する溝 1 条を検出した。

# [第1遺構面]

## **001溝**(図37・38)

6-5 区の中央で検出した。前回調査の 3 区東端では検出されていない。検出できたのは、延長約 2.6 m、幅  $0.6 \sim 0.9$  m、深さ約 7 cmの南北方向の浅い溝である。断面の形状は、皿状である。埋土は 1 層で、①シルト質中砂~粗砂である。出土遺物はなかった。

6-5 区の 001 溝は、以下に記す 7-2・4・5・6 区の 001 溝と埋土や検出位置から同じ溝と考えられ、図 37 の様に 7-6 区北東側で 002 溝から分岐し、南側に流れているものと想定される。その傾斜は、7-6 区の溝底の高さが標高 8.64 m、6-5 区が標高 8.55m で、0.2 度と緩い傾斜で流れていた。

#### **7-1区**(図 37·38、写真図版 24-5)

本調査区は、1 面調査である。 $7-1 \sim 6$  区は、前回調査の上字形トレンチ 3 区の東側に所在する。遺構は、北西側と南東側が攪乱され、中央の一部に当初の堆積物が残る状態であり、遺構は発見できなかった。出土遺物はなかった。

## **7-2 区**(図 37 ~ 39、写真図版 24-6)

本調査区は、1 面調査である。現地表面より  $0.8 \sim 0.9$  m下げたところで、第 11 層 (第 4-1a 層)上面を検出した。僅かに東側に下がる第 11 層上面で、トレンチを横断する溝 1 条を検出した。

なお、5層から2点の遺物が出土している。図39の78は、皿N系列6C期の土師器皿と思われる もので、13世紀中葉頃の遺物と考えられる。79は須恵器の壷か甕の肩部の破片で、7世紀末~8世紀 前葉の遺物と考えられる。これは御所池瓦窯跡1号窯の操業時期と重なり、関連が考えられる。

## [第1遺構面]

## **001溝**(図 37・38)

7-2 区の南東側で検出した。検出できたのは、延長約 1m、幅  $0.8 \sim 0.86$  m、深さ約 8 cmの南北方向の溝である。断面の形状は、皿状である。埋土は 1 層で、①シルト質細砂~中砂である。出土遺物はなかった。

## 7-3 区 (図 37·38、写真図版 24-7)

本調査区は、1 面調査である。遺構は、7-1 区同様に北西側と南東側が土壌改良により攪乱され、中央に当初の堆積物が残る状態であった。現地表面より $0.4 \sim 0.5$  m下げたところで、東側下がりの第

11 層上面を検出した。出土遺物はなかった。

## 7-4区(図37·38、写真図版24-8)

本調査区は、1 面調査である。現地表面より  $0.75 \sim 1 \, \mathrm{m}$ 下げたところで、第  $11 \, \mathrm{M}$  層上面を検出した。 東下がりの第  $11 \, \mathrm{M}$  層上面で、トレンチを横断する幅の広い溝  $1 \, \mathrm{A}$  条を検出した。

## [第1遺構面]

#### 001溝(図37·38)

7-4 区の南東側で検出した。検出できたのは、延長約 1.2m、幅  $2.1 \sim 2.2 m$ 、深さ約 18 cmの南北方向の溝である。この付近で最も幅が広くなっている。断面の形状は、皿状である。埋土は 1 層で、①シルト質細砂~中砂である。出土遺物はなかった。

## 7-5 区 (図 37・38、写真図版 25-1~3)

本調査区は、1 面調査である。現地表面より  $0.4 \sim 0.9$  m下げたところで、第 11 層上面を検出した。 東下がりの傾斜を持つ第 11 層上面で、トレンチを横断する細い痕跡程度の溝 1 条を検出した。

## 「第1遺構面」

### 001溝(図 37・38)

7-5 区の中央東側で検出した。検出できたのは、延長約 1.2m、幅  $0.4 \sim 0.5$  m、深さ約 4 cmの南北方向の溝である。上層の削平もあり、この付近で最も幅が狭くなっている。断面の形状は、浅い皿状である。埋土は 1 層で、①シルト質細砂~中砂である。出土遺物はなかった。

## 7-6区(図37~39、写真図版25-4)

本調査区は、1 面調査である。北西端が、攪乱を受けている。現地表面より  $0.9 \sim 1$  m下げたところで、第 11 層上面を検出した。緩やかな東下がりの傾斜を持つ第 11 層上面で、トレンチを東西方向に横断する細い溝 1 条と、南東端に南北方向の溝 1 条の 2 条を検出した。

なお、5 層から図 39 の 80 平瓦が 1 点出土している。この平瓦は摩滅しているが、凸面の斜格子叩きや瓦の調整法等から、御所池瓦窯跡 1 号窯の平瓦であることが確認できる。7 世紀後葉~8 世紀前葉と考えられる。

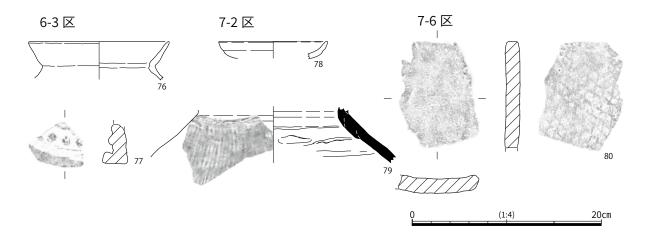
#### [第1遺構面]

## 001溝(図37・38、写真図版25-5)

7-6 区の南東端で検出した。検出できたのは、延長約 1.2m、幅  $0.4 \sim 0.5$  m、深さ約 28 cmの東西方向の溝である。この付近で溝幅を狭くし、向きを 90°変えている。断面の形状は、逆台形である。埋土は 1 層で、①シルト質細砂~中砂である。出土遺物はなかった。

# 002溝(図37・38、写真図版25-6)

7-6 区の東端で検出した。前回調査の 4 区 307 流路・295 流路、今回調査の 1-1 区 001 溝、2-1 区 002 溝の南側延長部と考えられる。検出できたのは、延長約 1m、幅  $1.2 \sim 1.5$  m、深さ約 36 cmの南北方向の溝である。上層の削平もあり、この付近で最も幅が狭くなっている。断面の形状は、東側が急で西側が浅い皿状である。埋土は 1 層で、①礫 ( $\phi \sim 2$  cm)を多く含むシルト質中砂~粗砂である。出土遺物はなかった。



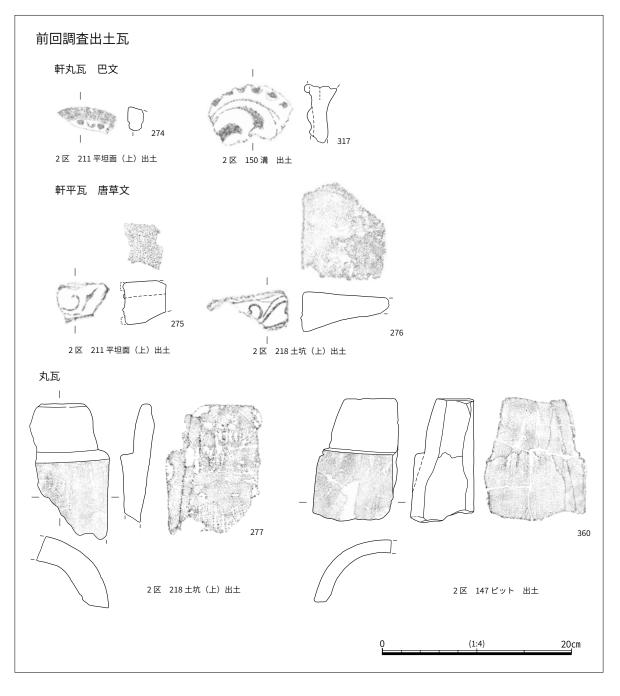


図 39. 6-3 区、7-2·6 区 第 1 遺構面 包含層出土遺物、前回調査出土瓦

# 第6章 総括

前章までで、調査区毎の発掘調査成果について報告してきた。このため総括では、時代毎に報告しておきたい。特に今回調査では微高地上の調査箇所は、6-1区の北縁での調査のみに留まった。よって、今回調査の中心となった、尾山遺跡の地形環境変遷と土地利用について報告し総括としたい。

# 第1節 尾山遺跡の時期別消長

ここでは、今回調査のみでは不足する情報を、名神高速道路内遺跡<sup>1)</sup> や前回調査<sup>2)</sup> において検出された遺構と出土遺物についても加え、地形環境の変遷と土地利用について、まとめておきたい。遺跡の消長並びに遺物量のおよその変化は、表 6 の遺構時期別変遷表に示した。

#### 縄文時代後期以前と以降

今回調査では縄文時代後期~弥生時代中期までの遺構と遺物については、確認できなかった。しかし、前回調査では微高地南側の7区谷地形において、縄文時代後期前葉の縁帯文土器や後期中葉の深鉢等が、標高約9m付近から出土している。尾山遺跡よりも西側山麓の沖積扇状地上位面(以下、「段丘面」という。)上麓屑面の名神高速道路敷地内・越谷遺跡第2地区第3遺構面の黒褐色粘土層(包含層)からも、同時期の縄文時代後期前葉の北白川上層式1・2期の壷・浅鉢・深鉢が、標高約17.5m付近で出土している³。これらは、縄文海進のピークといわれる6,500年前以降の海水位の低下で、段丘面縁麓屑面やその崖面下で生活した人々の遺物と考えられる。よって、遺構検出面下の基盤層である第22層以下の堆積年代が、後期前葉以前であったことが明らかとなるとともに、周辺での居住の開始時期を明らかにしえたものといえる。

本町内でこの様な例は、尾山遺跡北側の広瀬遺跡 <sup>4)</sup> で、縄文時代後期中葉の元住吉山 II 式の浅鉢と深鉢が、遺物のみではあるが標高 9.6m 付近の包含層で出土している。また、同じ淀川右岸を少し遡った大山崎町では、小泉川左岸の淀川河口付近に想定される下植野南遺跡 <sup>5)</sup> で、縄文時代後期前葉~中葉(縁帯文期)の北白川上層式、後期末~晩期初頭(凹線文期)の宮瀧式~滋賀里 I 式、晩期末(凸帯文期)の船橋式~長原式の遺物のみではあるが標高 10 m付近から出土している。下植野南遺跡の約 1.6 km上流に所在する長岡京市・伊賀寺遺跡 <sup>6)</sup> では、標高 28 m付近で縄文時代中期末の北白川 C 式、後期中葉~後葉の元住吉山 I ・II 式~宮瀧式の竪穴建物や土坑を多数検出している。伊賀寺遺跡の小泉川対岸の大山崎町・脇山遺跡 <sup>7)</sup> では、標高 31 m付近で縄文時代中期末の北白川 C 式の複数の土坑を検出している。

このように縄文時代後期前葉頃から、淀川及びその支流、あるいはこれらを含む河跡湖や潟湖等の河畔に近い所で、居住痕跡は未だ見つかってはいないが、漁撈等の生業活動に伴う遺物の出土が確認されていることになる。

## 縄文時代晩期・弥生時代前期

突帯文土器・弥生時代前期の遺構と遺物については、今回調査では 1-1 区 001 溝から混入品として、 長原式中相(林 A-2 類)<sup>8)</sup> の深鉢片が 1 点ではあるが出土した。前回調査では、遺構として検出された

表 6-1. 遺構時期別変遷表

	時代区分												主要	な遺構	実測遺物点数の増減 (瓦・石製品・木製品・金属製品を除く)				
C14年 代	時 f	ŧ	泉・ 千葉・林 縄文編年	寺沢・ 森井 弥生 編年	森田 弥生 編年	西村 古式土師 器編年	川 西 埴 輪	飛鳥平城	経 土師 名 器	西曆	実 年 代	層序	2020年度調査	2022年度調査	2020年度調査	2022年度 調査			
前2500	縄文時代	<b>中期</b> 後期	北白川C1~4 (東庄内) 四ツ港 北白川上層式 北一乗寺K 元性青山   ・   滋賀栗   本質栗							前2500		第22層	4446 地形		I				
,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,		晚期	選覧業団か・福原 運管要収・金銀行 口酒井 船橋 宮ノ下			_						第20層							
前500 -		前期	長原式会相長原式会相長原式等相	河内 I - 1 河内 I - 2 河内 I - 3 河内 I - 4	摂津日	] 				前500		第19層	59土坑 60湾			<del>                                      </del>			
紀元前紀元後	弥生時代	中期		河内II 河内III	摂津II 摂津III					紀元前		第17層	393 - 457萬 521萬 392 - 394 - 396 - 397土式 530ピット 611 - 411 - 613清 634高まり 301 - 364物料 44-47 - 49 - 51 - 54 - 57萬 60総役 286格料料	3-102201 - 200 - 211 - 2124-98 3-102204 - 200 - 224 - 222 - 224 - 22588F (# 3-102204 - 204 - 226 - 239 - 201 - 27710					
		後期		用内V	摂津V	後期前半 後期後半古一 新段階						第16~ 14層	307流路 595時年 484席 485落ち込み 293・294世年 4-5杭列 179ピット 480流路 412席 560席 23席 603 - 604堤 605・608日 17ピット	1-1区001-003洪水港 -004大年 -055-007小蛙 -016第 -017 -019-023洪水港 -024小埠 -025 -035大年 -1-区03005号	- 6	ė			
210 <u>-</u> 240 <u>-</u> 270 -		初頭				在 古段階的 立 中段階 新段階	1			_ 210 _ _ 240 _ _ 270 _		第13~ 11層	295 - 560 - 567 7月8 52 - 5028 602 74日 2023東京リ 411 - 413年 207章 127 - 311 - 322章 208 - 138 - 172 - 282章 208 - 2082章 4738 512-6 459 - 472章 474 - 475 28	(000102-x) 5 3 13(2018年1903103-x) - 15 (2018103103-x) - 15 (2018103103-x) - 15 (2018103-x) -		Ţ			
300 - 330 -	古墳時代前期	中葉	-			古段階新 布 留 中段階古 式	49 II			_ 330 _		_							
390 - 420 -	古墳時代中期	後葉前半				中段階新	III	TG TK	73	_ 390 _		-							
480 -		後半前葉					-	TK2 ON TH TR	23 47	- 450 - - 480 - - 510 -		第10・9層	246土坑						
540 - 570 -	古墳時代 後期	中葉後葉					v	TK MT	85	_ 540 _ _ 570 _			282度(抗療療・労生土蘇出土)						
630 -	古墳時代 終末	飛鳥時代					.1	RAI TK	2217	- 630 - - 630 -		-	即所治互至1号英陽連		<b>1</b>				
690 - 720 -								税条H TR 税条V TR 税条V 平域:I	48	ļ	際原京遷都(694) 平城京遷都(710) 大原駅設置(711)	_	620上京 544上京 524-第 525-530上京 555上京 522第 592萬年リ 524-535 (22開下南) 523-536上京 536セット 532-537上京 242-243-255-255上京 488-500上京 488-493-533ビット						
750 - 780 -	奈良時代							平城11 平城17 下城17 下城17 下城17 下城17 下城17 下城17 下城17 下	1 1	780	東大寺領水無瀬荘絵間 (756) 長岡京遷都(784) 平安京遷都(794)	-	231 (後の第一中第)ピット 241分戸 224第込み 231ピット		T L				
810 -								∓egen Fegen	83	810 -									

表 6-2. 遺構時期別変遷表

C14年		時 代 区 分									主要	主 要 な 遺 構				
ft ft	時代	泉· 千葉·林 縄文編年		西村 古式土師 器編年	埴甲	須恵器 陶邑	平尾 土師 器 編年	西曆	実 年 代	層序	2020年度調査		2022年度調査	2020	<b>F度調査</b>	2022年度 調査
840 870 -							A	840								
900 -							2 B	900 _								
930 -							С	930 _								
960 -							A	960 -							I	
990 -	平安時代						3 B	990 _		第8~5層						
1020 -							с.	1020								
1050 -							A B	1050 _								
1080 -							c.		法勝寺造営開始(107 島羽殿造営開始(108	75) 86)					<u> </u>	
1110 -						ŀ	A	1110 _	專辦寺造立(1102)							
1140 -							5 B	1140 _								
1170 -						-	A		鎌倉幕府(1185) 木無理器官得官(119	99)						
1200 -							6 B	1200	新しく水無瀬殿建立 (1217) 泉久の乱(1221) 後島羽上皇配流							
1260 -							с	1260 _			<b>海高地上屋敷跡</b> 167池泉 211平地面 582溝 118溝 221溝 580 - 581溝 殿立柱建物1 - 3 618 - 619畦畔 395 - 227溝 622畦畔 291 - 297溝 167池泉	3-1区001清 3-2区 005~009耕作清 : 3-1区002土坑	区001清 3-2区003耕作清 - 004清 - 3-2区110清 - 011池 - 012大蚌ヵ			
1290 -	鎌倉時代						A 文永の役(1:		文永の役(1274) 弘安の役(1281)		235 - 227素 自225年 231 - 237素 157次条 557并月 133井戸 217 - 218土坑 557井月 133井戸 217 - 218土坑 495 - 554ヒット 132井戸 332井戸 378土坑 451土坑 9 - 55土丸 271土坑 481土坑 151 - 162 - 1682 375素 465素 417 - 444素					
1320 -											336清 453清 272・279清				<u> </u>	
1350 -				С	1350 _	湊川の数(1336) 室町幕府(1338)		446落ち込み								
1380 -	南北朝時代						8 8	1380	南北朝合体(1392)							
1410 -							В	1410		第4・3層						
1440 -							9 B	1440								
1470 -	室町時代						С	1470 _	応仁の乱(1467-147	7)						
1500 -							A	1500 -								
1530 -							10 B	1530 _	天文法華の私(1536)							
1560 -	安土桃山						С	1560 _	韓田信長入京(1568) 山崎の合数(1582)							
1590 -	時代						Α.	1620	徳川嘉府(1603)	_						
1650 -							11 B	1650 _								
1680 -						-	С	1680 _								
1710 -							A	1710								
1740 -	江戸時代						В	1740 _		第2層						
1770 -							A 13	1770 _				011%				
1800 -							В	1800 -								<u>                                     </u>
1830 -							14 B	. 1830 _								
1860 -								1860 _	東京奠都(1868)							

のが、標高 8.5m 付近の 1 区 59 土坑(突帯文深鉢・弥生甕)と、これに隣接する 1・2 区にかけて延びる 60 溝(突帯文深鉢)であった。これに 1・2・4・7・8 区の第 19 層(第 6a 層)包含層等から出土した縄文時代晩期~弥生時代前期の出土土器等、合わせて 32 点とサヌカイト製石鏃 1 点が出土した <sup>9)</sup>。これらは、突帯文土器では長原式中相から新相の遺物で、微細系刻目、無刻突帯や、水走式に分類される個体も含まれる。弥生土器では、口径 44 cmを越える大形の広口壺を含む、摂津 I -1・2 様式頃の遺物と考えられている。出土位置としては、遺構も検出された 1・2 区の微高地上ばかりではなく、今回調査 1-1 区と同様に、北側の 4 区からの出土があり、7・8 区の微高地南側縁辺部からの出土もある。これは微高地中央部が近世の削平により幅広く攪乱されているためであるが、何らかの意味がありそうにも思える。弥生時代中期・後期以降の水田は、居住地と考えられる微高地際の田畔まで水田化されており、前回調査の 1 区東側においても、この耕作段が明確に刻まれていた。これに対し突帯文土器・弥生時代前期にあっては、水田域が非常に限られた範囲にしかなく、高所の微高地上居住地との間に何も作られていない、荒地のような緩衝地帯が存在していたためかもしれない。

遺物量としては僅かな量ではあるが、土器型式としては途切れることなく継続しているように思われる。しかし、高槻市・安満遺跡<sup>10)</sup>等の拠点集落と大きく異なるのは、現在までの調査において居住域を囲う環濠などの施設を検出しておらず、当初より存在しなかった可能性が考えられる。

この問題とも係るものに、近接する弥生遺跡の存在がある。尾山遺跡微高地の北東約 300m 余りにある JR 島本駅前の遺跡である桜井駅跡  $^{II)}$  周辺でも、標高  $9\sim9.4$ m 付近に弥生時代中期の土坑や溝が検出され、摂津 II  $\sim$  V 様式の土器と、庄内式古段階新相の広口壷か複合口縁壷が、布留式中段階中相の甕などが出土した。この調査に先立つ調査  $^{I2)}$  においても、摂津 I 様式と V 様式の甕が出土している。さらに、尾山遺跡微高地の南南東約 200 mの青葉遺跡 A・B 地点  $^{I3)}$  (以下、「青葉遺跡」と包括して述べる。)では、標高 8.7m 付近に弥生時代中期の溝が検出され、摂津 II  $-1\cdot2$  様式の鉢型土器・壷・甕や、サヌカイト製の石鏃が出土した。この内、青葉遺跡は長期に渉る継続性が無いため、桜井駅跡とは性格が異なることは明らかである。この上記 2 遺跡は、現況では西国街道沿いに所在する遺跡の様に感じるが、遺跡周辺の図 40 の地形分類図  $^{I4)}$  をみると、南下する沖積リッジ(B)の砂礫層上に、上記の遺跡が所在していることが確認できる。それは、水田域となる L 字状に広がる地域(約 20ha)を、尾山遺跡の沖積リッジ(A)である微高地上の西側と、沖積リッジ(B)上の東側に所在する桜井駅跡が囲っているかのような景観が予測される。

尾山遺跡北東側の囲まれた水田域は、囲まれた範囲という限定的な地域ではあるが、谷からの給排水が容易であり開発には比較的好条件なように見受けられる。これに対し、桜井駅跡・青葉遺跡は、北側の沖積扇状地下位面から東側の沖積低地を使った、緩やかな日当たりの良い、東から南東傾斜の大規模な耕作地を想定することができるが、給排水にはかなりの計画性と指導力が求められる。このようにみるならば、尾山遺跡の微高地集落は、弥生時代にいち早く開発が着手された可能性はあるが、生産域の面積に限界があり、微高地自体も馬の背の様な形状の狭い面積で、当初より拠点集落とはなりえない、小規模な集落であったと推定される。

## 弥生時代中期

今回調査では、弥生時代中期の遺構には、第17層(第5a層)を作土とする水田遺構を想定しているが、中期の遺物は確認できなかった。前回調査では、水田遺構を除くと、微高地上の1区東側の水田

凡例

MH:山地・丘陵

TR:段丘 DV:開析谷

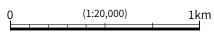
AU:沖積扇状地上位面 AL:沖積扇状地下位面

LP:沖積低地 NV:自然堤防 DY:人口堤防 HC:高水敷

PO:ため池

AR:沖積リッジ / 埋没流路痕跡

AC:旧流路



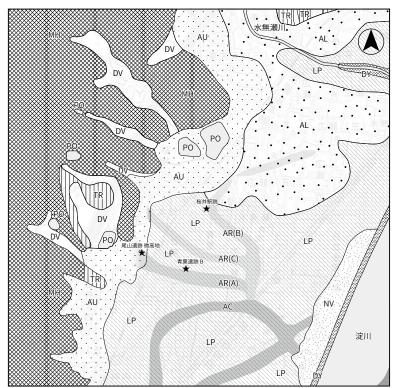


図 40. 地形分類図

畔、標高 8.6 m付近の 47 溝・49 溝・57 溝から、摂津IV -3・4 様式の鉢や広口壷、サヌカイトの剥片が出土した。第 17 層(第 5a 層)包含層から、弥生時代中期以前の甕底部が出土している。微高地南側 7 区の 393 溝・396 土坑・397 土坑や第 17 層(第 5a 層)包含層からは、摂津 II -2・3 様式の壷や甕が出土した。水田域では、この時期の作土である第 17 層(第 5a 層)の上に堆積する、第 14 層(第 4-2b 層)から出土した 742 弥生土器蓋が、層中から出土した土器としては唯一のものである。時期は弥生時代中期以前のものと考えられる 15 。

他に段丘面上の11区テラス状平坦地の標高13.6 m付近に、竪穴建物の壁溝状の溝や小ピットが検出され、弥生時代中期の分厚い甕底部を出土している。尾山遺跡においては、これまで微高地上の遺構・遺物ばかりを述べてきたが、段丘面上にも居住域らしきものが広がっている可能性を示した点は大きい。この様に、微高地上及び周辺の遺構数や遺物量は、極めて少なく希薄である。

第 17 層(第 5a 層)の水田遺構についても、第 11 層(第 4-1a 層)水田遺構の堆積層下面までの 30  $\sim$  60 cmの間に、最初に第 17 層(第 5a 層)作土上面に湿地性堆積物である第 16 層が薄く約 3  $\sim$  6 cm 被覆するが、図 8・21・22 からも明らかなように第 16 層で異なる位置に畦畔を新たに設けるものもあるが、大多数は同じ位置に畦畔が復旧され、新たに段差が設けられ、溝が掘りなおされるなど、明らか

に復旧中心に土壌化の進行しているのが観察される。さらに、その上層に堆積した第 15 層の上面においては、第 15 層が約  $4 \sim 17$  cm被覆し、畦畔や段差の復旧、段差下の溝や新たな溝の新設もみられるなど、復旧と新設とそれに伴う土壌化が第 17 層では進み、第 16 層の水田遺構とは異なる景観が予測される。

## 弥生時代後期~古墳時代前期初頭

この時期に入ると、遺構数も遺物量も飛躍的に増加する。今回調査では、第 11 層(第 4-1a 層)を作 土とする水田遺構と、微高地北縁の 6-1 区 001 溝(弥生時代後期前半新段階~布留式古段階古相)を 検出した。他に 1-1 区 021 溝・洪水溝の小型鉢(弥生時代後期後半新段階)、3-1 区 101 溝の高杯や甕(弥生時代後期後半古段階~中段階)などがある。前回調査では、第 13 層(第 4-2a 層)・第 11 層(第 4-1a 層)の水田遺構の他に、2 区の微高地上で削平が最も大きかった範囲に残存していた、2 区 206 流路(3 区 276 流路)・164 土坑・172 土坑・205 土坑・179 ピットから多くの土器(弥生時代後期前半古段階~庄内式新段階)が出土し、178 ピットからは土錘が 1 点、第 13 層(第 4-2a 層)からは銅鏃が 1 点出土している。他に調査地南側 10 区の 412 溝、北東側 14 区の 25 溝からも弥生時代後期の土器が出土している。

2 区と 6 区の交点では、見方によれば五角形に見える大型竪穴建物(直径約 11 m)の壁溝痕跡か外 周溝と思われる 127 溝・322 溝・311 溝、建物内の 133 土坑(炉跡ヵ)が、標高 9.5m 付近で検出され、遺物(弥生時代後期後半古段階~中段階)が出土している。この大型建物遺構の北側に隣接する 207 溝・208 土坑・479 落ち込み(473 溝・474~ 476 土坑)や、西側に隣接する 459 溝からも同時期の遺物が出土している。また、住居域とも係る段丘面上の 11 区 484 溝・486 流路・485 落ち込みからも、遺物(弥生時代後期後半古段階~新段階)が散見している。

この様に、前回調査の2区205土坑出土土器(庄内式中段階~新段階)と、今回調査の6-1区001 溝と前回調査の2区206流路(3区276流路)出土土器(弥生時代後期前半新段階~布留式古段階古相)が、比較的新しい遺構となる。

また、名神高速道路内遺跡の越谷遺跡第 2 地区第 2 遺構面、標高 18.7m 付近において検出された、 15 基余りの土坑群の内の土坑 1(長さ  $2.3 \times$  幅  $0.7 \times$  深さ 0.4 m)と土坑 2(長さ  $3.4 \times$  幅  $1 \sim 1.4 \times$  深さ 0.8 m)から、墓壙かは不明であるが、土坑内から弥生時代後期の土器(弥生時代後期後半古段階 ~中段階)が出土している  $^{16}$ 。他に弥生時代~古墳時代前期の遺構や遺物は無く、検出された土坑以外の遺構も検出されていない。

第 11 層(第 4-1a 層)の水田遺構については、第 15 層上に洪水堆積物の砂礫である第 14 層が、北西から一瞬(図 21 の 3-1 区の範囲では、第 14-1a ~ c 層の直接の大きな 3 波と、周辺の 1-1 区等に堆積物を広げた第 14-2 層の 1 波の、合わせて 4 波)で押し寄せて、厚さ 1 ~ 56 cm余り(前回調査では 1m以上のところも)堆積し、洗刻するという大災害を発生させた。この時の砂礫堆積が、図 40 の沖積リッジ(C)である。この第 14 層上に堆積したのが、第 13 層(第 4-2a 層)である。第 14 層による大きな段差を解消するかのように低地では厚さ 6 ~ 23 cm余りも堆積し、第 14 層高所の凸凹をも平らに埋める。ここでも、畦畔や段差の復旧、第 15・16 層になかった位置に新たな溝の新設もみられる。その位置は、上層の第 11 層水田遺構の溝の位置に近い。復旧と新設とそれに伴う土壌化が、第 13 層では確実に確認できる。この様に水田層は、洪水砂礫堆積層である第 14 層を除き、湿地性堆積層や規模の

小さい砂礫層であっても、土壌化を必ず進めており、水田としての継続を図っていたと確認できる。第 14 層堆積直後から第 13 層の堆積後土壌化されるまでの間は、前回調査の 4 区 611 溝の西側では第 14 層の堆積が薄いので、第 15 層での耕作が継続されていた可能性もあるが、この間が耕作放棄期間である。出土遺物の消長では、摂津Ⅲ~IV -0~2 様式の間が欠如しているので、この間が耕作放棄期間である可能性もある。前回調査では、この第 14-1・2 層(第 4-2b 層)上から弥生時代後期の遺物が出土している。これらのことから、第 14 層の洪水発生時期は、1 区微高地出土遺物が摂津IV -3・4 様式であること、それが洪水後に段丘面上に移動したと考え、第 11 層水田遺構の出土遺物が弥生時代後期後半古段階~中段階であることから、第 14 層内の遺物を摂津IV -3・4 様式以降~摂津 V 様式初めに考えておく。次の第 13 層(第 4-2a 層)が第 14 層の埋め残しを埋め土壌化し、再び第 12 層(第 4-1b 層)の洪水砂が薄く堆積し、次に第 11 層(第 4-1a 層)が全体に厚く堆積して土壌化されるという繰り返しが、弥生時代後期前半に行われていたことが考えられる。

この弥生時代後期~古墳時代前期は、地形環境が著しく変化する時代であった。微高地上もこの影響下にあるため、日常の居住域は前回調査の11・12区等の低位の段丘面上(標高13.6 m付近)や、名神高速道路内遺跡の越谷遺跡等の中位の段丘面上(標高18.7m付近)の西側丘陵上に移し、今日考えられている大型竪穴建物の調査例より明らかとなってきた性格から、集会所・共同作業所的な大型建物と作業空間のみが微高地上(標高9.5m付近)に存在していた状態が想定される。

#### 古墳時代前期~古墳時代中期

古墳時代前期の遺構は、今回調査においても前回調査でも、ほぼ確認できなかった。この間の微高地や段丘面上の集落の動態については不明である。遺物は、今回調査の6-1区001溝で布留式古段階古相の甕と、6-3区包含層にて布留式中段階古相の甕が出土している。その後しばらく空白期が続いて、これに繋がるのが前回調査の微高地上の2区246ピットである。ここでは、古墳時代中期後半のTK23~TK47型式期の須恵器甕や須恵器杯が出土している。この他にも混入と思われるが、前回調査の4区297溝・291溝から古墳時代中期後半の有稜高坏の脚部、第3-1b層から須恵器甕等が出土している。

他に前回調査では、円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪が出土しており、出土した12点中の6点が土師質、残りの6点が須恵質で、古墳時代中期後半~古墳時代後期の川西編年IV期後半~V期にあたる<sup>17)</sup>。当然ながら、段丘面上の越谷遺跡や前回調査の11・12区での出土量が多く、土砂流によって尾山遺跡内に押し流された可能性が高い。

第 11 層(第 4-1a 層)の水田遺構は、この時期のことと考えられる砂礫層によって、再び低い部分が 洪水砂礫第 10 層(第 3-2b 層)によって、 $2\sim 27$  cm余り埋積される。第 10 層の洪水は、今回調査の 1-1 区南北給水溝である 016 溝の東側 007 小畦までで止まり、溝西側への被害は及んでいない。この第 10 層の堆積時期については、出土遺物がなく明確な時期は不明である。

桜井駅跡周辺では、弥生時代以降も庄内式古段階古相~布留式中段階古相の遺物が確認でき、しばらく間を空けて古墳時代中期後半の TK23 ~ TK47 型式期の遺物や、後期後葉の TK43 型式期の遺物が出土し始め、尾山遺跡とよく似た遺物出現様相を示す。

#### 古墳時代後期~奈良時代前期

この時期の遺構・遺物は決して多くはないが、前回調査の11区御所池瓦窯跡1号窯関係の遺構・遺

物がある。微高地では古代の遺構と考えられる 2 区掘立柱建物 3 の柱穴から、古墳時代中期中葉の TK10 型式期の須恵器杯蓋が出土している。今回調査では 1-1 区 5 層から TK217 型式期の須恵器甕が出土している。

御所池瓦窯跡 1 号窯は、飛鳥寺東南禅院・飛鳥池瓦窯と同笵瓦を焼成する窯で、梶原寺・梶原瓦窯、郡家今城遺跡とも同笵瓦が存在する。飛鳥寺東南禅院に住まいした道昭の教化作善活動を行った淀川西岸地域で、同笵瓦の出土することが知られる 18)。窯構造は、ロストル式平窯に通じる過渡的な窯である。1 号窯以外にも窯の存在する可能性がある。1 号窯の操業期間は、飛鳥Ⅲ・IV型式から平城 II ~III型式頃で、7世紀後葉~8世紀前葉と考えられる。また、窯跡内外の関連遺構ばかりではなく、微高地上の2区で241素掘り井戸、91土坑、242・243・245・259土坑(土取り穴ヵ)、231ピット、桁行3間(4.5m)×梁間2間(3.9m)の掘立柱建物3が、7区383溝もこの時期に係る遺構と考えている。本町内には、他にも飛鳥時代後期~奈良時代前期の鈴谷瓦窯(確認2基)があり、その南西に隣接する同時期の御所ノ平遺跡を工房跡と想定している。尾山遺跡においても、1号窯と2区微高地上の井戸・建物・土取り穴等を含め工房跡と考えることもできるが、明確なものではない。今後は、御所池瓦窯跡1号窯の関連遺構の発見が期待される。

この時期の水田遺構は、どの層であるのかは不明である。第 10 層でできた凸凹を埋積し、比較的平らな耕作地とした第 9 層(第 3-2a 層)土壌層の可能性が高い。その後 13 世紀後葉まで、同じ地層での耕作が継続されたことになる。

#### 奈良時代後期~鎌倉時代前期

特に奈良時代後期~平安時代後期の遺構・遺物については、ほぼ実態が掴めない。この時期は、洪水等も少なく耕地も安定し、法的な体制も定まり、耕作地の大規模区画整備(条里)が各地で施工され、尾山遺跡においても条里地割が及んでおり、これに伴う集落並びに耕作民の人的な再編と集約があったものと考えられている。この間、都は平城京から恭仁京へ、さらに長岡京へ、さらに平安京に遷都し、山陽道に近い調査地周辺の環境も大きく変わってきたものと思われる。今回調査では遺構の検出は無かったが、前回調査の3区234落ち込みで、8世紀の須恵器の杯蓋・壷・小型高杯・甕・円面硯と、8世紀末の長岡京期頃と思われる須恵器の杯蓋・杯身、土師器の小甕・高杯がある。さらに、前回調査の1区167池泉北側の211平坦面埋め戻し土から極僅か出土しているのは、9世紀中葉頃の緑釉陶器椀(山城産)が1点、10世紀後葉頃の黒色土器B類椀が1点、11世紀末~12世紀初頭の4C期ての字口縁土師器皿が1点ある。167池泉からも、10世紀後葉~11世紀初の東山72号窯式灰釉陶器椀が1点出土している。2区132井戸からは、11世紀後半~12世紀前半の福建省系白磁碗が1点出土している。この時期までで、継続的な居住をこの微高地上に考えることは難しいが、奈良時代後期~平安時代初期までの様な全く出土遺物が出土していないのとは異なり、散発的ではあるが遺物の出土がみられる。

平安時代末~鎌倉時代前期については、2 区 211 平坦面埋め戻し土から 12 世紀中頃~後半の龍泉窯系青磁皿と同安窯系青磁鉢が各 1 点、12 世紀後半頃の滑石製石鍋が 1 点、今回調査の 6-1 区第 7 層と前回調査の 3 区 271 土坑で、12 世紀末の楠葉型III -1 型式の瓦器椀が各 1 点、他に図 39 の 11 世紀後半~12 世紀代のものとされている軒丸瓦片 1 点と曲線顎の唐草文軒平瓦 2 点が出土している。単独での遺構は検出されていないが、楠葉型III -1 型式期までの間には、この微高地上に何らかの建物か、居住

者の存在があったのかもしれない。しかし、次の型式である 13 世紀前葉の楠葉型Ⅲ -2 型式期、土師器皿の 6B 期の遺物は、この微高地上においては極めて少ない。

## 鎌倉時代中期~南北朝

この時期になると、図 41 の微高地も含め急に遺構・遺物共に増加する。2 区は先述したように、中央部が現代の削平で、深い遺構以外は残存していない。このため、遺構が残るのは  $1 \cdot 2$  区の東側水田畔と西側の山側のみである。他に  $3 \cdot 7 \cdot 8$  区においても同時期の遺構・遺物が検出されている。

2区の遺構には、図 41 下図の 167 池泉(径 3.5 ~ 4 m×深さ 1.9 m、第 1 面深さ 0.9 m)と一連の 装置である 211 平坦面(検出長 12.5 m×幅 2.1 ~ 3.2 m、三和土硬化面)と北側遺構群(123・190 土坑、118・119・221・582 溝、1 区 9 土坑 )、そして南側遺構群(220・585・586・587 土坑、115・ 162・168・217・218 溝)、167 池泉の東側水田畔との間に所在する詳細不明な掘立柱建物 1 (南北 1 間 以上×東西2間以上、N-0°-E)がある。167池泉は、第1面から第3面まであり、第3面の形状は素 掘り井戸状で、これを埋めた第2面上で盛土整地し、第3面上に配石したものと考えられる。第3面 底までの約 1.9m を何故井戸状に掘り再び埋めたかは、当初から湧き水を考慮していたのかは不明であ る。しかし、井戸底に据えられた平石も含め、下層の埋め土内に大型の礫を入れていること、最終掘削 面が湧水層に至っていないことから、この池泉のために当初から掘られたもので、埋め戻すことを前 提に水を溜める池として掘られたものと考えられる。給水源は、579 湧水点と御所池方向からの導水溝 である 582 溝(遣水)である。池泉内には、景石・滝組、石組み護岸と石敷き・植栽(欅・栴檀)等 を施している。排水溝は、北側の 221 溝とその東側延長の 119 溝、南側の 162 溝と東側延長の 115 溝 からなる。北側から南側の池泉に向かう 211 平坦面は、残存延長 13 m以上×幅 2 ~ 3 mで、土間に用 いられる三和土で舗装されている。211 平坦面が終わる突き当りの 221 溝と 582 溝合流点には、蹲踞 風に溝中に曲物を深く据え置き、内側に礫を敷き、曲物の南側に平石2個を置き、水溜の曲物(手水 鉢)を据え置く。池泉に係る建物は、池泉から南東約 16 mに規模不明の掘立柱建物 1 が復元されてい る。しかし、この池泉に最も相応しいのは、南側約 5m に飛鳥~奈良時代前期の掘立柱建物 3(桁行 3 間(4.5m)×梁間 2 間(3.9m)、17.25 ㎡、N-85°-E)とされた建物に思われる。この掘立柱建物 3 と 排水溝の方向は同じであり、規模は今日のほぼ6畳間ぐらいで広くはない。床の痕跡は見つかってい ないが、床のみであれば重量的にも軽いため、平石を置いた石束で事足りるものと思われる。この池泉 に伴う建物であった可能性がある。

167 池泉の出土遺物は、6C・7A~C期の土師器皿、楠葉型Ⅲ-3型式期の瓦器椀、瓦質土器の盤(火鉢)・羽釜・鍋、白磁四耳壷1点、木製品(両口箸5点、折敷底板1点)、石製品(碁石1点、砥石1点)、椀形鉄滓1点等が出土している。211 平坦面や北側・南側遺構群からは、鎌倉時代中期以降の7A~C期の土師器皿、楠葉型Ⅲ-3・Ⅳ-1型式期の瓦器椀、亀山焼の甕・鉢、瓦質土器の盤・鍋・羽釜・壷、東播系の鉢、瓦器の甕・鉢・小皿、福建省系白磁の碗・皿、龍泉窯系青磁の碗、口縁部に赤彩を施す黄釉褐彩陶器の盤1点・鉢1点、鉄製品(釘3点)、動物遺体(馬歯)等が出土している。1区9土坑からは、天目茶碗が2点出土している。

2 区北側の 150・157・159・160 溝は、短期間に同一場所で切り合う L 字状の溝で、7A ~ C 期の土師器皿を含む 167 池泉・211 平坦面と同一時期の遺構である。なお、150 溝から右巻三巴文軒丸瓦が 1 点出土している。

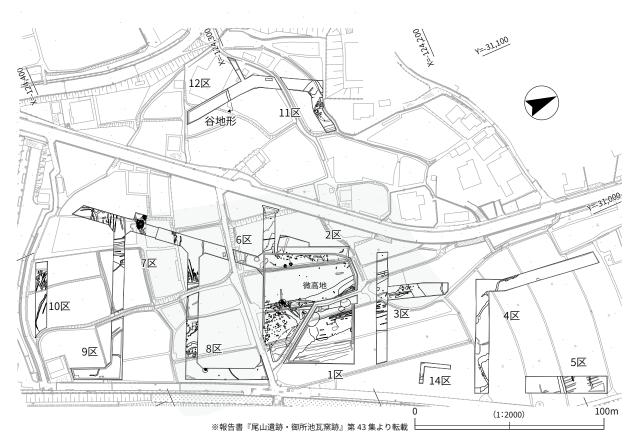


図 41. 鎌倉時代~南北朝時代の微高地上の遺構

1区9土坑は、211平坦面の北側にある土坑で、7C・8A期の土師器皿、楠葉型IV-1型式期の瓦器椀、 瓦質土器の羽釜・鍋、14世紀中葉の瀬戸美濃窯の古瀬戸中期様式IV期天目茶碗A類が2点出土している。

2 区西側の山側からは、131・132 井戸が検出された。131 井戸(径約1.7m×深さ1.6 m)は、最下部に方形横板組1段を置き、その上部の井筒直径を約80 cmとして石積みとしたもので、内底面を石敷きとする。出土遺物には、6C~7C 期の土師器皿、楠葉型IV-1 型式期の瓦器椀、瓦質土器の羽釜・鍋、東播系の須恵器甕・鉢、常滑焼の甕、滑石製石鍋、木製品(毬杖の毬3個)、動物遺体(亀)等が出土している。132 井戸(径1.5~1.6 m×深さ2.8 m)は、結桶7段積みで、最下段のみ結桶板下段に方形の穴を穿つもので、その上部の井筒直径を60~70 cmとして積み上げる。出土遺物には、7B・C 期の土師器皿、楠葉型IV-1 型式期の瓦器椀、瓦質土器の羽釜・鍋・盤(火鉢)、東播系の須恵器甕、青白磁合子、白磁碗、石製品(砥石)、木製品(柄、曲物底板)等が出土している。今回の結桶井戸の築造は7B 期の13 世紀末~14 世紀初頭で、転用品であるから使用時期はもう少し上ることになる。結桶の文献上の初見は延慶2年(1309)『海龍王寺文書』で、絵画資料の初見は弘安元年(1287)『北野天神縁起弘安本』である。結桶の日本への伝来は、早ければ南宋文化の積極的な導入が開始された12 世紀後期から13 世紀初頭とされ、遅くとも禅僧が多数渡来する13 世紀中葉とされているのと良く符合する 190。

3 区では、227・272・279・溝、271 土坑がある。271 土坑は、6C・7A ~ C 期の土師器皿、楠葉型 Ⅲ -1・Ⅳ -1 型式期の瓦器椀、瓦質土器の羽釜・鍋、東播系の須恵器鉢、青白磁合子、白磁碗、石製品(砥石)、灰釉陶器の広口壷、石製品(砥石)等がある。227 溝からは鞴羽口が出土している。

7 区では、375・417・444・453・465 溝、446 落ち込み、378・451 土坑がある。375・417・444・465 溝、451 土坑は 7C 期、378 土坑は 7A ~ C 期の遺構と考えられ、446 落ち込みのみが 8A 期の遺構である。

8 区では、336 溝、柱穴列 1、332・357 井戸がある。332 井戸(径 1.45 ~ 1.65 m×深さ 1.3m)は、7C 期の素掘りの井戸と思われるものである。357 井戸(2.6 × 2 m以上×深さ 3 m)は、最下部に結桶 1 段を置き、その上部の井筒直径を約 60 cmとして石積みとしたものである。出土遺物には、6 C 期の土師器皿、楠葉型Ⅲ -3 型式期の瓦器椀、亀山焼の甕、白磁碗、華南産緑釉陶器盤等が出土している。336 溝は南北溝(幅約 0.6 m×深さ 18 cm)で、その西側に芯々で約 0.8 m離れ、東に 24 度傾く南北方向の柱間 0.74 m等間の柱穴列 1(柵か塀)が 2 重に重なって検出されている。

この時期の水田遺構は、どの層であるのかは不明である。 $14 \sim 15$ 世紀と思われる第 $8 \sim 6$ 層までの洪水砂礫とその土壌化との繰り返しが第5層の土壌層化で終了し、これ以降に大きな洪水災害や堆積がこの地域には及ばなくなる。このため、同じ地層での耕作が継続されたことになる。

大部分の遺構の時期は、土師器編年の  $6C \cdot 7A \sim 7C$  期( $1230 \sim 1350$  年頃)の鎌倉時代中期~南北朝の範囲で、 $1 \times 211$  平坦面直上土器と  $7 \times 446$  落ち込み土器が、8A 期( $1350 \sim 1380$  年頃)の南北朝合体の頃までの土器を含む。

以上の様に、13世紀中葉以降の土地開発は、現代まで続く水利や土地区画に繋がる開発である。近年調査が行われた、高槻市・上牧遺跡の発掘調査<sup>20)</sup>においても、13世紀に始まる遺構群の存在が明らかとなっている。しかし、14世紀後半には遺物量も減り、微高地上の遺構群も消滅する。

## 室町時代以降

室町時代になると、微高地上の居住者の痕跡は無くなり、埋め戻され、微高地上にも耕作が及んでいる。以後、出土遺物も土師器の小皿程度で、殆ど出土しなくなる。以後、尾山遺跡や越谷遺跡の居住域は消滅し、室町期、戦国期の惣村である桜井村に再編されていくものと考えられる。この間の景観は、一面の水田と畑などの耕作地となったようで、その後も第3・4層の堆積はあるが部分的で、近世以降第2層(第1a層)の現代作土まで、大きく変わらなかった。

江戸時代、調査地の所在する桜井村の総石高<sup>21)</sup> は、元和2年(1616)『摂津一国高御改帳』(甲陽文庫蔵本)では488.08石、延宝4年(1676)『摂州村々高書写』(関西学院大学蔵本)で502.50石、享保20年(1735)『摂津国高調』(岡田利兵衛氏蔵本)で502.50石と、近世以降の大きな変化はない。その内訳は、天保5年(1834年)『天保郷帳』(国立公文書館蔵本)によれば、桜井村の総石高は516.48石で漸増し、内訳は高槻藩領が503.22石、庄屋太左衛門屋敷除地が1.05石、若山社領が10.156石、現存寺院である浄土宗・宝憧(幢)寺領が0.18石、臨済宗・宝蔵(城)庵領が0.15石、山崎村に移り廃寺となった日蓮宗・教孝(光)寺領が1.104石、神仏分離により廃された西八王子社(若山神社)別当の天台宗・松本(泉)坊領が0.62石あった。

#### <註・引用文献>

- 1) 大塚 隆・川端博明ほか『越谷遺跡他発掘調査報告書-伝待宵小侍従墓・源吾山古墳群-』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書 第2集、名神高速道路内遺跡調査会、1997年
- 2) 後川恵太郎『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第43集・公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第

316 集、島本町教育委員会・(公財) 大阪府文化財センター、2022 年

- 3) 前掲1)、58-63頁
- 4) 久保直子・木村友紀・大西晃靖『大藪浄水場送水施設整備 (土木・建築)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-広瀬遺跡発掘 調査報告書-』島本町文化財調査報告書第 24 集、島本町教育委員会、2013 年
- 5) 中川和哉「縄文時代」『下植野南遺跡』京都府遺跡調査報告書第 25 冊、㈱京都府埋蔵文化財調査研究センター、86-87 頁、 1999 年
  - 藤井 整「縄文時代の遺構と遺物」『下植野南遺跡Ⅱ』京都府遺跡調査報告書第 35 冊、㈱京都府埋蔵文化財調査研究センター、 15-19 頁、2004 年
- 6) 中川和哉・大本朋弥「縄文時代の遺物」『長岡京跡右京第 927 次・伊賀寺遺跡発掘調査報告書』京都府遺跡調査報告書第 136 冊、 脚京都府埋蔵文化財調査研究センター、42-63 頁、2010 年
  - 木村啓章「縄文土器」『長岡京跡右京第 941 次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告書』京都府遺跡調査報告書第 137 冊、(劇)京都府埋蔵文化財調査研究センター、65-76 頁、2010 年
- 7) 野々口陽子『長岡京跡右京第 541 次・脇山遺跡発掘調査概要』京都府遺跡調査概報第 77 冊、 側京都府埋蔵文化財調査研究センター、25-40 頁、1997 年
- 8) 林日佐子「突帯文土器の分類と変遷」『池島・福万寺遺跡 5』 (財大阪府文化財センター調査報告書第 179 集、(財大阪府文化財センター、2008 年
- 9) 前掲2)、117-121頁
- 10) 内田真雄ほか『安満遺跡発掘調査報告書-雨水貯留施設・高槻子ども未来館建設に伴う発掘調査-』高槻市文化財調査報告書 第 37 集、高槻市、2020 年

高槻市立今城塚古代歴史館『弥生時代開始期の近畿-縄文人と弥生人の共生-』2022年

- 11) 一瀬和夫・岡田 賢ほか『桜井駅跡発掘調査概要』大阪府教育委員会、2007 年
- 12) 中津 梓『平成 17 年度都市計画道路桜井駅跡線(駅前広場)整備に伴う桜井駅跡遺跡発掘調査概要報告』島本町文化財調査報告 書第9集、島本町教育委員会、2006 年
- 13) 中津 梓『広瀬地区・青葉地区遺跡範囲確認調査概要報告』島本町文化財調査報告書第33集、島本町教育委員会、2007年 岩崎 誠『青葉遺跡 B 地点発掘調査概要報告』島本町文化財調査報告書第33集、島本町教育委員会、2018年
- 14) 辻 康男「広瀬遺跡の自然科学分析」島本町文化財調査報告書第 24 集、島本町教育委員会、2013 年、21-26 頁 ・国土地理院(1975)「治水地形分類図(淀)」を基本図に、辻康男氏が空中写真判読結果を加えて作成した「遺跡周辺の地形 分類図」に、報告者が尾山遺跡・青葉遺跡・桜井駅跡遺跡、沖積リッジ(A)等を新たに加えた図である。
- 15) 前掲 2)、図 103, 116 頁
- 16) 前掲1)、図35、50-58頁
- 17) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、1978 年
- 18) 網 伸也「畿内の古代寺院と道昭」『古代山崎の架橋と造寺』2019 年 奈良文化財研究所編『飛鳥池遺跡発掘調査報告書』奈良文化財研究所学報第 71 冊、2021 年
- 19) 石村真一「桶の伝来時期と初期形態」『デザイン学研究 BULLETIN OF JSSD』Vol.43、No.5、日本デザイン学会、1997 年 石村真一「鎌倉後期に使用された桶の造形性」『デザイン学研究 BULLETIN OF JSSD』Vol.44、No.1、日本デザイン学会、1997 年

鈴木康之「日本中世の桶(前編・後編)」『ひろしまの遺跡』第87・88号

三浦純夫「結桶の復元と普及」『考古学と技術 』同志社大学考古学シリーズIV、1988 年

- 20) 笹栗 拓・初宿成彦『上牧遺跡』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 313 集、(公財) 大阪府文化財センター、2021 年
- 21) 前掲19)、表16、341頁及び、木村 礎『旧高旧領取調帳 近畿編』日本史料選書11、1975年

# 第2節 尾山遺跡の水田遺構の変遷と特徴について

尾山遺跡では、前回調査<sup>1)</sup>で7面の土壌層を検出し、今回調査ではこの内の第17層・第11層・第5層の3面の水田遺構について検出を行った。ここでは、更に下層である第19層においては、明確な水田遺構は検出していないが、堆積範囲を比較的把握できているので、第19層の水田遺構についても予察を述べ、それぞれの灌漑システムを推測・復元し、特徴を述べる。

## 1. 第19層(第6a層)の水田遺構(図42)

第 19 層(第 6a 層)は、縄文時代晩期~弥生時代前期の水田土壌層であるが、前回調査でも今回調査でも水田遺構は検出していない。ただ、前回調査ではその堆積範囲を比較的明確に把握されているので、その堆積範囲を微高地範囲と共に図 42 に示した。この第 19 層の堆積範囲は、第 4 章第 2 節の東西柱状図で予測した谷状地の範囲でもある。この南北方向の谷状地の水源は、北については不明な点も多いが、小字「水上」池から小字「応堂寺山」への谷に繋がる流れで、途中段丘面上の西側から小字「越谷」の谷の流れを加えて南側に開く。その範囲は、北限は不明であるが、南限は微高地を形成する沖積リッジ(A)に当たるまでと考えられる。谷状地の幅は、北側の最も狭い所が約 6 m、微高地東側の広い所で約 32 mを測る。確認された延長は、約 170m であるが、図 40 からも最大に想定しても延長は 250 m以内である。

この水田の形状は、近世の主に関東や東北の丘陵地で浸食されてできた谷地形の湿地をいう、「谷」「谷戸」「谷津」「谷地」と呼ばれているものや、西日本の「迫」・「佐古」等の「谷水田」2)とも少し異なる。ここでは、谷口を出た流路が広い沖積地内に出て下刻し、周辺と余り段差のない狭い谷状地内に堆積した堆積物を土壌化して作られた水田で、本来の台地型の谷水田とは異なるため「谷状水田」としておく。さて、この谷状水田には常に水が入り込むため、水を給水するよりは排水することが必須であり、上流部で堰を設けて迂回水路を作り、水の方向や流入量を制御するとともに、池や溜井を作って水温調整を行っていた可能性も考えられる。水温調節については、谷口から最も狭い部分までが約260mの距離があること、水田が南側斜面に面していて日照時間が長い所が選ばれていることに気付かされる。排水溝は、谷の中央か壁際に水路を設けていたと推測される。水田畦畔は、谷水田同様に谷方向に直交する小畦畔が設けられていたか、常に湧き水が激しいようであれば、山葵田の様に無いか最低限の小畦で良かったのかもしれない。この時期の居住地は、遺構や遺物の散布状況などから、前回調査の1区微高地東畔の、谷状水田に隣接する生産地に近い場所が想定される。

一般的に谷水田は、湿田であり生産性が低く、普通の乾田よりは収穫量が少ないことはよく知られている。さらに、稲は水が必要な時期に不足すると、障害を受けやすい植物であると共に、日中の水温が  $25^{\circ}$ Cを切ると出穂の遅れや不稔の発生が生じると言われる  $^{3}$ 。このことに対処できた場合、谷状水田は、生産量には限界があるものの、灌漑システムの構築に必要な労働力や労働時間も少なくて済み、水田の管理や収穫も少ない労働力ででき、容易に水田経営が開始・継続できる。水の中には上流の草木の栄養分や砂が常に流れてくるため、味の良い生産物もできる。

弥生稲作開始期の水田は、近隣の高槻市・安満遺跡 <sup>4)</sup> 例を上げるまでもなく、大規模な灌漑システムを当初から備えているように思われがちであるが、弥生時代早期の唐津市・菜畑遺跡 <sup>5)</sup> では谷口に設けられた谷水田である。近年、「流域が狭く限定的な丘陵小谷の湧水や渓流を水源とする・・タイプ」

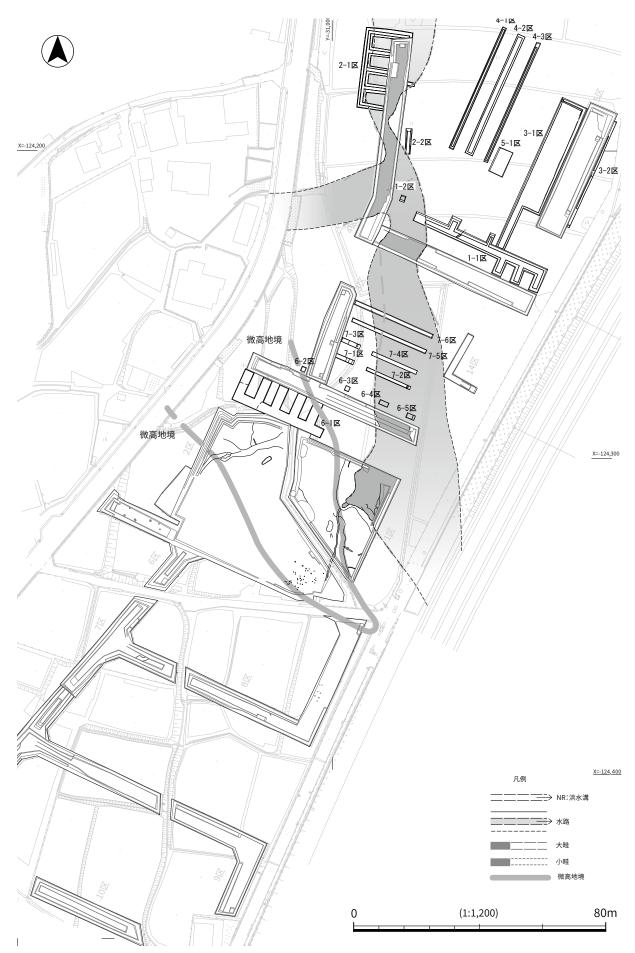


図 42. 第 19 層上面の微高地と水田範囲想定図

と「地域を越えて大きな流域を有する・・河川を水源とする・・タイプ」の 2 形態の灌漑システムがあり、背後の集団関係にまで迫る考えが示されている 6 。この考えが成立するには、2 形態の詳細な時間的前後関係が不明で同時進行なのか時間差によるものなのか、耕作主体の系譜を示すものやその集落との関係や規模が示されていない点など、今日まで残る谷水田を現在も見ることができるので、まだまだ解決すべき問題が残っているように感じる。

ここでは弥生稲作開始期の水田開発の一つに、尾山遺跡の様な「谷状水田」が存在していたのではないかと予察を述べた。この様に水田遺構としては検出できていないが、この尾山遺跡の第19層(第6a層)水田遺構は、淀川流域を遡る極めて重要な弥生時代早期/前期の水田遺構の一例であると考える。

## 2. 第 17 層(第 5a 層)の水田遺構(図 43)

第17層(第5a層)は、弥生時代中期前葉以降の水田土壌層である。水源は第19層と同じで、小字「水上」池から小字「応堂寺山」への谷からと、その北側の小字「西浦」の谷から、途中段丘面上の西側から小字「越谷」の谷の流れが加わる。その範囲は、不明な点もあるが、北限は谷口である小字「垣内」から、南限は微高地を形成する沖積リッジ(A)を越えて小字「バンド山」にまで広がり、東限は沖積リッジ(B)までと考えられ、少なくとも南北が400m余り、東西が300m余りと考えられる。

水田区画は、小字「水上」池から小字「応堂寺山」への谷を水源とする南北方向の中央給排水溝と、検出できていない小字「西浦」の谷を水源とする、沖積リッジ(B)西側の南北方向の東側給排水溝からなり、その他に小字「越谷」の谷を水源とする西からの水源を2本加える。この間を、等高線に平行な東西方向の小畦(縦畦)が約3m間隔で作られ、滞水を考慮して等高線に対し直角に小畦(横畦)が阿弥陀籤状に配されている。このため、水田小区画は、東西に長方形が連なった形となり、小畦(横畦)を基本的には切ることで灌漑ができる。配水は地勢の高い東側給排水溝から、排水を主とする中央給排水溝へと、段丘面下では西側から中央給排水溝に流される。また、途中に排水を主目的とする排水溝が、中央給排水溝から枝分れするように設置されている。水分はシンプル且つ、大規模である。

この阿弥陀籤状畦畔は、弥生時代前期には既に採用されており、御所市の中西遺跡・秋津遺跡<sup>7)</sup>で 検出された 40,000 ㎡以上の全てがこの畦畔であった。尾山遺跡では弥生時代前期の水田遺構が検出で きていないが、残存していたならばこの阿弥陀籤状畦畔が検出されていたものと推測される。

## 3. 第 11 層(第 4-1a 層)の水田遺構(図 44)

第 11 層(第 4-1a 層)は、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の水田土壌層である。水源は第 17 層と同じで、小字「水上」池から小字「応堂寺山」への谷からと、その北側の小字「西浦」の谷から、途中段丘面上の西側から小字「越谷」の谷の流れが加わる。その範囲も第 17 層と同じで、北限は谷口である小字「垣内」から、南限は微高地を形成する沖積リッジ(A)を越えて南側にまで広がり、東限は沖積リッジ(B)までと考えられ、少なくとも南北が 800 m余り、東西が 300 m余りに広がっていると考えられる。

水田区画は、小字「水上」池から小字「応堂寺山」への谷を水源とする南北方向の中央給排水溝 (排水が主)と、小字「西浦」の谷を水源とする南北方向の東側給排水溝(給水が主)、さらにこの間に 南北方向の専用の給水溝と専用の排水溝があり、東側では分岐型幹線<sup>8</sup>となっているようである。さ

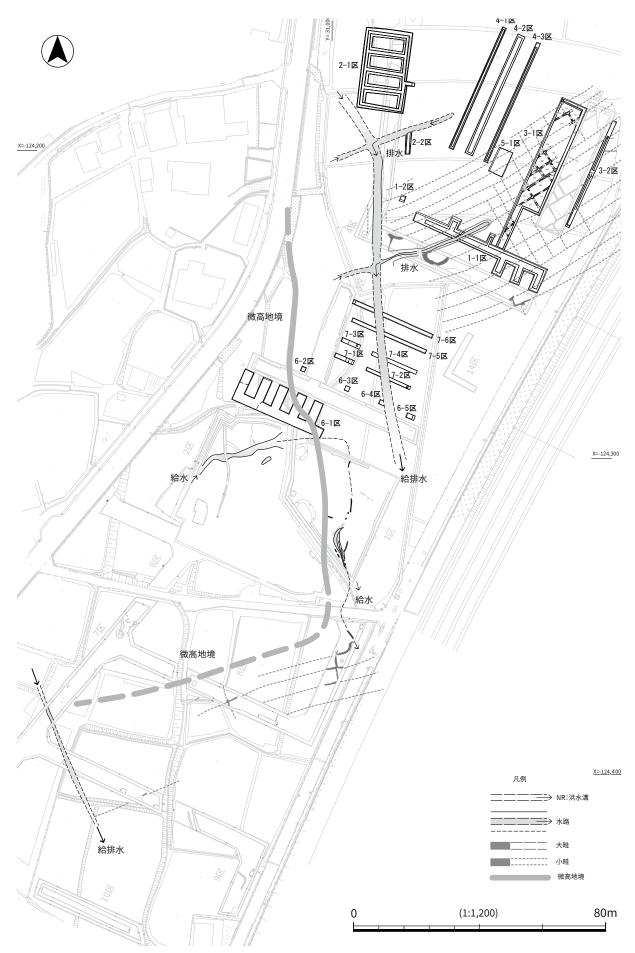


図 43. 第 17 層上面の微高地と水田遺構想定図

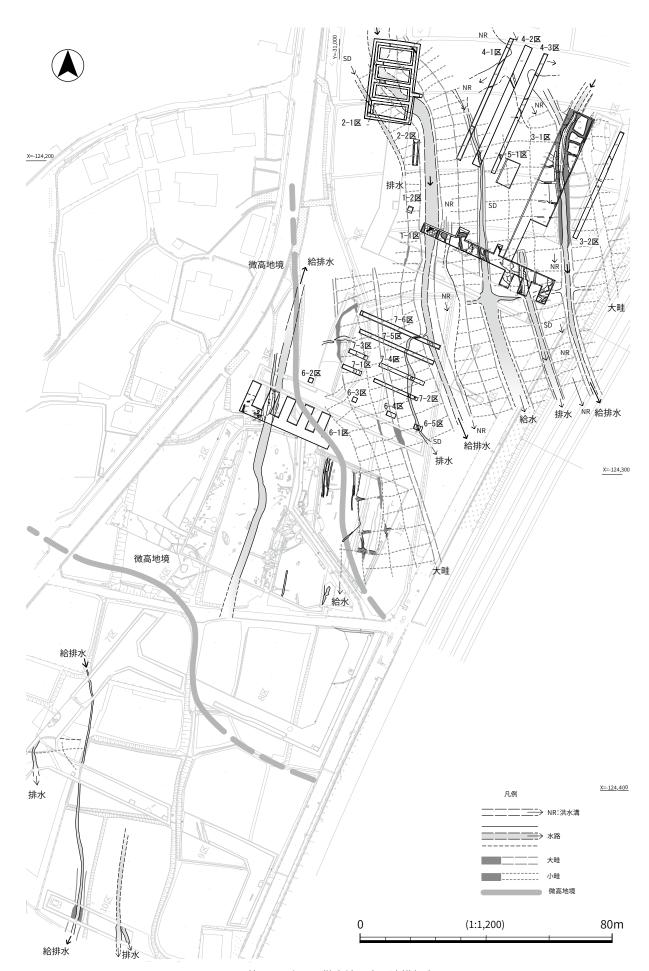


図 44. 第 11 層上面の微高地と水田遺構想定図

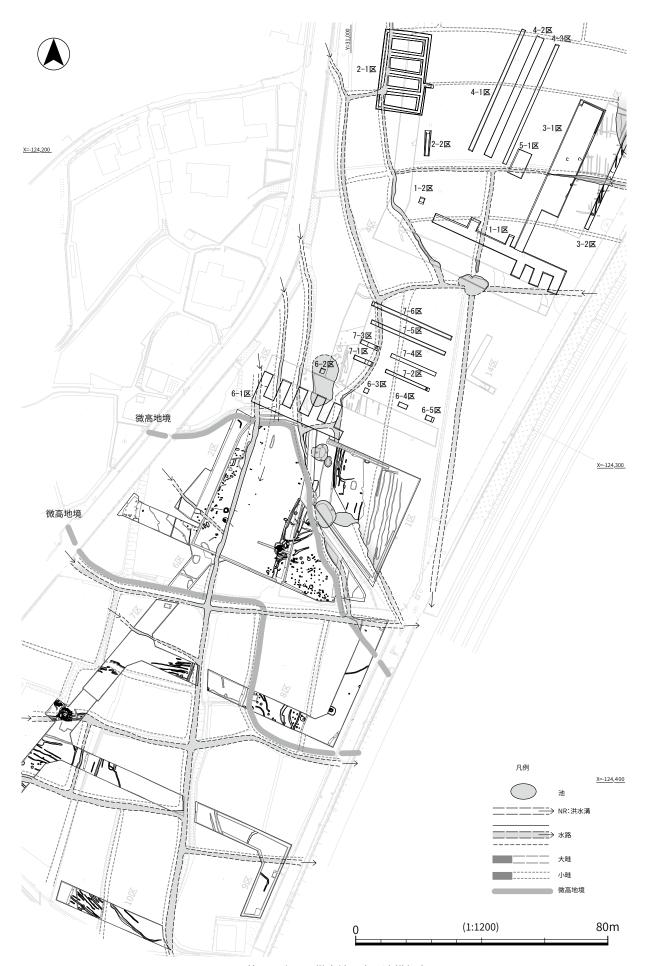


図 45. 第 5 層上面の微高地と水田遺構想定図

らに、これらの溝は両側に大畦や小畦が並走しているが、大畦のみが南北方向に設けられたものもみられる。小畦は、給排水溝の間に設けられ、東西方向に小区画水田  $1 \sim 3$  枚の水田ブロックが設けられ、これが灌漑ユニットとなる 9。給水は給排水溝や給水溝の畔に小口を切り行われる。配水は基本的に東西方向の 2 枚か 3 枚の水田間で行われ、南側の小畦を切り排水溝から排水される。水分は複雑な灌漑水路網の整備により給水と排水が分化し、広範囲に対応している。最も地形に対応した、高度な給排水網を駆使した水田といえる。

## 4. 第5層(第3-1a層)の水田遺構(図45)

第5層(第3-1a層)は、13世紀中葉以降の水田土壌層である。水源はこれまでと同じで、小字「水上」池から小字「応堂寺山」への谷からと、その北側の小字「西浦」の谷からくるもの、さらに段丘面上の西側から小字「越谷」の越谷池と御所ヶ池の流れが加わる。その範囲は、北限は谷口である小字「垣内」から、南限は「八幡ノ脇」まで、東限は西国街道付近までと考えられる。

調査地の地形は、西から張り出す段丘裾と、東側の沖積リッジの間を、緩い南側傾斜の沖積地が占めている地形である。水田区画は、これまでの自然地形に合わせてできていた道や河川に、条里型の区画を加え、新旧が交差する。各水田は、1区画内の耕作面積を大きくするため、下手を高く上げて、段下に給排水の溝を作るものに変更されている。溝の交点や水係りの悪い所では、水溜めの溜井や池が作られている。水分は、これまでの北側からの灌漑システムから脱却し、段丘面上の新たな灌漑システムを入れて、より安定したものとなった。この灌漑システムは、その後も大きく変化はなく、今日まで受け継がれてきた。

なお、周辺の条里 <sup>10)</sup> は、島上郡内にある N-8.5°-E の島本町域と正南北の高槻市域(島下郡の茨木市域も連続する)では主軸を異にしているが、条里呼称は同一で島本町山崎の北東端を起点として条が西に進み、里は各条の北端から南に進み、坪は北東端から西に進む千鳥式である。調査地周辺の復元される条里呼称では、2条2里と2条3里内に入る。桜井村と東側の広瀬村の大字境は、現況の西国街道ではなく、2条2里25坪と26坪境の西国街道との接点から、条境を一直線に南の高槻市まで延びる、極めて計画的な大字境となっている。

## <註・引用文献>

- 1) 後川恵太郎『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第 43 集・公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 316 集、島本町教育委員会・(公財) 大阪府文化財センター、2022 年
- 2) 浜田晋介「弥生集落と谷」『日本考古学』第24号、劂日本考古学協会、75-96頁、2006年
- 3) 角田公正「水温と稲の生育・収量との関係に関する実験的研究」『農業技術研究所報告』11 号、農林省農業技術研究所、75-174 頁、1964 年
- 4) 内田真雄ほか『安満遺跡発掘調査報告書-雨水貯留施設・高槻子ども未来館建設に伴う発掘調査-』高槻市文化財調査報告書 第 37 集、高槻市、2020 年
  - 高槻市立今城塚古代歴史館『弥生時代開始期の近畿-縄文人と弥生人の共生-』2022年
- 5) 唐津市教育委員会『菜畑遺跡』1982 年 山崎純男「北部九州における初期水田」『九州文化史研究所紀要』第 32 集、九州大学九州文化史研究施設、1987 年
- 6) 京嶋 覚「鳥取県米子平野における弥生時代水田の灌漑システムと集団関係」『鳥取県立博物館 研究報告』第 58 号、鳥取県立

博物館、2021年

- 7) 岡田憲一・絹畠 歩『秋津遺跡 I (下層編)』橿原考古学研究所調査報告書第 128 冊、橿原考古学研究所、2021 年 岡田憲一・金原正明「中西遺跡・秋津遺跡の弥生時代前期水田遺構の変遷とその特質」『考古学論攷』45 号、21-38 頁、2022 年
- 8) 大庭重信「近畿地方における弥生時代の水利関係と水田構成の変遷」『待兼山論叢』史学篇 47、27-44 頁、2013 年 大庭重信「西日本弥生時代の灌漑システムの変遷」『弥生・古墳時代の農耕と集団構造』(㈱同成社、81-110 頁、2022 年
- 9) 井口智博「弥生時代における水田開発・経営の動態」『池島・福万寺遺跡』2、分析・考察編、㈱大阪府文化財センター調査報告書第79集、㈱大阪府文化財センター、2002年

井口智博「総括」『池島・福万寺遺跡』10、闽大阪府文化財センター調査報告書第 211 集、闽大阪府文化財センター、2011 年 10) 島本町史編さん委員会『島本町史』本文篇、177-192 頁、1975 年

#### 第3節 6-1区 001 溝出土の弥牛時代後期後半から古墳時代初頭の搬入土器について

#### 1. 6-1 区 001 溝出土土器の概要

今回調査した尾山遺跡 6-1 区 001 溝からは、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器が、比較的まとまって出土した。

6-1 区 001 溝は、前回調査 <sup>1)</sup> では 2 区 206 流路と、延長部分が 3 区 276 流路として、報告がなされている。そのうち 2 区 206 流路からは、14点の土器と安山岩の叩石 1点が報告されている。今回調査では、図示可能な遺物 80点の実測を行ったが、そのうち 001 溝から出土した遺物は 53点と全体の約66%にのぼる。器種の内訳は壺 16点、甕 27点、高杯 3点、鉢 7点である。前回調査でも、器種の内訳は壺 3点、甕 9点、高杯 2点、鉢 1点、叩石 1点であり、器種別の出土状況は、甕が多い。弥生の一般集落の器種比率 <sup>2)</sup> は、壺、甕、高杯、その他土器の比率が、4:4:1:1とされており、今回の出土比率からも高杯等の祭祀関係の遺物の出土も少ないことから、一般集落の出土傾向と思われる。時期は弥生時代後期前半の遺物も僅かに見うけられるが、主体を占めるものは弥生時代後期後半から庄内式期の土器であり、廃絶は布留式古段階古相である。搬入品に関しては、今回調査での近江系 3点、河内系 2点であったことから、全体数からは 1割にも満たない。前回調査時は、この溝から搬入品の報告はなく、全体でも 4点の報告のみであった。

尾山遺跡が同時期の周辺遺跡と比べ、搬入品の数量が少ない理由について、当該時期の周辺の遺跡 と比較検討してみたい。

#### 2. 周辺の様相

比較対象遺跡としては、図 46 の尾山遺跡の所在する摂津国(北摂地域)、近接する山城国(南部)、河内国(北河内)で、搬入土器について言及されている遺跡を抽出する。

#### 【摂津国】

#### 越谷遺跡 3)( 島本町 )

北摂山地から派生する桜井丘陵の東端部に位置する。尾山遺跡の北西に位置する。縄文時代から中世に至る複合遺跡である。第2面の土坑から弥生時代後期の土器がまとまって出土している。

#### **桜井駅跡** 4)( 島本町 )

北摂山地を源流とする高川や越谷川、 東側に流れる淀川の沖積作用によって 形成された低地に位置する。尾山遺跡 の東側に位置し、北側には国史跡桜井

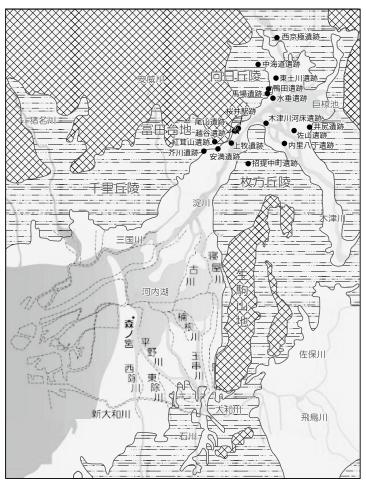


図 46. 弥生時代後期後半から古墳時代初頭の比較対象遺跡位置図

駅跡がある。本町と大阪府により大規模な調査を行い、縄文時代から中世に至る複合遺跡である。この うち大阪府の調査のなかで、第6面において弥生時代後期の土器が出土している。遺物分析もされてお り、搬入土器の少ない北摂的な様相が見られるとしている。

#### **上牧遺跡** 5)( 高槻市 )

井尻遺跡の北に位置する。西側に旧淀川の三日月湖である内ヶ池があることから淀川の自然堤防上に位置する。弥生時代中期から近世に至る複合遺跡である。弥生時代後期の遺構は無く、一時期生活痕が断絶していたものと思われる。古墳時代には、この地域の中核集落として形成していた。古墳時代初頭の竪穴建物は31棟、掘立柱建物は屋内棟持柱建物を含む11棟が検出されている。搬入土器に関しては、1397点の報告のうち230点26.8%が搬入土器とされる。東は駿河の大廓式から東海系、近江系、大和系、河内系、北近畿系、山陰系、瀬戸内系からの搬入がみられるが、主に西日本からの搬入が多いとされる。笹栗氏の分析のでは、報告書掲載外の遺物も考慮すれば、1割程度は搬入土器ではないかとしている。

#### 井尻遺跡 7)(高槻市)

上牧遺跡の南に位置する。上牧遺跡と同じく淀川及び北摂山地から東流する小河川の沖積作用によって形成された自然堤防上に位置する。現在までに3次の調査が行われ、3次調査では、古墳時代前期の竪穴建物が4棟と溝2条が検出された。19点の遺物が出土し、笹栗氏の分析<sup>8)</sup>では、出土遺物の12点が搬入土器とされる。

#### **安満遺跡** 9)( 高槻市 )

上牧遺跡の南側に所在する。安満山と紅茸山の境目成合谷を流れる桧尾川の扇状地に位置する。縄文時代晩期から中世に至る複合遺跡である。そのうち弥生時代後期から古墳時代初頭の土器 289 点について報告がされ、搬入品としては、壺 3 点と甕 17 点については、近江・山城との関係について触れられており、そのほかに瀬戸内の壺が 1 点、甕が 2 点の報告がされているほか、本文中には東海系の土器の存在もわずかながら報告されている。1%程度の割合で河内系の搬入が報告されている。

#### 紅茸山遺跡 10)(高槻市)

安満遺跡の北西に位置する。高槻丘陵の南端紅茸山に位置する。弥生時代から奈良時代に至る複合遺跡である。弥生時代から古墳時代初頭には、18 基の竪穴建物と掘立柱建物、5 基の方形周溝墓が検出され、高地性集落とされる。森岡氏によって、再検証され、そのなかで森岡氏<sup>10)</sup> は近江系及び河内系の搬入土器がわずかながら見られると報告を行っている。

#### **芥川遺跡** <sup>11)</sup>( 高槻市 )

高槻丘陵の縁辺部で芥川の形成した扇状地と淀川低地と呼ばれる沖積低地に近接地に位置する。縄文時代後期から弥生後期にかけての複合遺跡である。そのうち弥生時代後期には、多角形竪穴建物なども検出されている。搬入土器についても検討が行われ、尾張系、河内系、近江系、山陰系、瀬戸内系、四国系の搬入土器が報告をされている。近江系に関しては、模倣土器も見られるとしている。溝から出土した遺物から比率が産出されており、その比率はおおむね2%弱から1%の範囲であるとされている。高槻市内の当該時期の遺跡ではおおむね1%未満、南部の芝生遺跡は約5%を超えるとし、芝生遺跡が5%を超えることに関しては、地理的要因があるのではないかとしている。

#### 【河内国】

#### 招提中町遺跡 12)( 枚方市)

淀川に注ぐ船橋川、穂谷川に挟まれた交野台地の穂谷川左岸に位置している。弥生時代から中世の複合遺跡である。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては竪穴建物と土坑が確認されている。弥生時代中期に遺跡は盛行し、この時期には遺構数は減少するようである。床面積 60 ㎡を超える竪穴建物を検出しているが、ほかの建物から離れること、出土遺物にも特殊遺物は見られず、出土遺物の傾向は一般集落と様相は変わらないとされている。報告書の中において、搬入品土器について市内出土の出屋敷遺跡と招提中町遺跡の搬入土器について検討がされている。総数等は不明ながらも山陰系の土器のほか近江の手焙り土器なども確認できる。他地域からの搬入、河内系の土器については、わずかながら確認されている。

#### 【山城国】

#### 西京極遺跡 13)( 京都市)

桂川左岸に位置し、御室川の開析を受けた丘陵の先端部にあたる。弥生時代から中世に至る複合遺跡である。第4面において、自然流路と溝が検出されている。弥生時代中期の土器は、搬入品の割合が30%を占めるのに対し<sup>13)</sup>、後期の搬入品は摂津方面の土器の搬入が無くなり、全体的に搬入土器の比率は減少傾向<sup>14)</sup>にあるようである。

#### **水垂遺跡** <sup>15)</sup>( 京都市 )

桂川右岸に位置し、桂川の後背湿地上に位置する。縄文時代から中世に至る複合遺跡である。弥生時代後期に関しては、遺構・遺物は少ないものの古墳時代の遺構・遺物は爆発的に増加する。遺物に関しては、全体でコンテナ箱に 900 箱を超える遺物が出土しているが、このうち古墳時代の遺物は 600箱を超える。搬入遺物にも報告がされており、河内系の遺物が、半数を占め、そのほかに東海系・近江系・北陸系・山陰系・丹波系のほかに少数であるが、大和系、瀬戸内系、讃岐系の土器が見られる傾向にあるとされる。その後、甕型土器の構成比率の類型化を行った田中氏 16 によれば、水垂遺跡の 27%が河内系、3%が大和系庄内甕であるとしている。

#### 中海道遺跡 17)( 向日市 )

丹波高地から派生した向日丘陵の東側に形成された段丘上に位置する。現在までに70次を超える調査が行われ、弥生時代から近世至る複合遺跡である。庄内式期の四面廂付掘立柱建物が検出されている。弥生時代から古墳時代にかけての搬入土器については複数の検討が行われ、中海道遺跡7次調査の中では、河内系、近江系、東海系、北陸系、丹波系の搬入が報告され、その内訳は図化40固体中15個体にのぼり、比率は38%を示すとされる。

#### **東土川西遺跡** <sup>18)</sup>( 向日市 )

桂川右岸に位置し、桂川に流入する小河川の沖積作用によって形成された微高地上に位置する。弥生時代から長岡京期における複合遺跡である。自然流路から出土した弥生時代から古墳時代初頭の土器群について、古くは國下氏<sup>19)</sup>が、その後、田中氏<sup>20)</sup>により再整理が行われている。搬入土器については、1206点の遺物が報告され、そのうち236点19.6%の土器が、搬入土器とされる。内訳は近江系が、143点と約65%を占め、52点23.5%を河内系が占め、そのほかに播磨系、北近畿系、東海系、吉備系、摂津系、讃岐系が続く。

#### **鴨田遺跡** <sup>21)</sup>( 向日市 )

長岡京市馬場遺跡より北に位置する。小畑川の旧流路右岸に位置し、小畑川の沖積作用によって形成された扇状地の先端部分にあたる。弥生時代末から中世に至る複合遺跡である。弥生時代から古墳時代初頭の土器の検討を行った山本氏の分析<sup>21)</sup>によれば、庄内式期には、河内系の甕が多く含まれるほか、布留式期には大和の影響を受けた土器生産が行われ、山陰系技術も早い時期から導入されたとしている。しかしながら、そのほかの地域からの搬入は少ないとしている。23点の搬入土器が抽出され、その内訳は河内系が6点、山陰系6点、東海系5点、播磨系4点、阿波系2点とされている。

#### 馬場遺跡 22)(長岡京市)

向日市鴨田遺跡より南に位置する。小畑川の沖積作用によって形成された扇状地に位置する。弥生時代から中世に至る複合遺跡である。弥生時代末から古墳時代初頭にかけては、竪穴建物や井戸と言った居住域と方形周溝墓群が検出された墓域に分かれる。搬入土器は山本氏の分析  $^{23}$  によれば、3 点確認できるとしている。その内訳は河内系 2 点、吉備系 1 点である。そのほかにも、調査を担当した山本氏  $^{24}$  は、3 点の山陰系土器のほかにも何点か確認できるとしている。

#### **内里八丁遺跡** <sup>25 · 26 · 27)</sup>(八幡市)

本調査地より淀川を挟み対岸、木津川の沖積作用によって形成された自然堤防上に位置する。現在までに20次を超える調査が行われ、弥生時代前期から中世に至る複合遺跡である。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては、水田と方形周溝墓、竪穴建物群が検出されている。搬入品については、3回の土器検討が行われている。初回の報告<sup>25)</sup>では、216点の遺物の報告がされており、搬入品の内訳は讃岐系の壺が2点、山陰系・播磨系・東海系が各1点、甕は河内系6点、播磨系3点、山陰系2点、北陸系・吉備系が各1点である。鉢は丹波系4点、近江系1点である。器台は近江系から東海系4点、丹波系から丹後系が3点である。搬入品の割合は約14%である。2回目の報告<sup>26)</sup>では、432点の遺物の報告がされており、搬入品の内訳は近江系の壺が7点、讃岐系1点、甕は河内系1点、大和系・山陰系各2点、鉢は丹波系5点、近江系1点である。器台は近江系から東海系1点、丹波系から丹後系4点である。手焙り形土器2点。搬入品の割合は約6%である。3回目の報告<sup>27)</sup>では、307点の遺物の報告が行われており、搬入品の内訳は讃岐系の壺が3点、近江系から東海系が7点、東海系が6点、山陰系が1点。甕は河内系2点、近江系2点、山陰系9点、北陸系4点である。高杯は近江系から東海系4点、東海系2点、山陰系2点、北陸系1点である。器台は近江系から東海系、北陸系が6点である。手焙り形土器3点。搬入品の割合は約16%である。

#### 木津川河床遺跡 28・29)(八幡市)

本調査地より淀川を挟み対岸、内里八丁遺跡の北側に位置する。木津川・宇治川・桂川の三川が合流する地点にあり、京都府久御山町の木津川大橋にはじまり 4km下流の京都府八幡市御幸橋に及ぶ広範囲の遺跡である。木津川・宇治川・桂川をはじめとする大小の河川の沖積作用によって形成された低湿地の自然堤防上に位置する。現在までに 32 次を超える調査が行われ、弥生時代後期から中世に至る複合遺跡である。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落跡が検出されている。搬入品については、2 回の土器検討が行われており、初回の報告 <sup>28)</sup> では、甕について言及し、出土総数の 2%が近江系で、25%が河内系とされている。2 回目の報告 <sup>29)</sup> では、讃岐系・山陰系のものも見受けられるが、模倣品であると報告されている。

#### **佐山遺跡** 30)( 久御山町 )

木津川・宇治川・桂川の三川が合流する東部にあり、木津川河床遺跡より東側、巨椋池干拓地及び木津川に挟まれた埋没自然堤防上の微高地に位置している。弥生時代後期から近世に至る複合遺跡である。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落跡が検出されている。弥生時代後期から古墳時代の遺物はコンテナ箱 700 箱に昇るとされ、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器群については、土器編年「佐山式」の標識遺跡である。報告書内で、搬入土器は全体数の 9~ 10%になるとされるが、播磨系・摂津系・南丹系にみられる甕 C 及び近江系との折衷形式の甕については触れられていないため、実数はさらに増加するものと想定されている。

#### 3. まとめ

以上、各遺跡について概観してきた。北摂、北河内、山城南部における弥生時代後期から古墳時代 の搬入土器について、検討を行っている遺跡について抽出を行った。

そのなかで、3地域の中での差異は大きくは見られなかった。高槻市域においては、近年まで搬入土器の比率は低かったものの、近年の調査事例の増加に伴い、様相が変わりつつある。特に地域の中核集落に関しては、おおむね搬入土器の搬入割合<sup>31)</sup> は 15%前後で推移するようである。

拠点集落には、水垂遺跡は桂川、内里八丁遺跡・佐山遺跡は木津川、上牧遺跡は淀川などいずれも 大河川に隣接する。拠点集落では、各地からの人的物的な交流もあり、これを示すかのように搬入土器 などの外来系遺物が多数みられる。一方、京都市・西京極遺跡、枚方市内の遺跡、島本町内の遺跡に関 しては、大河川に注ぐ支流域に位置する小集落であり、直接的影響と間接的影響ぐらいの差があったと 思われる。尾山遺跡と同じ傾向を示す枚方市内の遺跡が、地域のネットワーク内で構成される小集落で あったと考えられることから、尾山遺跡も同様な立ち位置にある小集落であったと推定される。

本町内の当該時期の遺構数はいまだに少なく、一括出土遺物などの時間軸を決定付ける遺物の出土が待たれる。今後の資料の増加に期待したい。

#### <註・引用文献>

- 1) 後川恵太郎『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第43集、(公財) 大阪府文化財センター第316集、島本町教育委員会・(公財) 大阪府文化財センター、2022年
- 2) 濱修「第5章総括第1節 西京極遺跡の弥生土器」『平安京右京六条四坊七町・西京極遺跡』㈱四門、2019年
- 3) 大塚 隆他『越谷遺跡他発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会、1997年
- 4) 小川裕美子「第5章出土遺物」『桜井駅跡発掘調査概要』大阪府教育委員会、2007年
- 5) 笹栗 拓「第6章 総括」『上牧遺跡』(公財) 大阪府文化財センター、2021年
- 6) 笹栗 拓「摂津東部・上牧遺跡と周辺の外来系土器」『古墳出現期土器研究会』第9号、2022年
- 7) 奥村茂輝『井尻遺跡 3』(公財) 大阪府文化財センター、2019年
- 8) 前掲 6)
- 9) 森田克行「第VI章」『安満遺跡発掘調査報告書-9 地区の調査-』高槻市教育委員会、1977 年
- 10) 森岡秀人『庄内式期の高地性集落について』古墳出現期土器研究会、第8号、2021年
- 11) 橋本久和『芥川遺跡』高槻市立埋蔵文化財センター、1995年
- 12) 松尾奈緒子「第 4 章 まとめ」『招堤中町・ $\Pi$ 』 大阪府教育委員会、2005 年
- 13) 前掲 6)

- 14) 辻 広志「第5章 総括第4節まとめ」『平安京右京六条四坊七町・西京極遺跡』㈱四門、2019年
- 15) 木下保明「第5章2 古墳時代」『水垂遺跡・長岡京左京六・七条三坊』(鮒京都市埋蔵文化財研究所、1998 年
- 16) 田中元浩「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号、2005年
- 17) 宮原普一・國下多美樹「中海道遺跡 第7次」『中海道遺跡』 (鮒向日市埋蔵文化財センター、2003年
- 18) 國下多美樹「東土川西遺跡の弥生土器」『向日市文化資料館研究紀要』創刊号、㈱向日市埋蔵文化財センター、1984年
- 19) 田中元浩「東土川西遺跡出土土器の検討」『長岡京・東土川西遺跡・修理式遺跡』長岡京跡発掘調査研究所調査報告書、㈱向日 市埋蔵文化財センター、2003 年
- 20) 松崎俊郎「鴨田遺跡」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第14集、㈱向日市埋蔵文化財センター、1985年
- 21) 山本 亮「古墳出現期の鴨田・馬場遺跡の検討」『古墳出現期土器研究会』第7号、2020年
- 23) 前掲 21)
- 24) 山本輝夫「馬場遺跡」『長岡京市史(資料編1)』長岡京市史編さん委員会、1991年
- 25) 森下衛「第5章 総括第2節 弥生時代後期末~古墳時代初頭の出土遺物と遺構の変遷」『内里八丁遺跡 I』( 脚京都府埋蔵文化 財調査研究センター、1999 年
- 27) 高野陽子 「内里八丁遺跡 第 20 次 発掘調査概要 4」 『京都府遺跡調査概報集』第 116 冊、 (劇京都府埋蔵文化財調査研究センター、 2005 年
- 28) 岩松 保「木津川河床遺跡 昭和 61 年度 発掘調査概要 6」『京都府遺跡調査概報集』第 30 冊、(劇京都府埋蔵文化財調査研究センター、1988 年
- 29) 岡崎研一ほか「木津川河床遺跡 第 32 次 発掘調査報告」『京都府遺跡調査概報集』第 179 冊、㈱京都府埋蔵文化財調査研究センター、1988 年
- 30) 高野陽子「第5章 総括」『京都府遺跡調査報告書 佐山遺跡』第33冊、側京都府埋蔵文化財調査研究センター、2003年
- 31) 前掲 15)、水垂遺跡、前掲 28・29) 木津川河床遺跡に関しては、田中元浩氏の抽出資料では、甕型土器のみ 25%を超える比率 である。総量に対しての比率は出せなかった。

#### 第4節 調査成果の意義

今回の発掘調査では、調査面数の制約等もあったが、主に弥生時代~中世・近世までの遺構と遺物を検出した。今回調査の成果について、簡単にまとめておく。

・第5層、第11層、第17層の水田遺構の検出

第5層、第11層、第17層の水田遺構の特徴については、第2節で詳述し、下層で未検出の第19層の水田遺構についても予察を述べた。この結果、尾山遺跡の弥生時代早期/前期に当たる突帯文土器・弥生時代前期土器の水田遺構が、谷状水田であった可能性を示した。その後、大規模な洪水災害等を何度も受けながら、今日まで水田が継続して営まれてきたことを明らかにした。

・13世紀中葉以降に始まる耕地開発

中世の13世紀中葉以降に始まる耕地開発は、尾山遺跡ばかりでなく、越谷遺跡や桜井駅跡など周辺の遺跡でも同時進行で始まっており、耕地区画や灌漑システムはこの当時から大きく変化していないことも明らかにした。

今後は周辺の調査が進展し、尾山遺跡の全容がさらに明らかとなることを期待したい。

表 7-1. 遺物観察表

番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 焼成	備考
01		4層	土師器	Ш	皿N 11A・B期	(7.2)	1.0			内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体 部~底部指オサエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	16c末~17c前半
02	1-1	5層	須恵器	壷or甕	(TK217 型式)	(16.0)				内面回転ヨコナデ 外面回転ヨコナデ	N6/0 灰	密良	7c中葉
03	1-1	8層	瓦質土器	鍋	7A~C期	(26.0)			底部	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体 部未調整	N5/0 灰	密良	13c後半~14c前半ヵ
04	1-1	001層 ⑦~⑨層	突帯文土器	深鉢					体部 1/8以下	内面摩滅 外面突帯上部に指オサエ の「○」状刻み目を施す、 摩滅	2.5Y7/1 灰白	粗 不良	同部突帯文片のみ。 A-2類の長原式土器 中相
05	1-1	021溝 ②層	弥生土器	小型鉢C	後期後新	(9.0)				内面板ナデ、摩滅 外面ヨコナデ、摩滅	7.5YR7/3 にぶい橙	粗良	底部を欠く、低い平 底ヵ
06	3-1	101溝 ③層	弥生土器	有稜高坏	後期後中	(14.6)			体部	内面タテミガキ 外面口唇部ヨコナデ、口 縁部タテミガキ、皿接合部 ヨコミガキ、皿部タテミガキ	5YR7/3 にぶい橙	密良	
07	3-1	101溝 ③層	弥生土器	獲	後期後 古~中				頸部~体 部 1/8以下	指オサエ→ヨコ板ナデ、摩	7.5YR8/3 浅黄橙	粗良	
08	3-1	101溝 ③層	弥生土器	壷	後期後			4.6	底部	内面ナデカ、摩滅 外面タテハケ、ナデ 底部板ナデ、摩滅	5YR6/4 にぶい橙	粗良	
09	3-1	101溝 ③層	弥生土器	甕	後期後 古~中				頸部~肩 部 1/4	内面板ナデ、摩滅 外面頸部ヨコナデ、体部タ タキ3~4本/cm	5YR6/6 橙	粗 不良	
10	3-2	011池 ①②層	土師器		皿N 13B期	(5.0)	(0.8)	(3.5)	口縁部~ 底部 1/8	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、底 部未調整	17.5YR7/3 にぶい橙	密良	18c後葉
11	3-2	011池 ①②層	土師器	Ш	皿Sb 13B期				口縁部 1/8以下	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体 部指オサエ→ナデ	10YR8/4 浅黄橙	密良	18c後葉
12	3-2	011池 ①②層	磁器	染付丸椀	肥前 (波佐見) 花文染付 V-1期	(10.0)			口縁部~ 体部 1/8	内面ロクロ成形→透明釉 外面ロクロ成形→染付コン ニャク印判	7.5GY8/1 明緑灰	密良	高台径の広い腰張型 の碗で、呉須は鈍く 濁った色をしている。 18c前半
13	3-2	011池 ①②層	磁器	染付丸椀ヵ	肥前 (波佐見) 花文染付 V-1期or V-2期ヵ			(4.2)	底部 4/5	内面ロクロ成形→透明釉 外面ロクロ成形→青磁釉 →染付(花文)、体部下部 1圈線+高台1圏線、高台 内1圏線	10GY8/1 明緑灰	密良	18c前葉~中葉ヵ
14	3-2	011池 ①②層	磁器	染付丸椀ヵ	肥前 (波佐見) 草花文染 付ヵ V-1期or V-2期ヵ			(4.2)	底部 1/2	内面ロクロ成形→透明釉 外面ロクロ成形→青磁釉 →染付(草花文)、体部下 部1圏線+高台2圏線、高 台内1圏線	10GY8/1 明緑灰	密良	18c前葉~中葉ヵ
15	3-2	011池 ①②層	陶器	筒椀	京焼 13B期			(5.6)	底部 1/8以下	内面ヨコナデ→灰釉 外面体部〜底部ヘラケズ リ→灰釉掛け、高台〜底 部露胎	10YR7/2 にぶい黄 橙	密良	18c後葉、信楽4期古 〜新 小型化した筒形碗
16	3-2	005耕作溝 ①層	金属製品	鉄滓		長さ 5.4	幅 4.8	厚み 2,7					
17	3-2	5層	瓦器	椀	楠葉型 IV-1期	(12.0)			体部	内面ヨコナデ上に幅の狭い圏線ミガキ 外面口縁部ヨコナデ、体 部指オサエ→ナデ	N4/0灰	密良	13c後葉、高台の存 在は不明
18	4-2	2層	陶器	擂鉢	堺VIb 13A・B期				底部 1/8以下	内面擂目9本/3.8cm 底部未調整	10R5/4 赤褐	密良	18c後半
19	5-1	2層	土師器		皿N 11B∙C期	(7.2)	1.2	(3.6)	口縁部~ 底部 1/3	内面ヨコナデ 外面指オサエ→ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	17c中葉ヵ
20	6-1	2層	陶器	行平鍋の蓋	京焼 14B期	(16.2)	4.0		体部~口 縁部 1/3	内面回転ヨコナデ、口縁 部ヘラケズリ→灰釉 外面回転ヨコナデ→ヘラケ ズリ3条沈線→灰釉 口縁部露胎	10YR8/4 浅黄橙	密良	19c中葉

表 7-2. 遺物観察表

_	表 1-2.												
番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	□径 cm	器高 cm	底径 台径 ㎝	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考
21	6-1	7層	瓦器	椀	楠葉型 Ⅲ-1期ヵ	(15.0)			体部	内面ヨコナデ、口縁部沈 線1条、体部黒色、摩滅の ため暗文不明 口縁部ヨコナデ、体部指オ サエ→ナデ、黒色	5YR7/l 灰白	密良	12c後葉
22	6-1	001溝下層	弥生土器	広口壷ヵ	後期前新 河内系				体部	内面指圧痕→指ナデ 外面横方向のハケ(5~6 本/cm)→ハケ	7.5YR4/4 褐	粗良	生駒西麓産
23	6-1	001溝下層	弥生土器	広口壷	後期後中				頸部~体 部 1/8以下	内面荒いヨコハケ 外面荒いタテハケ、摩滅	5YR7/4 にぶい橙	粗良	
24	6-1	001溝下層	弥生土器	広口壷	後期後中				口縁部 3/4 ~体部	内面ヨコナデカ、摩滅 外面タテハケ、摩滅	7.5YR6/3 にぶい褐 色	密良	
25	6-1	001溝下層	弥生土器	大型鉢A	後期後中				頸部	内面ヨコハケ 外面口縁部ヨコハケ、口縁 部〜頸部ヨコハケヵ、摩滅 大	5YR7/3 にぶい橙	粗良	内外面摩滅
26	6-1	001溝下層	弥生土器	甕	後期後中			(3.6)	底部 1/2	内面ハケ 外面体部ケズリ+ハケ、底 部ハケ、体部~底部スス 付着	2.5YR6/6 橙	粗良	
27	6-1	001溝中層	弥生土器	弥生形甕 (S)	後期後中	(14.0)				内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコハケ、頸部 荒いタテハケ		粗良	
28	6-1	001溝中層	弥生土器	弥生形甕 (S)	後期後中	(14.0)				内面ヨコハケ 外面口縁部ヨコハケ、口縁 部〜頸部ヨコナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	粗良	
29	6-1	001溝中層	弥生土器	弥生形甕 (L)	後期後中	(19.0)			頸部	内面口縁部〜頸部荒いヨ コハケ、スス付着 外面口縁部荒いヨコハケ、 頸部タテハケ、スス付着	7.5YR4/1 褐灰	粗良	
30	6-1	001溝上層	弥生土器	広口壷	後期後新	(14.0)				内面摩滅 外面ヨコナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	粗 良	
31	6-1	001溝上層	弥生土器	弥生形甕 (S)	後期後新	(14.0)				内面摩滅 外面摩滅	2.5YR6/6 橙	粗 良	
32	6-1	001溝上層	弥生土器	弥生形甕 (S)	後期後新	(15.0)			口縁部~ 肩部 1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、摩滅外面口縁部〜頸部ヨコナデ、体部タタキ(3~4本/cm)	10YR7/3 にぶい黄 橙	粗良	
33	6-1	001溝上層	弥生土器	甕 (M)	後期後新	(19.0)				内面ヨコナデ 外面ヨコナデ		粗 良	
34	6-1	001溝上層	弥生土器	甕 (M)	後期後新	(22.0)				内面ヨコナデカ、摩滅 外面ヨコナデカ、摩滅	7.5YR8/4 浅黄橙	粗良	
35	6-1	001溝中層	弥生土器	甕 (SS)	後期後新	(13.0)				内面ヨコハケ 外面ヨコハケ	5YR7/6橙	粗 良	内外面摩滅
36	6-1	001溝上層	弥生土器	弥生形甕	後期後新				頸部~肩 部 1/8	内面細いハケ 外面タタキ	2.5YR6/6 橙	粗良	
37	6-1	001溝中層	弥生土器	壷	後期後新 近江系ヵ	(10.0)				内面ヨコハケ→ヨコナデ 外面ヨコハケ→ヨコナデ	10YR6/2 灰黄褐	密良	口径が小さく壷ヵ。作 りがていねい。 内外面摩滅
38	6-1	001溝上層	弥生土器	甕	後期後新 近江系ヵ				部	内面タテハケ→ヨコナデ 外面横線文、波状文、横 線文ヵ、5条の工具による 施文	5YR6/4 にぶい橙	粗良	受口状口縁、小型浅 鉢甕。器形は近江系 か、しかし近江系とは 文様施文が異なる。 山城のものか。
39	6-1	001溝上層	弥生土器	浅甕	後期後新 近江系ヵ	(20.0)				内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、斜め刺突文	2.5YR6/4 にぶい橙	密良	
40	6-1	001溝中層	弥生土器	椀型高坏A	後期後新	(13.4)			口縁部~ 底部 1/3	内面口縁部ヨコナデ、体 部ナデ上げ→ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体 部タテナデ、体部下部ヨコ ナデ、脚部タテナデ	5YR7/3 にぶい橙	密良	
41	6-1	001溝中層	弥生土器	椀型高坏A	後期後新				体部〜台部	内面タテナデヵ 外面体部タテナデ(ミガ キヵ)→ヨコミガキ、台部ヨコ ナデ	7.5YR6/2 灰褐	粗良	椀形坏部、台部4穴
42	6-1	001溝上層	弥生土器	小型鉢C	後期後新	(8.0)				内面ヨコハケ→ヨコナデ 外面タテハケ、スス付着	7.5YR7/3 にぶい橙		内外面摩滅

表 7-3. 遺物観察表

番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 ㎝	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 焼成	備考
43	6-1	001溝中層	弥生土器	小型鉢C	後期後 新ヵ	(8.8)				内面ナデカ、摩滅 外面ヨコハケ	7.5YR5/1 褐灰	密良	
44	6-1	001溝中層	弥生土器	小型鉢C	後期後新				頸部~体 部 1/8	内面タテハケ 外面頸部ヨコハケ→ヨコナ デ、体部ナナメハケ→タテ ハケ、タタキ	5YR8/4 淡橙	粗良	内外面摩滅、軟質
45	6-1	001溝中層	弥生土器	小型鉢D	後期後新	(16.0)			口縁部~ 体部 1/8	内面ヨコハケ 外面口縁部ヨコナデ→ヨコ ハケ、体部一部ミガキ	7.5YR6/2 灰褐	密良	
46	6-1	001溝中層	弥生土器	広口壷	庄内古古	(16.4)			口縁部~ 頸部 1/8	内面ヨコナデ、スス付着 外面口縁部〜頸部ヨコナ デ、頸部タテハケ、スス付 着	7.5YR5/3 にぶい褐	粗良	内外面摩滅、スス付 着
47	6-1	001溝中層	弥生土器	広口壷	庄内古古	(20.0)			口縁部~ 頸部 1/8以下	内面ヨコハケ→ヨコナデ 外面タテハケ→ヨコナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	粗良	
48	6-1	001溝上層	弥生土器	弥生形甕 (SS)	庄内古古	(13.1)			口縁部~ 肩部 1/8	内面指オサエ→ナデ、摩 滅 外面摩滅	5YR5/6 明赤褐	粗良	
49	6-1	001溝上層	弥生土器	弥生形甕 (SS)	庄内古古	(12.0)			体部	内面口縁部〜頸部指オサエ→ヨコナデ、体部ケズリ 外面口縁部〜頸部指オサエ→ヨコナデ、体部タテハケ、スス付着	7.5YR8/3 浅黄橙	粗良	全体に摩滅、外面ス ス付着
50	6-1	001溝中層	弥生土器	庄内系高坏 A	庄内古古				体部 1/8	内面タテミガキ 外面坏部側面ヨコミガキ、 ナデ、底部放射状ミガキ	10YR6/3 にぶい黄 橙	粗良	
51	6-1	001溝中層	弥生土器	直口壷A	庄内古新	(15.0)			口縁部~ 頸部 1/4	内面口縁部〜頸部ヨコナ デ、体部ヨコハケ 外面口縁部ヨコナデ、口 縁部〜頸部ヨコハケ、体部 ヨコナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	粗良	
52	6-1	001溝中層	弥生土器	加飾性垂下口縁壷	庄内古新	(16.0)				内面ヨコナデ→施文 外面口縁部クシ描き波状 文、タテハケ2段、ヨコナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	密良	幅約1.2cmのクシに て、器台上面に波状 文3段と3段目と2段目 の間に4点刺突文1日 を施す。垂下する外 縁上にも波状文が見 える。
53	6-1	001溝中層	弥生土器	庄内形甕 (SS)	庄内古新	(15.0)				内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	2.5YR7/4 淡赤橙	粗 良	内外面摩滅
54	6-1	001溝中層	弥生土器	弥生形甕 (M)	庄内古新 河内系	(18.0)			頸部	内面口縁部〜頸部ヨコハ ケ→ヨコナデ、体部ケズリ 外面ヨコハケ→ヨコナデ	5YR4/2 灰褐	密良	胎土生駒西麓産
55	6-1	001溝上層	弥生土器	弥生形甕 (M)	庄内古新	(21.0)			口縁部~ 頸部 1/8	内面口縁部〜頸部ヨコハケ、体部ナナメハケ外面口縁部〜頸部ヨコハケ、頸部刺突状ハケ目、摩滅	2.5YR6/6 橙	粗良	
56	6-1	001溝中層	弥生土器	中型鉢A	庄内古新	(20.0)			頸部	内面摩滅 外面口縁部〜頸部ヨコナ デ、体部タテハケ目	7.5YR7/4 にぶい橙		
57	6-1	001溝上層	弥生土器	複合口縁壷	庄内中ヵ				頸部 1/8	内面ヨコナデ、ヨコハケ 外面ヨコナデ→一部タテ ハケ	7.5YR6/3 にぶい褐	粗良	
58	6-1	001溝上層	弥生土器	弥生形甕 (S)	庄内中	(14.0)			口縁部~ 頸部 1/8	内面ヨコハケ 外面ヨコハケ	5YR6/6 橙	粗良	
59	6-1	001溝上層	弥生土器	弥生形甕 (S)	庄内中	(15.4)			口縁部~ 体部 1/8	内面ハケ目 外面口縁部ヨコナデ、頸 部ハケの板圧痕、体部ヨコ ナデ→ハケ、口縁部スス 付着	5YR5/6 明赤褐	粗良	全体に摩滅
60	6-1	001溝中層	弥生土器	甕 (SS)	庄内中	(13.0)			口縁部~ 頸部 1/8	内面口縁部〜頸部ヨコハケ、体部ケズリ ケ、体部ケズリ 外面口縁部〜頸部ヨコハケ、体部タテハケ、スス付着	7.5YR7/3 にぶい橙		
61	6-1	001溝中層	弥生土器	甕 (SS)	庄内中	(14.2)			口縁部~ 頸部 1/8	内面ヨコハケ→ヨコナデ、 板によるナナメナデ 外面口縁部〜頸部ヨコナ デ→ヨコハケ→ヨコナデ、 体部細いタテハケ	5YR6/4 にぶい橙	粗良	口径(14.2)→(17.2)カ

表 7-4. 遺物観察表

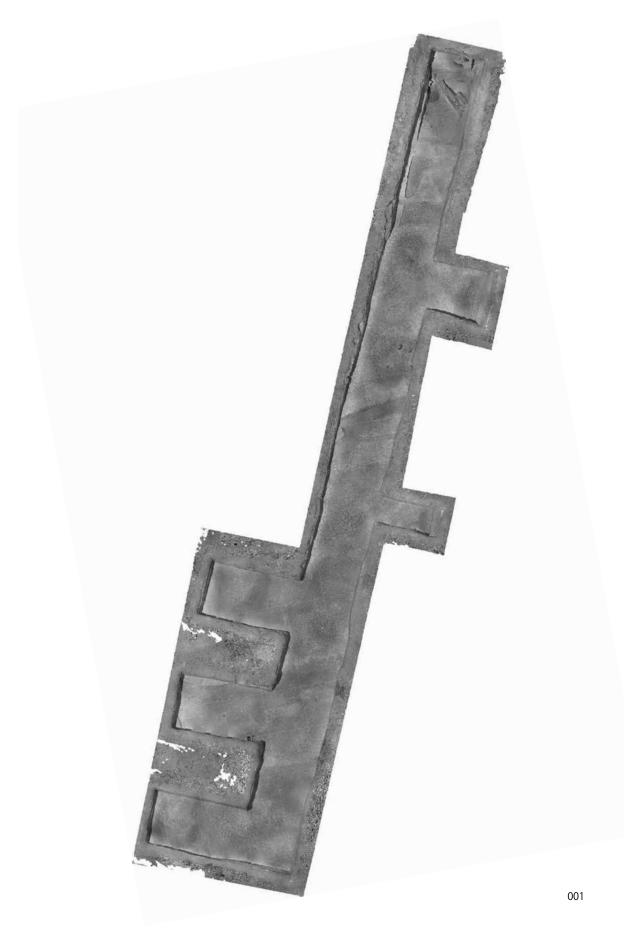
番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 焼成	備考
62	6-1	001溝中層	弥生土器	直口壷A	庄内新	(15.6)				内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	粗良	口径小さく、高いのに 比べ頸が小さいこと から壷力。甕にしては 口径に比して頸が狭い。外面上部にスス 付着。内外面摩滅
63	6-1	001溝上層	弥生土器	直口壷Bor 複合口縁壷 B	庄内新	(22.0)				内面タテハケ→ヨコナデ 外面タテハケ→ヨコナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	粗良	
64	6-1	001溝上層	弥生土器	庄内形甕 (M)	庄内新	(16.0)				内面ヨコハケ→ヨコナデ 外面ヨコナデ	7.5YR5/2 灰褐	粗良	生駒西麓産とは異な る。
65	6-1	001溝上層	弥生土器	弥生形甕	布留古古	(11.0)			口縁部~ 肩部 1/8	内面ナデカ 外面口縁部〜頸部ヨコナ デカ、体部タタキ	2.5YR7/6 橙	粗良	全体に摩滅
66	6-1	001溝中層	弥生土器	広口壷カ	後期前 新ヵ			(4.8)	底部 1/4	内面ナデ上げ 外面体部ミガキ、タテ細い ハケ、ナデ	2.5YR6/4 にぶい橙	密良	
67	6-1	001溝中層	弥生土器	細頸壷ヵ	後期後 中ヵ			(3.6)	底部 1/3	内面放射状のタテハケ 外面体部タテミガキ、底部 ハケ	7.5YR7/3 にぶい橙	密良	
68	6-1	001溝中層	弥生土器	小型鉢Cヵ	後期後 新ヵ			3.2	体部一部 底部	内面放射状のタテハケ 外面体部タタキ→タテハ ケ、底部未調整、スス付着	5YR7/6 にぶい橙	密良	外面スス付着
69	6-1	001溝上層	弥生土器	弥生形甕ヵ	後期後 新ヵ			3.5	底部	内面放射状へラ、黒変 外面体部タタキ、底部未調 整、黒斑	5YR6/6 橙	粗良	
70	6-1	001溝中層	弥生土器	広口壷ヵ	庄内古ヵ			4.0	体部一部 底部	内面板ナデ上げ 外面体部板ナデ上げ、底 部未調整、底部中央ヘラ ケズリ	10YR7/2 にぶい黄 橙	粗良	
71	6-1	001溝中層	弥生土器	広口壷ヵ	庄内古ヵ			(5.0)	底部 1/6	内面ナデ上げ 外面体部ハケ→一部ケズ リ、底部未調整	10YR5/2 灰黄褐	密良	
72	6-1	001溝中層	弥生土器	弥生形甕ヵ	庄内古ヵ			(3.6)	底部 1/4	内面ヨコナデ 外面体部タタキ→ヨコハ ケ、底部未調整	7.5YR4/1 褐灰	粗良	
73	6-1	001溝中層	弥生土器	弥生形甕ヵ	庄内古ヵ			(4.0)	底部 1/4	内面ハケ 外面体部タタキ→一部指 ナデ、底部中央に高台状 の凹み、未調整	7.5YR4/2 灰褐	密良	
74	6-1	001溝中層	弥生土器	弥生形甕ヵ	庄内中ヵ			(3.8)	体部~底 部 1/8以下	内面ナデ 外面体部タタキ4本/cm、 底部ナデ	10YR6/2 灰黄褐	粗良	
75	6-1	005土坑	古式土師器	高坏A	庄内古古				体部	内面口縁部~坏部側面タ テミガキ 外面口縁部~坏部側面ヨ コハケ	10R5/6 赤	粗良	庄内系高坏
76	6-3	5層	古式土師器	甕	布留中古	(14.8)			口縁部~ 体部 1/8	内面摩滅 外面ハケ、摩滅	5YR6/6 橙	密良	
77	6-3	5層	軒丸瓦			瓦当 径 (16.0)	瓦当 厚 2.5		瓦当 1/8		N3/0 暗灰		巴文力、珠文(3)□残、 直径15~16m余り 11c後葉~12c代
78	7-2	5層	土師器	Ш	皿N 6C期	(11.4)			口縁部~ 体部 1/8	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体 部未調整	10YR7/3 にぶい黄 橙	密良	13c中葉
79	7-2	5層	須恵器	甕or壷					頸部~体 部 1/8	内面ナデ、摩滅 外面タタキ→ヨコナデ	10YR8/1 にぶい黄 橙	密良	内面摩滅するが、叩きなし。7c末~8c前 葉の遺物か。
80	7-6	5層	平瓦						不明	凹面布目痕摩滅 凸面菱格子タタキ、摩滅	2.5YR7/1 灰白	密良	御所池瓦窯の瓦 7c後葉~8c前葉

\* 段階区分の略記載は、「弥生土器後期前半新段階」→「後期前新」、「弥生土器後期後半中段階」→「後期後中」、「弥生土器後期後半新段階」→「後期後新」、「庄内式古段階古相」→ 「庄内古古」、「庄内式古段階新相」→「庄内古新」、「庄内式中段階」→「庄内中」、「庄内式新段階」→「庄内新」、「布留式古段階古相」→「布留古古」とした。

# 写 真 図 版



調査前の調査地<右端が JR 島本駅、左端が沖積扇状地上位面 ( 段丘 )、中央奥が天王山> (南西から)



1-1. 1-1 区 第 1 遺構面 調査区全景 (オルソ写真)



2-1. 1-1 区第1遺構面調査区全景(北西から)



2-2. 1-1 区第1遺構面調査区全景(東から)



3-1. 1-1 区第1遺構面001溝(北西から)

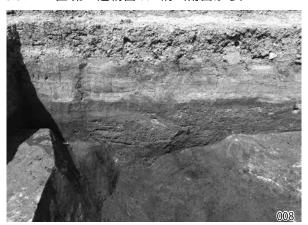




3-4. 1-1 区第1遺構面001溝(南東から)



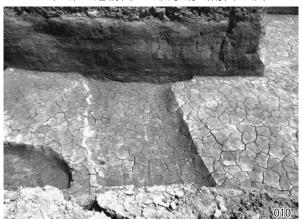
3-3. 1-1 区第1遺構面001溝(南西から)



3-5. 1-1 区第1遺構面001溝完掘状況(南西から)



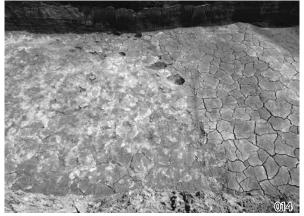
4-1. 1-1 区第1遺構面002洪水溝(南西から)



4-2. 1-1 区第1遺構面003洪水溝(南西から)



4-4. 1-1 区第1遺構面016溝(南から)



4-6. 1-1 区第1遺構面030・031 杭列(南西から)





1-1 区第1遺構面016溝(北から)



4-7. 1-1 区第1遺構面017・019洪水溝(南西から)



5-1. 1-1 区第1遺構面020溝(南から)



5-3. 1-1 区第1遺構面024小畦(北から)



5-5. 1-1 区第1遺構面021・022溝(北から)



5-2. 1-1 区第1遺構面020溝(北から)



5-4. 1-1 区第1遺構面021・022溝(東から)



5-6.1-1区第1遺構面021溝内の005出土状況(東から)

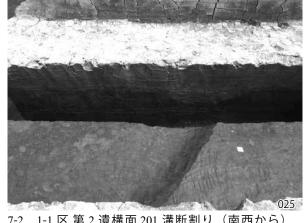
6-1. 1-1 区第2遺構面調査区全景(北西から)



6-2. 1-1 区第2遺構面調査区全景(東から)



7-1. 1-1 区第2遺構面201溝(南西から)



7-2. 1-1 区第2遺構面201溝断割り(南西から)



7-3. 1-1 区第2遺構面201溝断割り(西から)



7-4. 1-1 区第2遺構面201溝断割り壁面(南西から)



7-5. 1-2 区第1遺構面調査区全景(南から)



7-6. 1-2 区第1遺構面北壁断面(南西から)



7-7. 1-2 区第1遺構面平面全景(南西から)



7-8. 1-2 区第2遺構面北壁断面(南西から)



8-1. 2-1 区第1遺構面調査区全景(南西から)



8-2. 2-1 区第1遺構面調査区全景(南から)



8-4. 2-1 区第1遺構面001溝(東から)



8-3. 2-1 区第1遺構面西壁断面全景(南東から)



8-5. 2-1 区第1遺構面北壁断面全景(南東から)



9-1. 2-2 区第2遺構面調査区全景1(南から)



9-2. 2-2 区第2遺構面調査区全景2(南から)



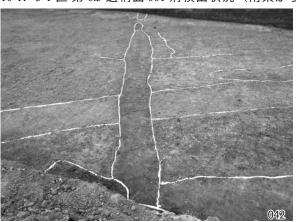
9-3. 2-2 区第2遺構面西壁断面全景(南東から)



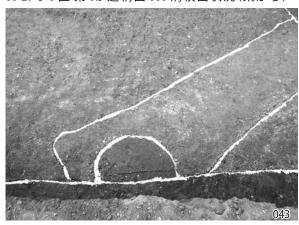
9-4. 2-2 区第2遺構面北壁断面全景(南から)



10-1. 3-1 区第 0.5 遺構面 001 溝検出状況(南東から)



10-2. 3-1 区第 0.5 遺構面 001 溝検出状況(東から)



10-3. 3-1区第0.5遺構面002土坑検出状況(南東から)



10-4. 3-1 区第 0.5 遺構面 001 溝、002 土坑(北西から)



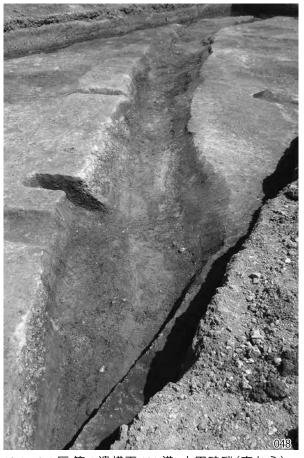
11-1. 3-1 区第1遺構面調査区全景(オルソ写真)



12-1. 3-1 区第1遺構面調査区全景(北東から)



12-2. 3-1 区第1遺構面101溝、水田畦畔(北東から)



13-1. 3-1 区第1遺構面101溝、水田畦畔(南から)



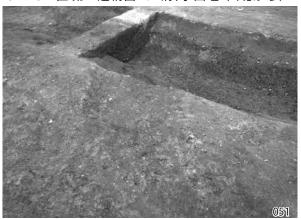
13-3. 3-1 区第1遺構面114水口(東から)



13-5. 3-1 区第1遺構面118水口(北から)



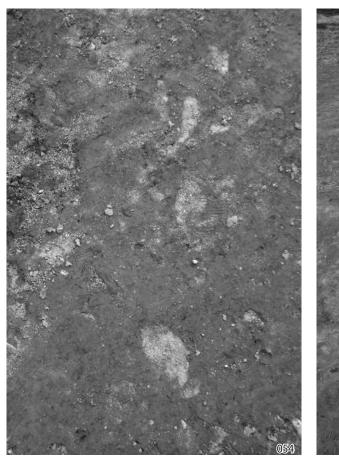
13-2. 3-1 区第1遺構面101溝、水田畦畔(北から)



13-4. 3-1 区第1遺構面115水口(南西から)



13-6. 3-1 区第1遺構面116水口(西から)



14-1. 3-1 区第1遺構面126水田面状況(南から)



14-3. 3-1 区 第 1 遺構面 127 水田面状況(南から)



14-2. 3-1 区第1遺構面126水田面状況(南から)



14-4. 3-1 区第1遺構面128・129水田面状況(南から)



15-1. 3-1 区第2遺構面調査区全景(オルソ写真)



16-1. 3-1 区第2遺構面調査区全景(南西から)



16-2. 3-1 区第2遺構面調査区全景(北東から)



17-1. 3-1 区第2遺構面258~263水田(北東から)



17-2. 3-1 区第2遺構面264~267水田(北東から)



17-3. 3-1 区第2遺構面268~272水田(北東から)



17-4. 3-1 区第2遺構面264~272水田(北東から)



17-5. 3-1 区第2遺構面259~269水田(南東から)



17-6. 3-1 区第2遺構面258~265水田(南東から)



17-7. 3-1区第2遺構面251~257水田(北西から)



17-8. 3-1 区第2遺構面266~272水田(北西から)



3-1 区第2遺構面完掘全景(南西から)



18-2. 3-1 区南張出し 第1遺構面 完掘全景(南西から)



18-3. 3-1 区南張出し第2遺構面 273~277水田(南から) 18-4. 3-1 区南張出し第2遺構面 完掘全景(南西から)





19-1. 3-2 区第 0.5 遺構面 完掘全景(北東から)



19-3. 3-2 区第2遺構面完掘全景(北東から)

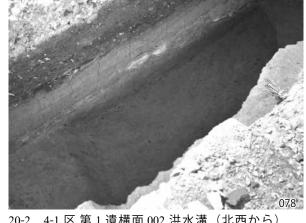


19-2. 3-2 区第 0.5 遺構面 005 ~ 009 耕作溝 (南から)



19-4. 3-2 区第2遺構面完掘全景(南西から)

20-1. 4-1 区第1遺構面検出全景(南西から)



20-2. 4-1 区第1遺構面002洪水溝(北西から)



20-3. 4-1 区第2遺構面完掘全景(南西から)



20-4. 4-2 区北半 第1遺構面 検出状況(南西から)



20-5. 4-2 区南半第1遺構面 003溝(南西から)



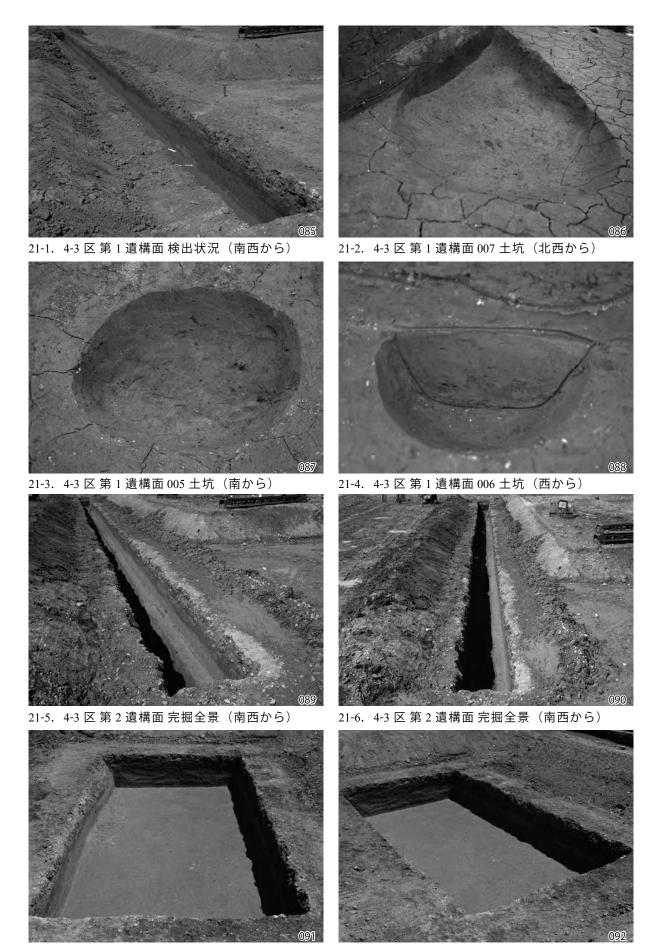
20-6. 4-2 区南半第1遺構面 003溝(南東から)



20-7. 4-2 区北半 第 2 遺構面 完掘全景(南西から)



20-8. 4-2 区北半 第 2 遺構面 完掘全景(南西から)



21-7. 5-1 区 第 1 遺構面 完掘全景(南西から) 21-8. 5-1 区 第 1 遺構面 完掘全景(西から)



22-1. 6-1 区第1遺構面完掘全景(南から)



22-2. 6-1 区第1遺構面完掘全景(西から)



22-3. 6-1 区第1遺構面完掘全景(南東から)



22-4. 6-1 区第1遺構面 001・002 溝、003 ~ 009 土坑 (南西から)



22-5. 6-1 区第1遺構面 002 溝、003 ~ 009 土坑 (西から)



23-1. 6-1 区第1遺構面001溝(南から)



23-4.6-1区第1遺構面002溝、003土坑(南西から)



23-6. 6-1 区第1遺構面005・006・008土坑(西から)



23-2. 6-1 区第1遺構面001溝(北から)



23-3. 6-1 区第1遺構面004土坑(北から)



23-5.6-1区第1遺構面001溝、004~008土坑(南西から)



23-7. 6-1 区 第1遺構面 001 溝下層出土土器(東から)

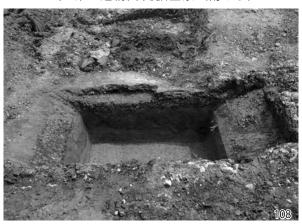




24-2. 6-3 区第1遺構面完掘全景(南から)



6-4 区第1遺構面完掘全景(南から)



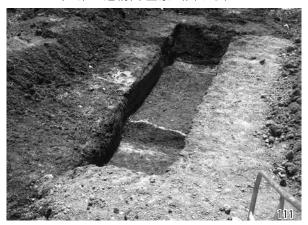
24-4. 6-5 区第1遺構面001溝(南西から)



24-5. 7-1 区第1遺構面全景(西から)



24-6. 7-2 区第1遺構面完掘全景(南東から)



24-7. 7-3 区第1遺構面全景(西から)



24-8. 7-4 区第1遺構面完掘全景(南東から)



25-1. 7-5 区第1遺構面完掘全景(南東から)



25-4. 7-6 区第1遺構面完掘全景(南東から)



25-2. 7-5 区第1遺構面完掘全景(北西から)



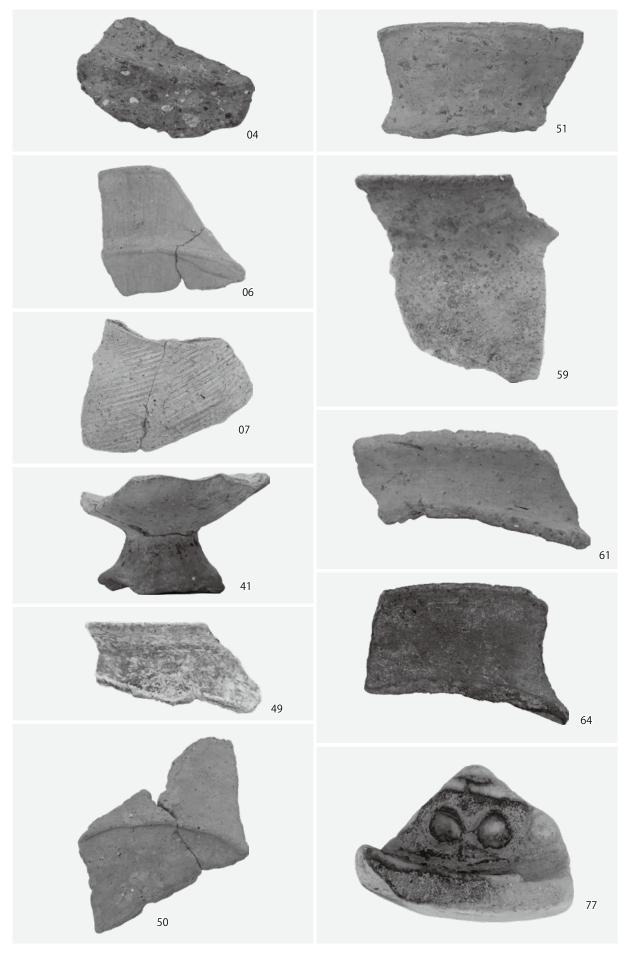
25-3. 7-5 区第1遺構面完掘全景(西から)



25-5. 7-6 区第1遺構面001溝(南西から)



25-6. 7-6 区第1遺構面002溝(南西から)



26-1. 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	しる	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしょ									
書名	島四	島本町文化財調査報告書									
副書名	尾L	尾山遺跡発掘調査報告書									
シリーズ名	島四	島本町文化財調査報告書									
シリーズ番号	第4	第 48 集									
編著者名	木林	木村友紀・辻 広志(編)・日紫喜勝重・木村靖子・田中羽留香									
編集機関	島四	<b>本町教育委員会、</b> 村	朱式会社!	島田組							
所在地	<b>∓</b> 58	81-0034 大阪府八尾	[市弓削町]	南3丁目20	)番地 2 TEL07	2-949-2410					
発行機関	島四	<b>上町教育委員会</b>									
所在地	₹ 6	18-8570 大阪府三島	島郡島本町	桜井二丁目	11番1号 TEL0	75-961-5151					
発行年月日	202	23 年(令和 5 年)3	3月31日								
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		前在地	コード 市町村 遺跡番号		緯度・経度	調査期間	調査面積 m²	調査原因			
まやまいせき 尾山遺跡	Alts (A. L.) 三島郡 二丁目	慧本前桜井 地内	27301	28	北緯 34° 52′ 48″ 東経 135° 39′ 40″	2022.05.16 ~ 2022.06.28	1,426 m²	共同住宅建設			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な	遺構			特記事項				
		古代~中世	耕作溝・溝・土坑・水田		土師器・瓦器・須						
尾山遺跡	集落生産	弥生時代後期~古墳 時代前期	杭列・溝・ 水田・土均		弥生土器・古式土		小区画水田				
		弥生時代中期	溝・水田		突帯文土器・弥生	小区画水田					
要約	今回の調査地は、居住域の東側の生産域(水田)に当たり、弥生時代中期と弥生時代後期~古墳時代前期の水田を発掘調査した。										

### 島本町文化財調査報告書第48集

尾山遺跡発掘調査報告書

発行年月日 2023年3月31日

編 集 島本町教育委員会

大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号

株式会社 島田組

大阪府八尾市弓削町南3丁目20番地2

発 行 島本町教育委員会

大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号

印刷·製本 三星商事印刷株式会社

京都市上京区七本松通下長者町下る三番町 273 番